

長畠山北古墳群

津山市教育委員会 1992.3



序

長歓山北古墳群は民間宅地造成工事業に伴い発掘調査された遺跡であります。事業計画予定地内には9基の古墳があり、開発側と保存の協議を重ねてまいりましたが、最終的に発掘調査を余儀なくされたものであります。当初、調査対象は古墳9基と考えて調査していたところ、古墳の下層に弥生時代の集落が存在することが判明いたしました。しかし、時間的、予算的制約はこのことを許してくれません。とりあえず古墳の調査を早期に終了させ、弥生時代の調査にとりかかりました。決して十分とは言えませんが、当初の目的は達成することができたと確信いたしております。今回の調査では横穴式石室導入前の古墳の実態、弥生時代後期の流水文土器の出土など多く成果を上げることができました。これも関係者各位の御指導、御助言、御協力の賜ものと深く感謝申し上げる次第であります。

平成4年3月31日 津山市教育委員会

教育長 森 定 貞 雄

例　　言

1. 本書は民間宅地造成業に伴う長歓山北古墳群の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査にかかる経費はすべて原因者の負担によるものである。
1. 発掘調査は津山市教育委員会行田裕美、保田義治、木村祐子が担当した。
1. 本書の執筆はI～III-1、IV-1を行田、III-2、IV-2を木村が担当した。
1. 本書に使用したレベル高は海拔高である。また、方位は磁北である。
1. 本書第1図に使用した「長歓山北古墳群と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1(津山市東部)を複製したものである。
1. 出上遺物、図面等は津山市教育委員会津山弥生の里文化財センターに保管している。

目　　次

I	遺跡の立地と周辺の遺跡	1	III	調査の記録	7
1	遺跡の立地	1	1	古墳の調査	7
2	周辺の遺跡	1	2	弥生時代の調査	60
II	調査の経過	3	IV	まとめ	76
1	調査に至る経過	3	1	古墳の調査	76
2	調査の経過	3	2	弥生時代の調査	80
3	調査体制	4			

I 遺跡の立地と周辺の遺跡

1 遺跡の立地

長歛山北古墳群は岡山県津山市国分寺1,152-1番地に所在する。この場所は標高178.6mを測る觀音山から南に派生した丘陵の先端部にあたる。先端部付近は南から南東方向へ向きを変えるが、今回調査した1号～9号の古墳は頂度この部分に位置する。平野部の水田面との比高差は約20mを測る。遺跡のすぐ南には県道西吉田・大崎線が東西に走っている。北側は東方向から小支谷があり込んでいる。この谷の北斜面には草木の中に小道が見え隠れしている。これは遺跡から西方約700mのところに位置する美作国分寺跡へと通じる古代の街道である。遺跡はこれら古代と現代の両街道に挟まれた舌状台地に形成されている。

さらに、この地は最近まで牧場として使用されており、古墳の間に牛舎、サイロ等の施設も点在していた。古墳及びその周辺は乳牛が放牧されていたためかつては草地であった。ただ、牧場が閉鎖されてから、調査の開始まで若干の時間が経過していたこともあり、調査前は全面肯の丈もある雑草とクマザサに覆われた状況であり、古墳の所在さえも定かでなかった。

2 周辺の遺跡

長歛山北古墳群の位置する津山市国分寺の周辺、すなわち、河辺、日上、瓜生原、金井地区には横穴式石室導入前の比較的古い古墳が多く認められる。その代表的なものを第1図に掲載した。本古墳群の埋葬形態には木棺直葬と堅穴式石室が用いられているが、木棺直葬が大半を占める。その代表的なものは現存約60基からなる日上歛山古墳群である。他に、六ッ塚古墳群長歛山古墳群、大畑古墳なども同様の埋葬方法が用いられている。横穴式石室導入前の埋葬形態には他に堅穴式石室、箱式石棺、礫椁等がある。堅穴式石室をもつものは茶山1号墳がある。箱式石棺をもつものには飯綱神社3号墳、兼田丸山古墳、茶山2号墳、隠里古墳群、崩レ塚古墳群等がある。礫椁墳としては日上和田古墳、六ッ塚5号墳等があげられる。

日上天王山古墳は美作地方最古の前方後円墳と考えられている古墳である。これはよく指摘されていることであるが、吉井川筋の津山盆地の玄関口にあたるという地理的条件がもたらした結果と考えるのが妥当であろう。この後、この地に花開いた古墳文化は横穴式石室導入の時期まで色々な埋葬方法を用いながらも脈々と古墳形成を育んできた。そして横穴式石室の採用と共に古墳は姿を消していくというアウトライนは想定できよう。ただ、この地域に横穴式石室墳が全く皆無であるというわけではない。決して群を形成するようなことはなく、小規模な形で点在するという事実関係だけは指摘しておかなければならない。



- | | | | |
|-----------|------------|------------|------------|
| 1 長歟山北古墳群 | 2 正仙塚古墳 | 3 飯綱神社古墳群 | 4 能満寺古墳群 |
| 5 六ツ塚古墳群 | 6 玉琳大塚古墳 | 7 兼田丸山古墳 | 8 セウ田古墳 |
| 9 井口草塚古墳群 | 10 天満神社古墳群 | 11 日上歟山古墳群 | 12 日上天王山古墳 |
| 13 日上和田古墳 | 14 美作國分尼寺跡 | 15 飯塚古墳 | 16 美作國分寺跡 |
| 17 長歟山古墳群 | 18 茶山古墳群 | 19 一貫西古墳 | 20 一貫東古墳群 |
| 21 金井古墳群 | 22 根ノ山古墳 | 23 大畑古墳 | 24 隠里古墳群 |
| 25 小原古墳群 | 26 刷レ塚古墳群 | | |

第1図 長歟山北古墳群と周辺主要遺跡分布図 (S = 1 : 30,000)

II 調査の経過

1 調査に至る経過

平成2年7月26日付で大阪府貝塚市石才96-29岸本定曠氏より文化財保護法第57条の2第1項にもとづく埋蔵文化財発掘届が津市教育委員会に提出された。発掘届の内容は宅地造成である。長歓山古墳群現存11基の内9基が工事の対象となるため、津市教育委員会としても現状保存の協力をお願いした。しかしながら、保存すると造成ができないという結論に達し、記録保存措置やむなしという前提で、平成2年8月1日岡山県教育委員会に進達した。その後8月6日付教文壇第2939号で岡山県教育委員会から発掘調査を実施するよう通知があった。この文書を原団者の岸本定曠氏に伝達すると共に、平成2年9月1日付津教文第79号で文化財保護法第98条の2第1項の規定により、埋蔵文化財発掘調査通知書を岡山県教育委員会を経由して文化庁長官宛提出した。

2 調査の経過

発掘調査は10月22日から開始した。調査対象地は前述のように背の丈程の雑草とクマザサに覆われていたため、事前に草刈り作業を余儀なくされた。これは大変な労力であった。11月から1号、2号、3号墳の表土剥ぎに入ったが、クマザサの根がはびこっていてスコップも入らない状況でかなりの時間を費した。このため、平成3年3月末日という時間的制約もあり、4号墳から根っこだけバックホーを使用して除去するという方法を採用した。

1号墳から順次表土剥ぎを実施し、墳丘を清掃した。この際、4号墳、5号墳、6号墳、8号墳、9号墳からは頂部から斜面部にかけて須恵器甕形土器の破片が多量に散乱していた。このことから、墳頂に甕形土器が置かれていたことが理解された。

主体部の振り下げは、全ての表土剥ぎが終了した平成3年1月14日から開始した。1号墳から順に主體部を検出していった。2号墳は西側半分が削平をうけており主體部は遺存していないかった。3月10日、8号墳の主體部調査時に大雨が降り、上層の観察用の壁面が崩壊した。このため一部の土層断面が実測不可能となった。個々の古墳の詳細については調査の記録にゆずることにする。

5号墳の表土剥ぎの段階で跡生住居があることが判明した。さらに、6号墳、8号墳、の下層にも住居址が存在することがわかり、古墳の調査を早く済ませ跡生時代の調査に入らざるを得なくなつた。従つて、古墳の調査終了後、再びバックホーを借り上げ墳丘の除去を行い下層の調査を実施した。3月28日に5号墳の石室の一部の実測を除き調査を終了した。

この間、2月17日には「美作の自然と文化財を守る会」の見学会を実施した。あいにくの大雪で参加者が少なかったが、熱心な見学者には頭の下がる思いであった。3月3日には現地説明会を開催した。約50人の参加であった。

3 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

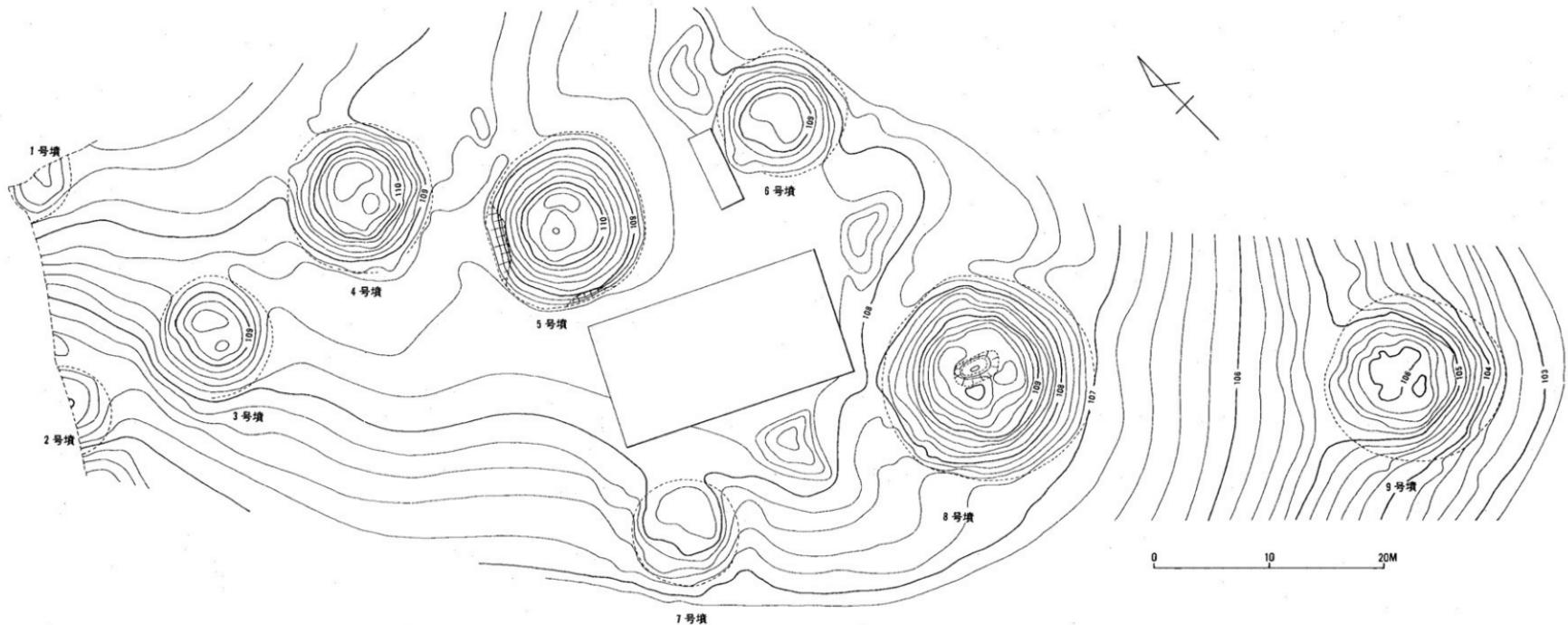
津山市教育委員会	教育長	萩原賢二（～H3. 6・25）
	"	森定貞雄（H3. 7・12～）
教育次長	藤田公男（～H3. 3・31）	
	"	村上 光（H3. 4・1～）
文化課長	須江尚志（～H3. 3・31）	
	"	日下泰洋（H3. 4・1～）
	"	森元弘之（H3. 6・1～）
文化係長	柳山三千穂（～H3. 5・31）	
文化財センター所長（嘱託）	須江尚志（H3. 6・1～）	
	" 次長	中山俊紀（H3. 6・1～）
主 事（調査担当）	行田裕美	
" (")	保田義治（～H3. 3・31）	
" (")	木村祐子	

整理作業 野上恭子、岩本えり子、家元博子、内田まち子、赤坂博子、中谷幸子、田中裕子
尚、発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。快よく作業を引き受け
て下さった下記の方々に心から感謝の意を表したい。

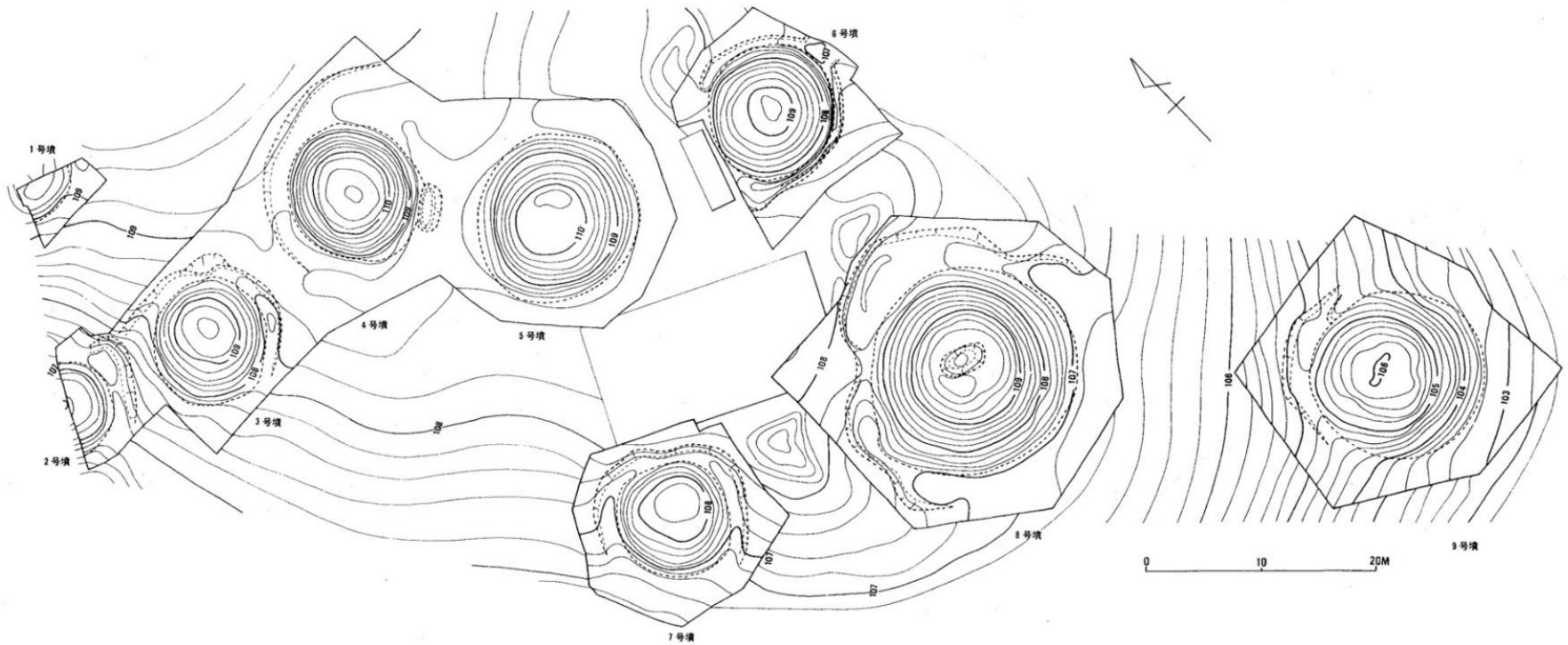
山本英夫 井汲 茂 岡本鶴雄 岡本 登 重満岩男 中村国章 永谷民次郎 梶岡辰男
高山リカ

他にも、発掘調査から報告書作成にいたるまで、わざわざ現地に足を運んでいただき、多く
の方々から指導助言、協力をいただいた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

近藤義郎 水内昌康 河木 清 小谷善守 立石盛詞 仁木正視 福田正継 安川豊史
松岡浩太郎 吉田 昌 伊藤 晃 亀田修一 下沢公明 井上和人 土居 敏 田中清美
安井 悟 氏平昭則 渡哲夫 中山俊紀 韓式土器研究会の皆さん



第2図 長歓山北古墳群調査前地形測量図 (S = 1 : 300)



第3図 長歟山北古墳群調査後地形測量図 (S = 1 : 300)

III 調査の記録

1 古墳の調査

長畠山北古墳群は現存11基の古墳群からなる。この内、9基の古墳を調査したことになる。残りの2基の古墳は1号墳の北側の尾根上に位置する。いずれも径約10mの円墳である。この2基の古墳の北側に1基あったという話であるが、現存はすでにホクラクの敷地となっており定かではない。いずれにしても、11~12基の古墳群であることにはまちがいない。

調査した9基の古墳の内、1・2号墳は道路あるいは駐車場により墳丘の半分近くが失われていた。残りの3~9号の古墳は墳丘こそは完存していたが、いずれも盜掘の痕跡が認められた。中でも5号と8号はかなり大きな凹みとなっていた。しかしながら、想定していたよりも各主体部の遺存状態は良かった。

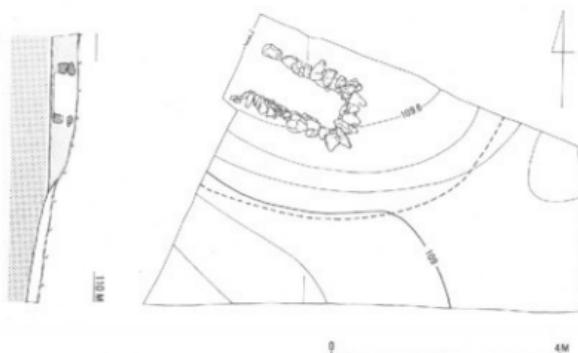
以下、各古墳ごとに概要を述べることにする。

1号墳（第4~7図）

1号墳は墳丘の北側が道路で、西側が駐車場で大きく削平を受けしており全体の4分の1が遺存するだけである。

主体部は西壁を除き遺存している。しかし墳丘全体の位置関係からすると中心からかなり南へよった感がある。

これは土層断面（第5図の上層8）が示すように後生削平をうけた結果である。推定復元すると径約8mの円墳になる。盛土は旧表土から現存墳丘頂部まで50cmを測る。調査前から



第4図 1号墳地形測量図 (S = 1 : 100)

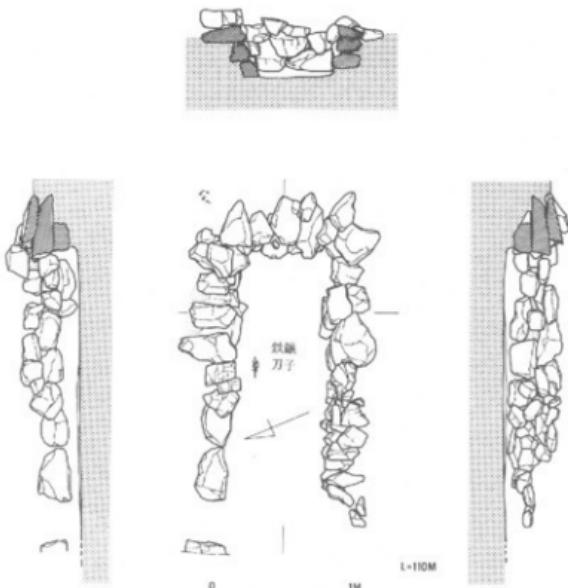


第5図 1号墳墳丘断面図 (S = 1 : 50)

石室の石が露
出しており、
主体部は竪穴
式石室である
ことが判明し
ていた。

石室は幅約
60cmで西側の
壁は不明であ
る。石室の構
築の仕方は非
常に雑で、不
規則に積んで
いる。ほぼ3
段ぐらいが遺
存している。

本来はもう少
し高い位置ま

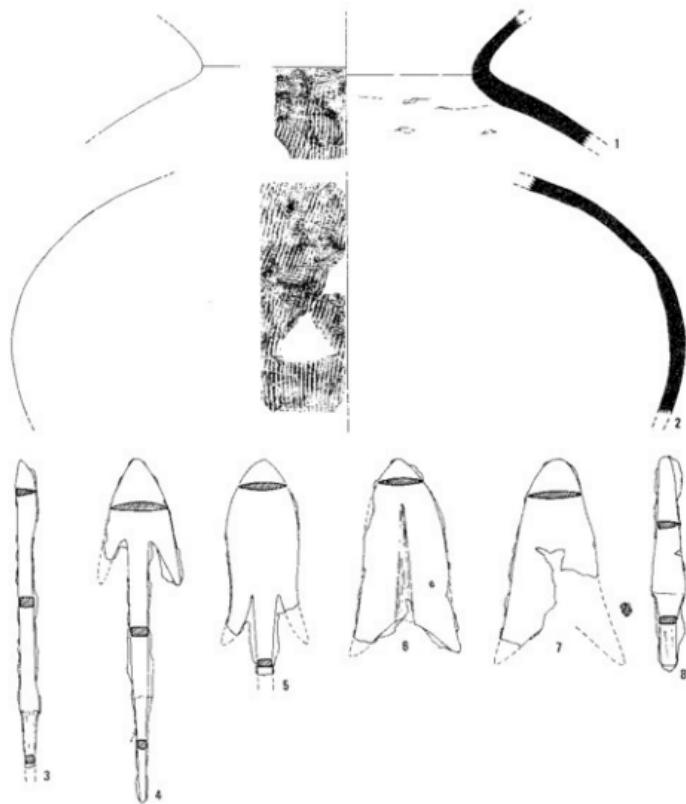


第6図 1号墳石室平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

であったと考えられる。この種の石室の天井の問題であるが、平らな一枚石で上を覆ういわゆる天井石の存在は確認されなかった。これは恐らく持ち去られたのではなく、最初から天井石を使用していなかったものと推定される。そして、それに代わるものとして板材が想定される。遺物としては、墳丘表土除去作業中に須恵器彫形土器片、主体部床面から鉄器6点が出土しただけである。第7図1、2は彫形土器の破片である。接合はしないが同一個体である。3～7は鉄器である。6、7は無頸のものと考えられる。6の中央部には鐵を固定した木質が銹着している。さらに、裏面には布目の痕跡もみられる。8は小型の刀子である。これらの鉄器はいずれも一ヶ所にまとまって出土した。

2号墳（第8～10図）

2号墳は1号墳の南20mのところに位置する。1号墳同様西側は駐車場により削平を受けており、東側半分が遺存するだけである。復元すると径8mの円墳である。北から南へ下がる斜面に位置するため、北側は周溝の堀削による削り出しでほとんど盛土がない。一方、南側の墳丘はほとんど盛土による。墳丘のまわりには、現地表面から約90cmを測る周溝が位置する。第9図の1層は造成土である。厚いところでは35cmを測る。調査前は造成土であることが不明だったので周溝の存在は想定できなかつたが、この土を除去するとゆるやかな凹みが確認できた。

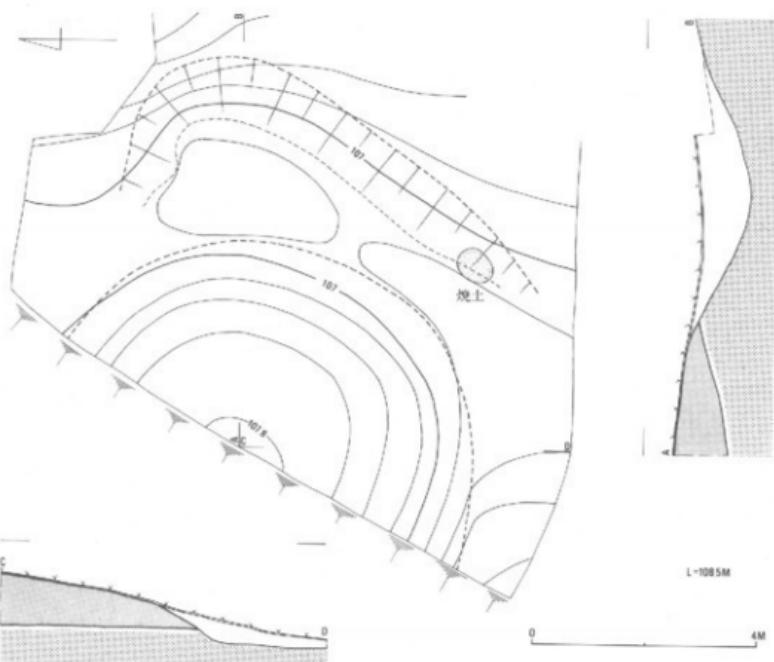


第7図 1号墳出土遺物 (1, 2 = 1 : 4, 3~8 = 1 : 2)

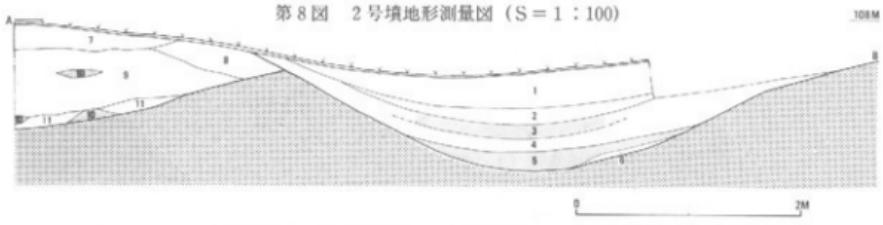
周溝の堆上は底面にそって規則的に堆積していた。最下層には粘質の黒褐色土が約20cmの厚さで堆積していた。周溝は南にいくにしたがって自然傾斜に解消される。丁度、この付近に焼土面が検出された。この焼土面を中心に前述の黒褐色土に包含される状態で多量の須恵器の破片が出土した。第10図の8がそれである。

主体部は今回の調査では検出されなかったが、駐車場の法面を清掃した際、銀環1点が出土した。さらに、1977年津山市教育委員会安川豊史氏が、1983年漢哲夫氏がそれぞれ法面から須恵器杯を採集していることから、丁度この法面に主体部が位置していたことが考えられる。そして、石材が全く出土していないことから、木棺直葬の可能性が想定される。

今回調査の遺物としては他に表土除去中に土師器、須恵器片が若干量出した。1・2は前述の1983年、3は1977年の採集品である。いずれも完形品である。4・5が今回出土したものである。



第8図 2号墳地形測量図 ($S = 1 : 100$)

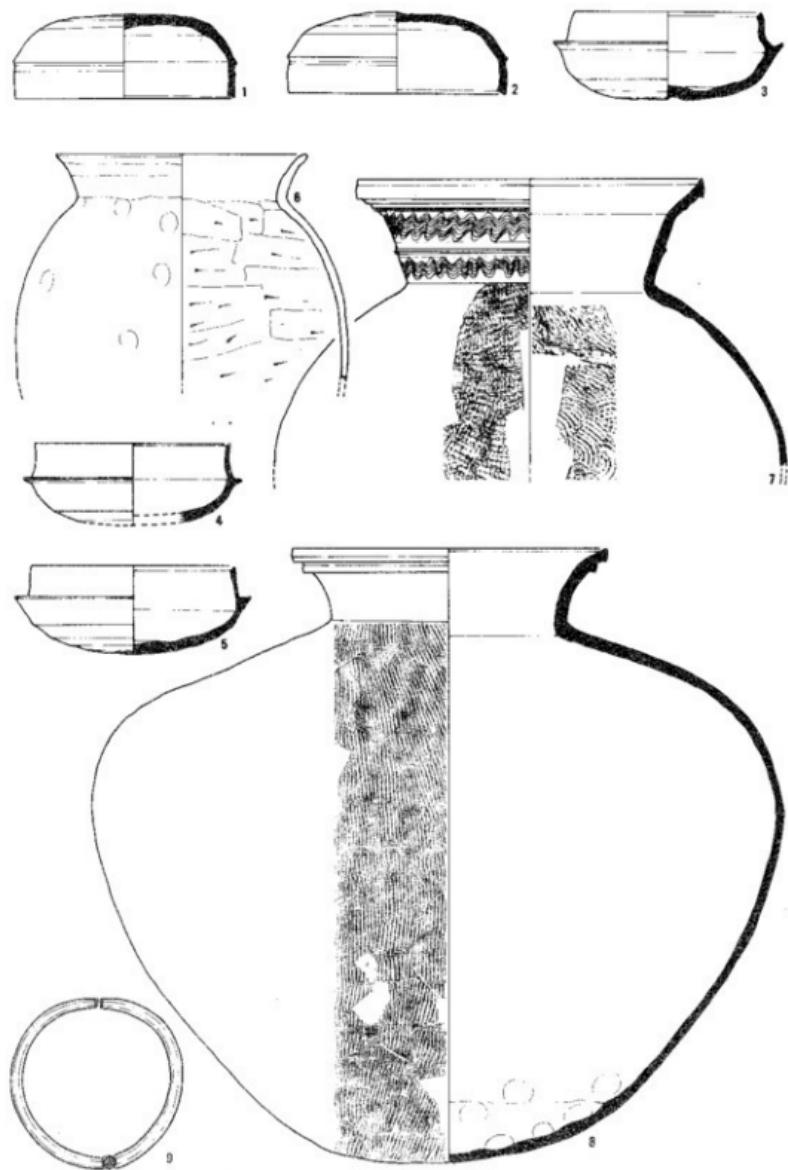


第9図 2号墳墳丘断面図 ($S = 1 : 50$)

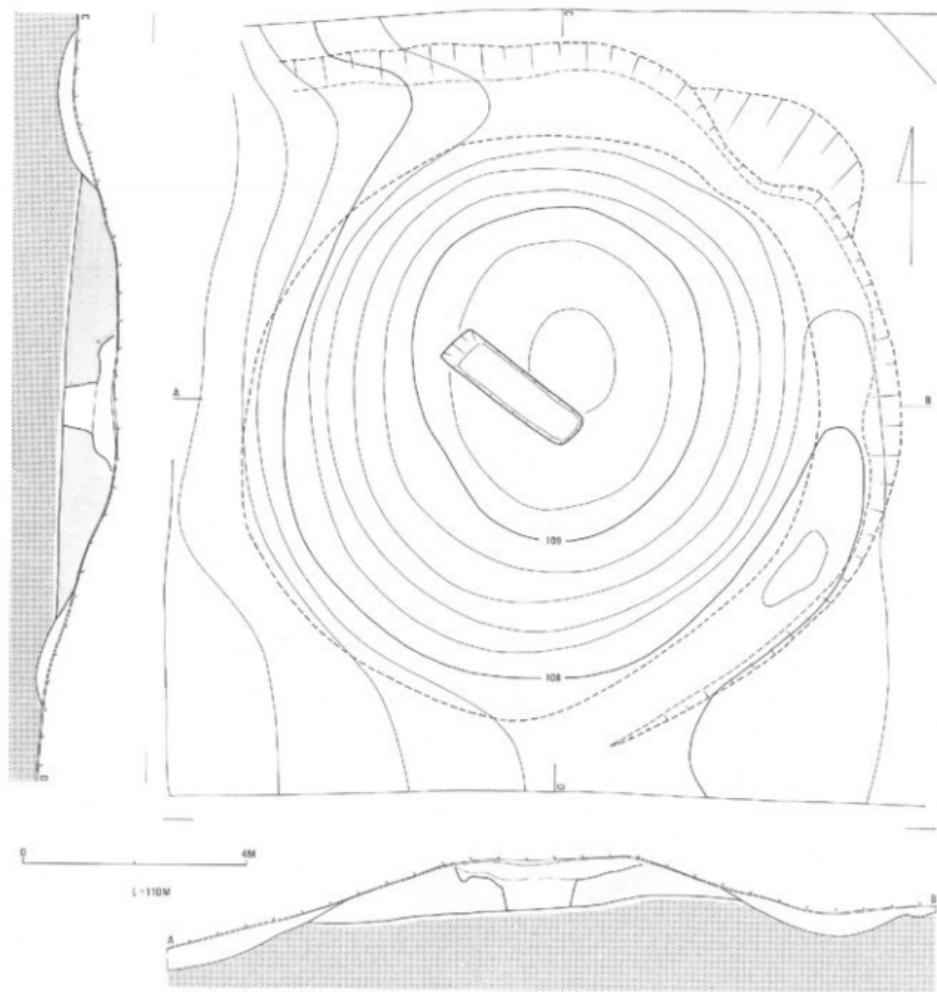
6・7は墳丘頂部から出土した。8は前述のように周溝底面から出土した。9は法面清掃時に出土した銀環である。径約2.5mmを測る細いものである。1号墳同様に頂部に6の土師器彫形上器、7の須恵器彫形土器が置かれていたことが理解される。

3号墳（第11～14図）

2号墳の東に位置する。2号墳の中心から3号墳の中心まで約13mを測る。径約10m、中央部での盛土の厚さ1mを測る円墳である。盜掘を受けたと考えられる凹みがわずかに認められ

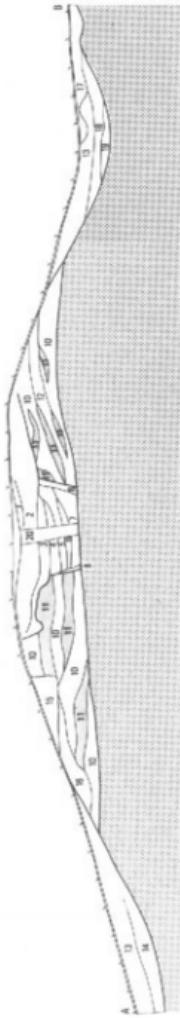


第10图 2号填出土遗物 (1~7=1:3, 8=1:4, 9=1:1)



第11図 3号墳地形測量図 ($S = 1 : 100$)

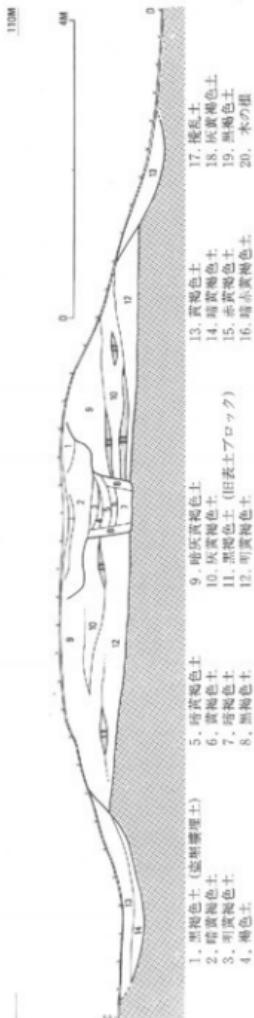
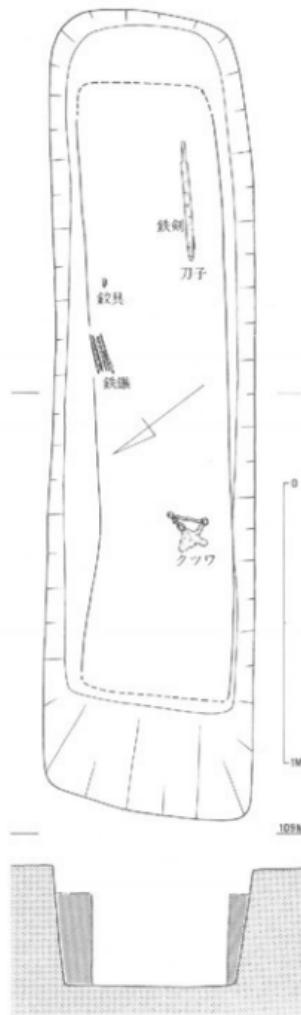
た。墳丘の山側には中心で現地表面から約30cmの深さの周溝が半円状にめぐる。谷側は自然傾斜により解消されている。周溝底面から墳頂までの高さは1.4mを測る。墳丘は基本的に旧表土の黒褐色ブロックと地山の瓦層により築造されている。そして約半分強のレベルに達した時点で墓壙を堀り込み、その上を地山の暗黄褐色土で覆っている。墓壙は床面で長辺約2.4m、短辺約60cmの長方形を呈し、深さは約45cmを測る。この墓壙の中に幅約45cmの木棺を入れていた

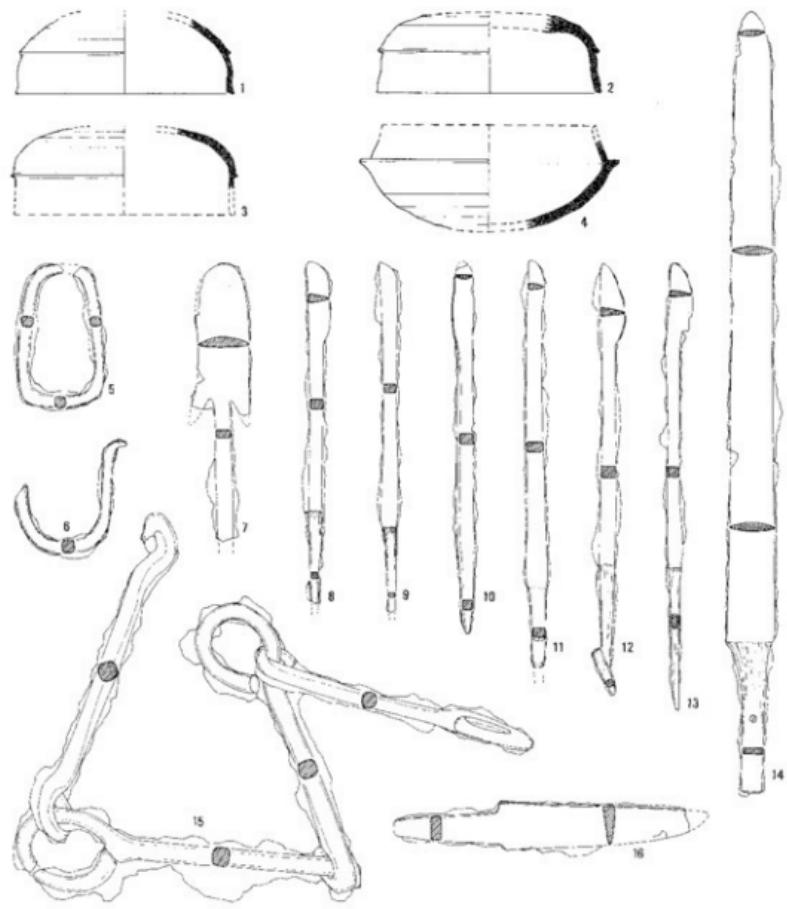
第12図 3号墳埴丘断面図 ($S = 1 : 75$)

ことが土層観察から考えられる。木棺の長さについては明確にしえなかつたが推定2.2mを測る。主体部の長軸は北西—南東方向であり、剣の出土により頭位は南東方向と考えられる。

遺物は表土除去時に若干量と主体部から鉄器が出土しただけである。第14図がそれである。

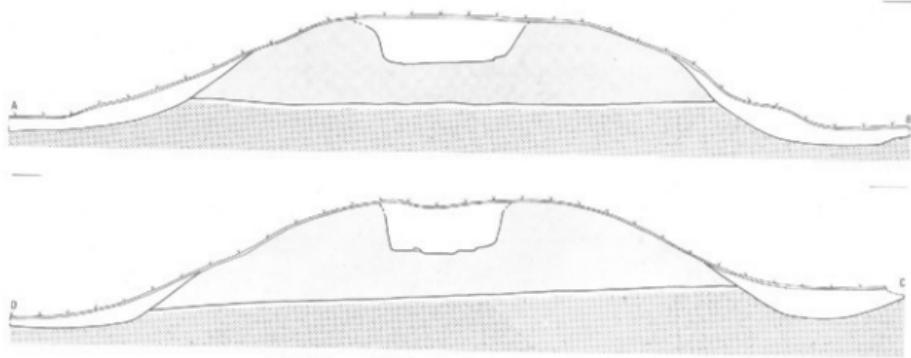
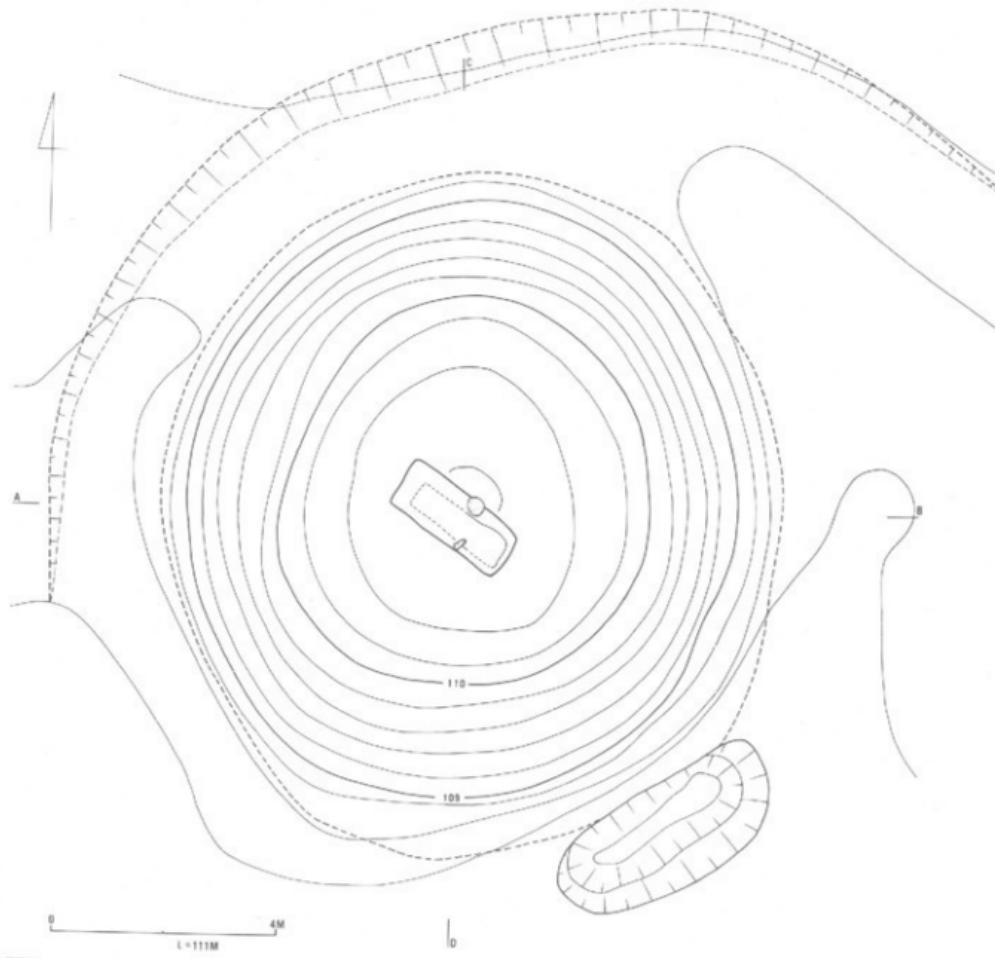
1～4は埴頂から出土した須恵器杯である。5～16は主体部床面から出土した。7～13の鉄鎌

第13図 3号墳主体部平面・断面図 ($S = 1 : 20$)



第14図 3号墳出土遺物 (1~4・14=1:3, 5~13・15・16=1:2)

は中央部北寄りにまとまって出土した。8~13の鐵の先端は10が両刃になっているのに対し、他は全て片刃である。15は馬具のクツワである。剣と反対側の位置に置かれていた。剣は全長42cmと本古墳の中では小型のものである。剣は尖端部を北西方向にむけていたが、丁度この部分に重なるように下から刀子が出土した。5・6の鉄器も鐵の近くにまとまって出土した。5は鍔具である。6は釣針状を呈しているが、それにしてはやや大きすぎる感がある。ここでは断定はさけておきたい。4号墳以下の古墳で明らかになるが、主体部に上器が副葬されていないことに注目しておく必要があろう。

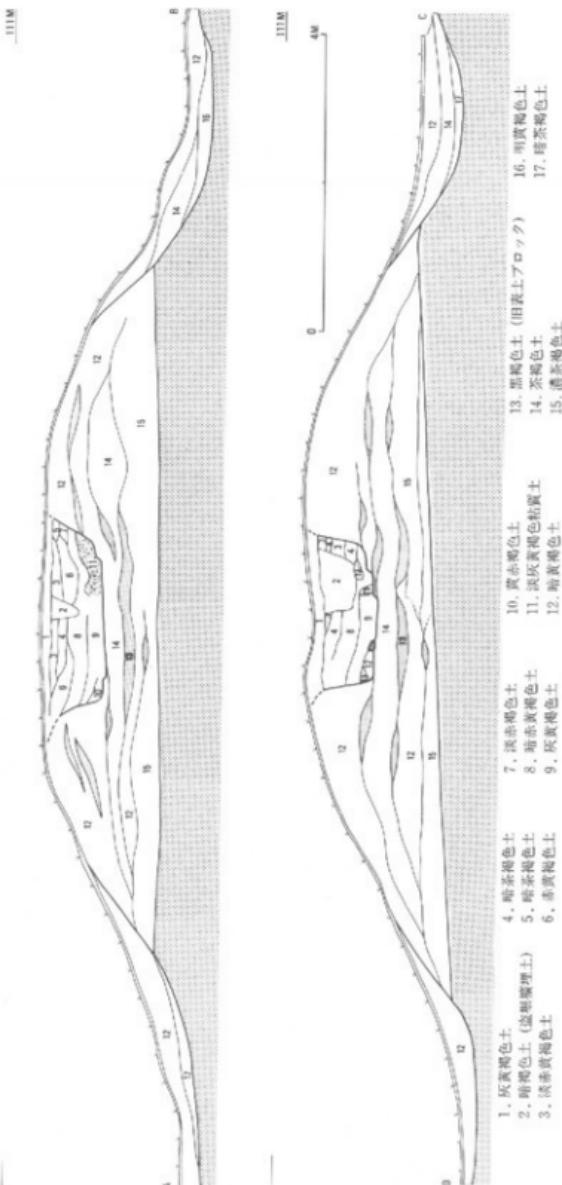


第15回 4号墳地形測量図 ($S = 1 : 100$)

4号墳（第15～22図）

3号墳の東側に位置する。3号墳の中心から4号墳の中心まで約18mを測る。2号墳、3号墳、4号墳の3つの古墳はほぼ直線上に等間隔で並んでいる。

4号墳も盃堀と考えられる浅い凹みが墳頂に認められた。東西径11m、南北径12.3mを測る円墳である。盛土は中心部で1.5mの厚さを測る。墳丘の西側には幅約2mの浅い周溝が位置する。この周溝は東側にいくにしたがって幅が広くなり自然傾斜に解消される。これは周溝とするより、墳丘を築造する際の採土痕と考えた方が妥当かも知れない。さらに、墳丘の南東部に接して土壙が検出された。土壙の底面での計測値は長さ2.7m、幅35～60cm、深さ60cmである。埋土は黒褐色土1層であった。遺物は何も出土しなかったが、墳丘外埋葬の土壤と考えられる。



第16図 4号墳墳丘断面図 (S = 1 : 75)

西側周溝底面から墳頂までの高さは2.2mを測る。

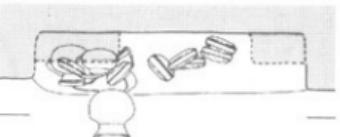
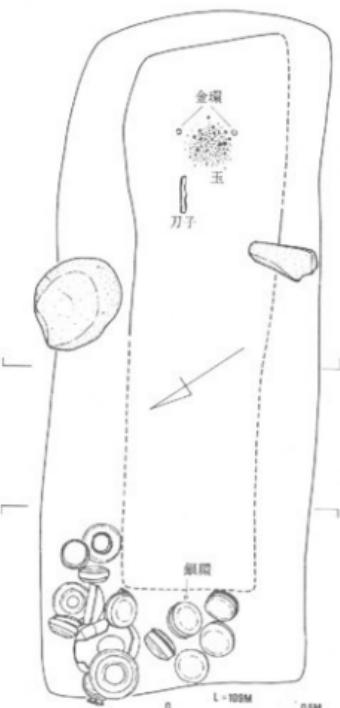
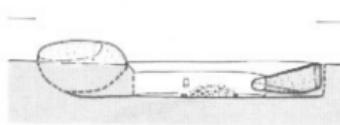
墳丘の径の大きさの割に高い古墳である。

墳丘の築造は基本的に旧地山ブロックと地山層の互層からなる。墓壙は墳丘築造後、掘り込まれている。墓壙は長方形で底面の計測値は幅約90cm、長さ約2.4mである。この墓棺の中に幅50cm、長さ約2mの木棺を入れたものと考えられる。墓壙の中央両サイドから石が対になって検出された。これは木棺の側板を固定するための石と考えられる。鉄釘が出土していないことからもこの事が裏付けられるものと考えられる。主軸の方向は3号墳と全く同様で北西～南東方向である。棺の南東方向の部分から、金環1対、ガラス玉が多量に出土した。このことから頭位方向も3号墳同様である。足元側には須恵器がまとめて置かれていた。この須恵器の配置を観察すると、棺側が直角になっていることが理解される。これは須恵器が棺外に置かれたことを物語るものである。他に棺内の遺物として刀子1点がある。棺内か外かは不明であるが、須恵器の隣りに銀環1点が出土した。この銀環の意味するところについては、もう1体埋葬されていたのか否か全く不明と言わざるをえない。

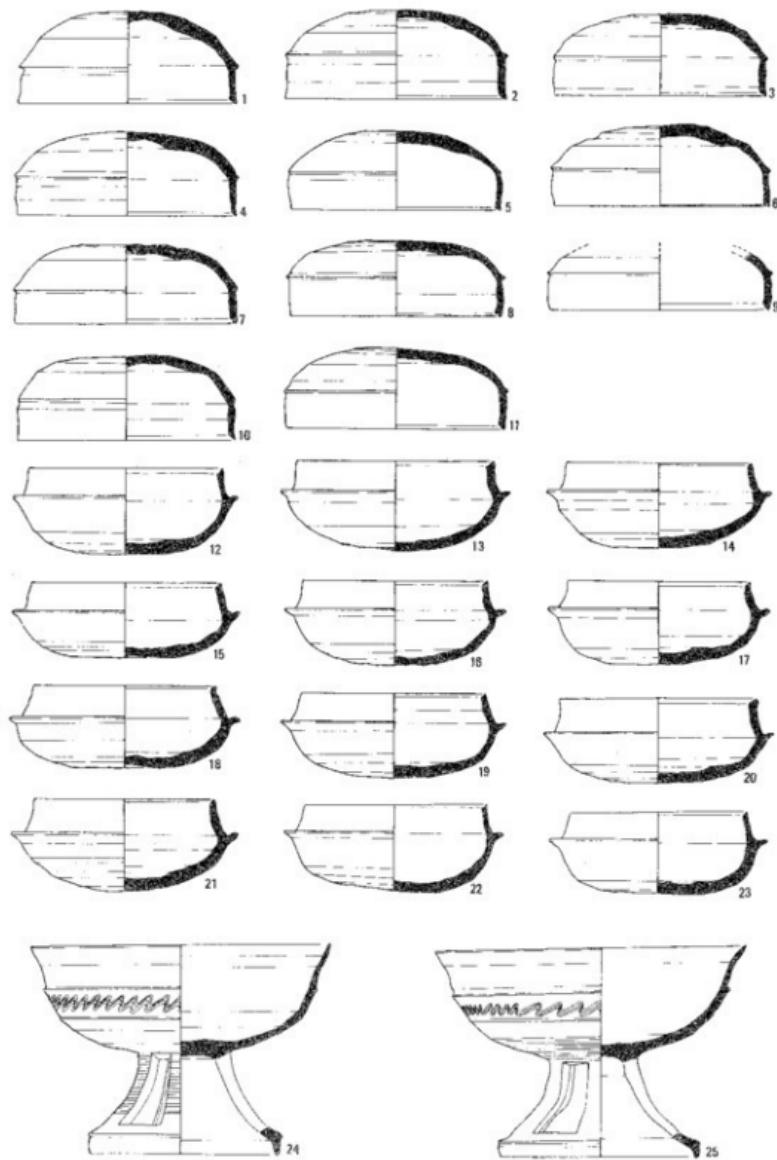
他に遺物として、表土除去時にハニワ片がボリ袋にして2袋分出土して。個体数になると3個体である。さらに、東側墳丘斜面において須恵器壺形土器他が、頂部においては甕等が数個体出土した。いずれも埋葬後のまつりの所産と考えられる。

次に、個々の遺物についてふれることにする。

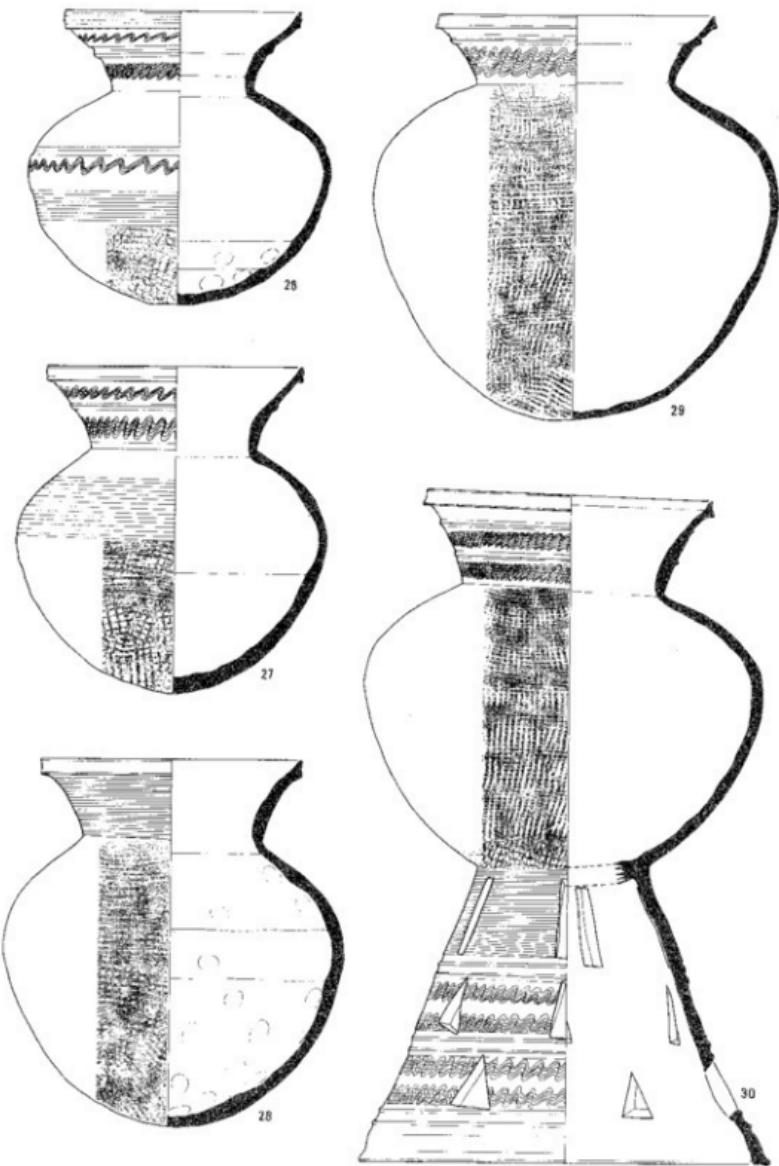
原則として図示できるものは最大限行った。第18図は20・23を除き全て主体部から出土したものである。9の杯蓋は埋土中より出土した破片である。墳頂のものが落ち込んだ可能性も考えられないではない。他はすべて完形品である。第19図は30を除き、主体部から出土したものである。30は前述の表土除去時に墳丘斜面から出土したものである。第20図では31・32が主体部埋土、35が主体部の一括須恵器の中、33・34は墳頂、



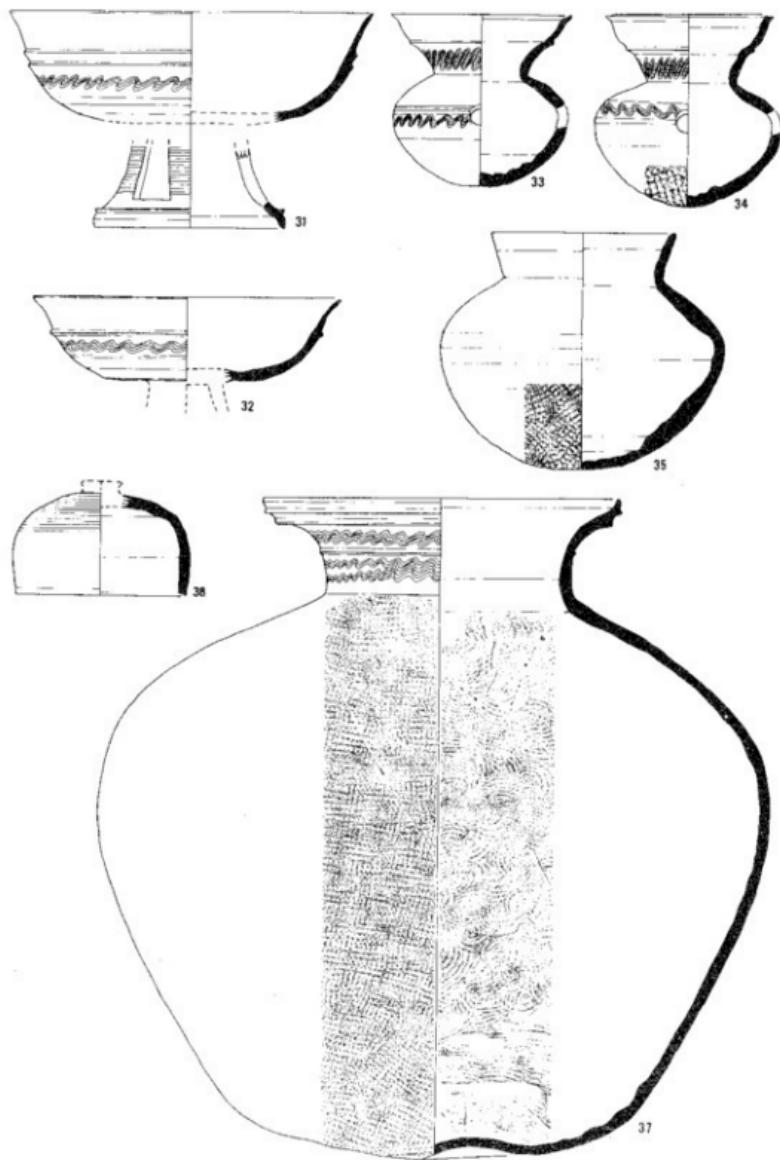
第17図 4号墳主体部平面・断面図 (S = 1:20)



第18図 4号墳出土遺物(1) (S=1:3)



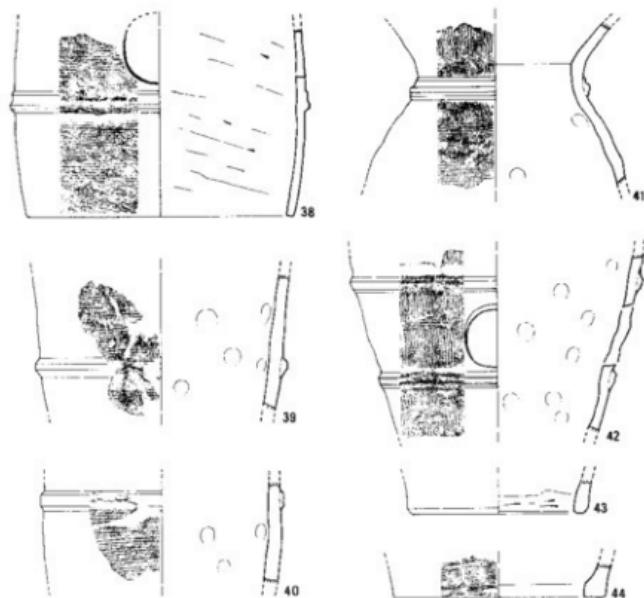
第19図 4号墳出土遺物(2) ($S = 1:3$)



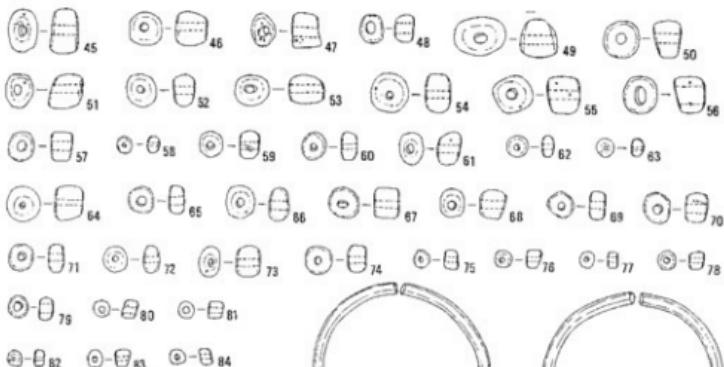
第20図 4号墳出土遺物(3) (31~36=1:3, 37=1:4)

36・37は埴丘
東斜面からそ
れぞれ出土し
た。31の高杯
の杯部と脚部
は接合しない
が同一個体で
ある。37の大
甕はほぼ完形
に復元できた。
以上、みて
きたように棺
外の須恵器の
組成は杯身・
蓋、甕、高杯、
短頸壺という
ことになる。

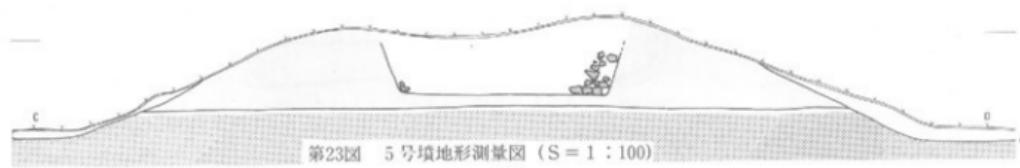
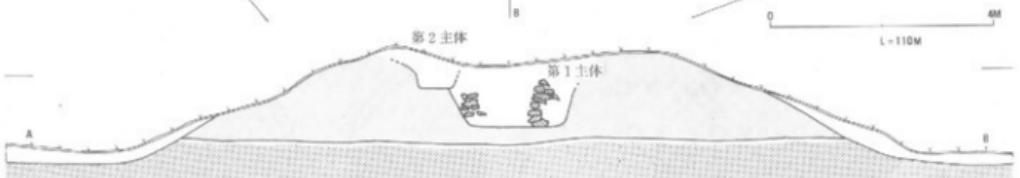
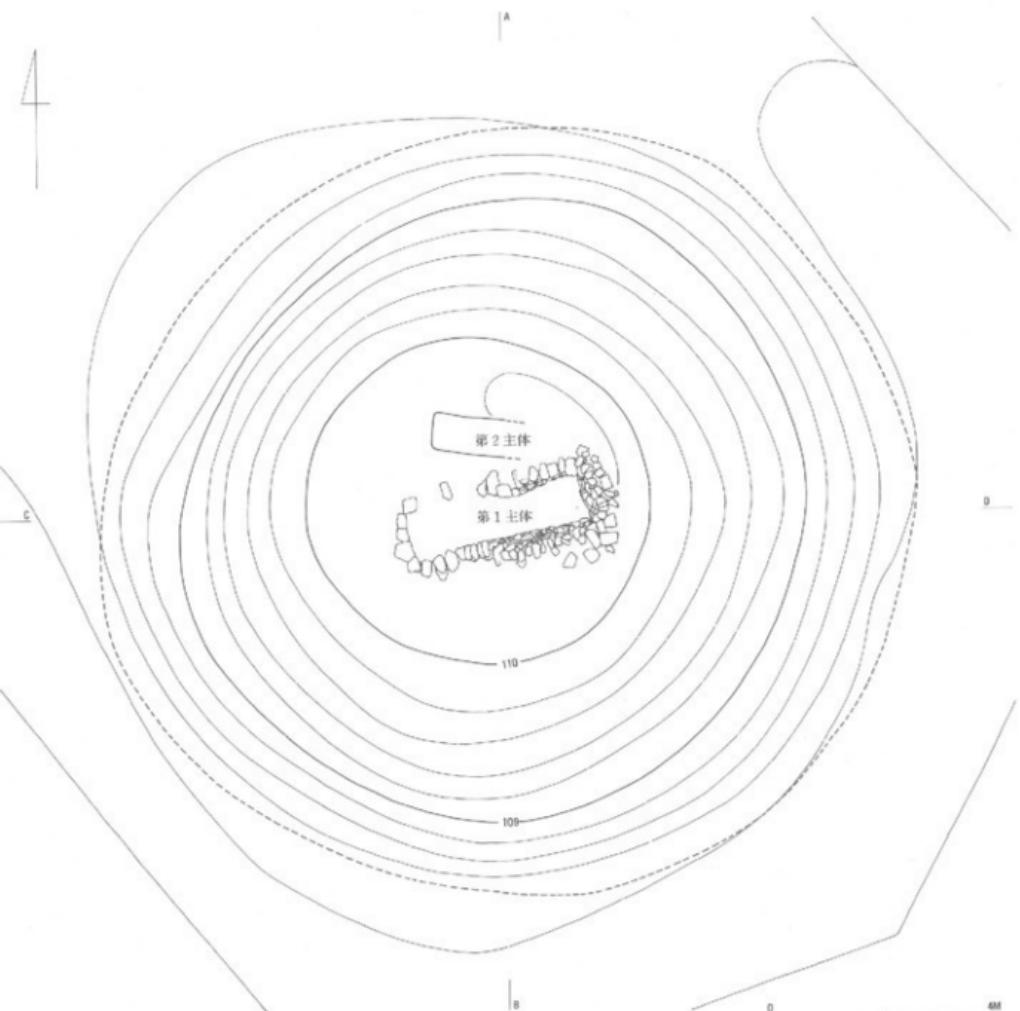
第21図はハニ



第21図 4号墳出土遺物(4) (S=1:4)



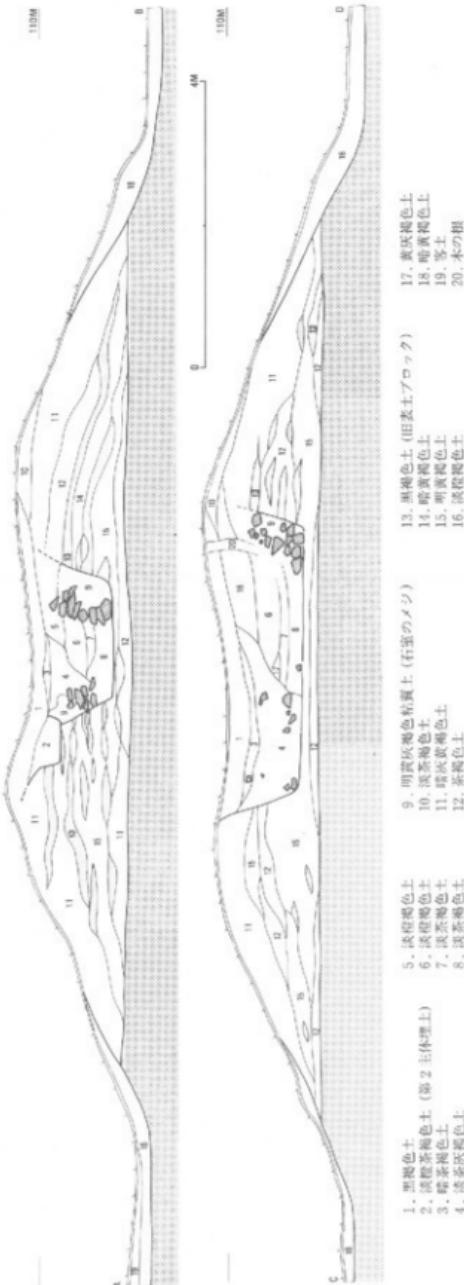
第22図 4号墳出土上遺物(5) (45~87=1:1, 88=1:2)



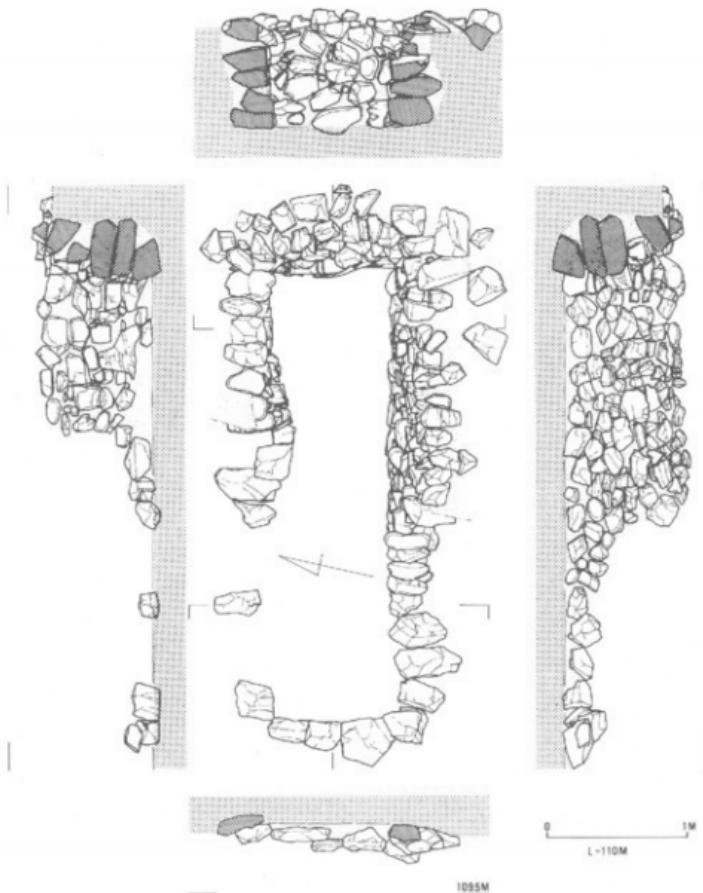
第23図 5号墳地形測量図 ($S = 1 : 100$)

ワである。図示できるものはこれくらいである。前述のとおり表土除去時に墳丘斜面から墳端にかけて出土した。平面的には南半部に限定される。個体数は3個である。38が1個体、39~44が1個体、そして41~43の個体である。前二者は明茶褐色を呈す土師質のもので表面がトロトロである。残りのものは須恵質で朝顔型のものである。前二者の外面は横方向のハケ目が施されているのに対し、後者は縱方向のハケ目を施した後、帯状に横方向のハケ目が切っている。タガはいずれも偏平である。

第22図には玉、金環、銀環、刀子をあげた。玉はいずれもガラス製で大きく2種類に分類できる。45~74のようにやや大きめで丸味を帯び、色調が青、緑、紺を基調としたものと、75~84のように比較的小さく茶色を呈すものの2種である。完形品で前者は216個、後者は1,679個を数えた。これに多数の破片があることから、総計すると約2000個になるものと考えられる。金環、銀環は径約2mmの線を径約3cm強、1.5cm弱にそれぞれまるめ仕上げている。玉類は発見時から、土を取り上げ水洗によって検出したが、その際玉にまじって鉄滓の小片があることが判明した。1cm内外のものが15点検



第24図 5号墳墳丘断面図 (S = 1 : 75)



第25図 5号墳第1主体石室平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

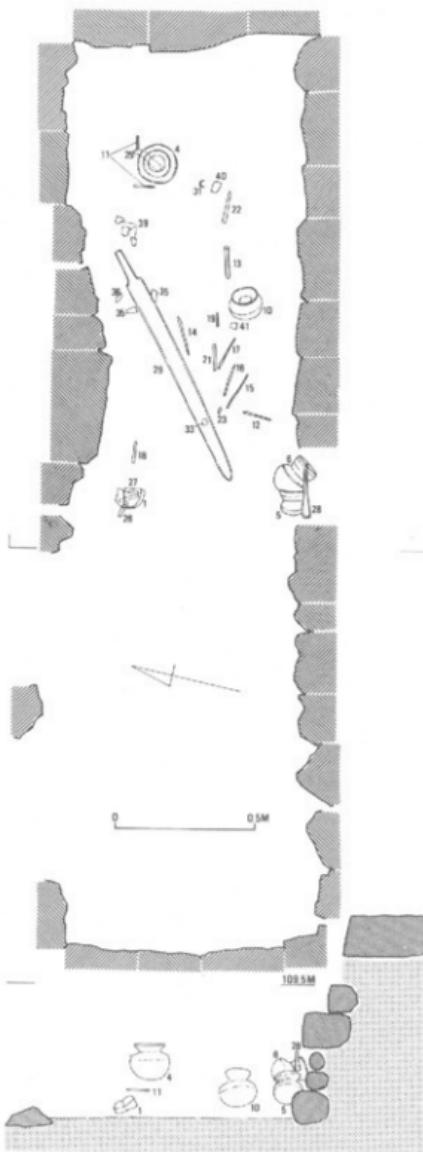
出された。この内2点を分析に出している(註1)。残り13点の総量は8.25gを測る。

5号墳(第23~31図)

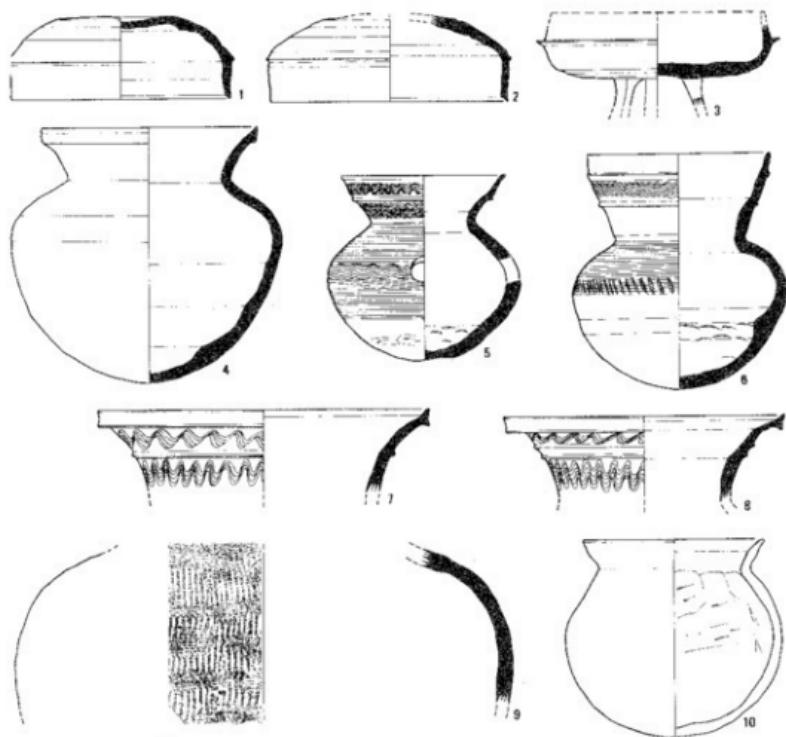
4号墳の東側に位置する。4号墳の中心から5号墳の中心まで18mを測る。墳頂部には盗塚時の大きな凹みが認められた。墳端の西側及び南側の一部は削平を受けていた。表土を除去すると、径約14.5m、現在高2.2mの円墳になる。表土除去時に頂部から東側斜面部にかけて、多量の須恵器が散乱していた。復元すると2個体の甕になった。いずれも墳頂に置かれていたものである。周溝は認められなかった。主体部は2ヶ所検出された。中心主体は竪穴式石室を

もつもので第1主体を呼称する。第2主体は第1主体の北側に位置する木棺直葬の追葬主体である。

第1主体は墳丘の中心に石室の主軸を東西方向に向けて位置する。石室の構築は盛土をした後、墓壙を掘り込んで行なわれている。墓壙の床面は旧地表までは達せず、約10~15cmの盛土を間に介在させている。盛土の仕方は他の古墳同様、基本的に旧表土と地山との互層により行われている。竪穴式石室は床面で長さ3.2m、幅80cm、高さは80cmを測る。石室の西側半分は盜堀で破壊されており、石室最下段の石が遺存するだけである。石室に用いられている石は最大でも50cmで比較的小さめのものを使用している。片岩系の角礫が大部分を占めるが、中に丸味を帯びた河原石も混じっている。基本的に小口積みであり、石と石の間は黄褐色の粘土質で補てんしている。東側半分は盜堀を受けていない。このことは最上段の石が黄褐色粘土質で覆われていることからも理解できる。しかし、石室をふさぐ天井石がないことが注目された。それに類する石材の破片も皆無であることから、天井石に代わる板材が想定されよう。次に、遺物の出土状態をみてみよう。まず土器類であるが、第26図5・6の須恵器は壁面にもたれていること、4の須恵器、10の土師器はいずれも床面から浮いていることなどから、木棺と考えられる棺の外、あるいは棺の上という位置が想定される。それに、剣、鐵等の鉄



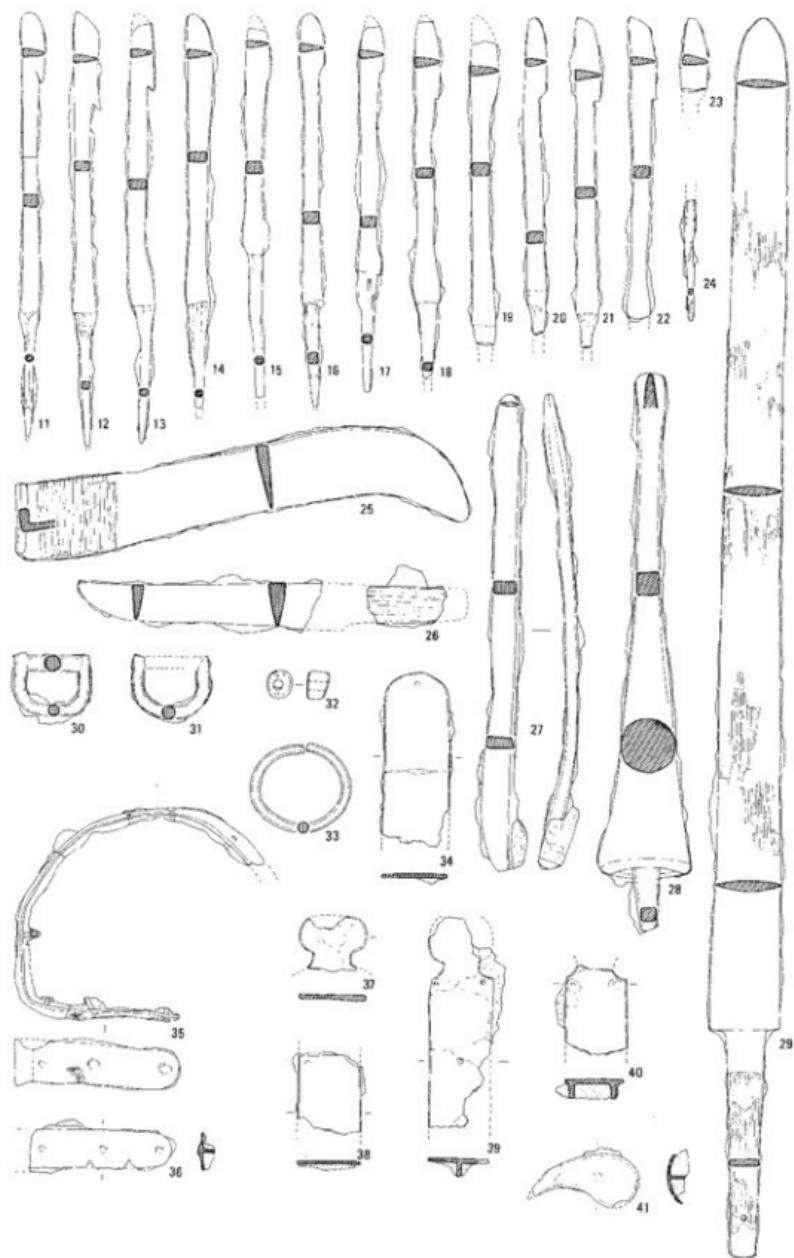
第26号 5号墳第1主体遺物出土状況平面・断面図 (S=1:20)



第27図 5号墳第1主体出土遺物(1) (S = 1 : 3)

製品も方向がまちまちであること、分布のまとまりを欠くことなどから棺内というより、棺上の可能性が考えられる。第1主体の個々の遺物の概要は次のとおりである。

第27図には上器類をあげた。番号は第26図の遺物出土状況の番号と符号する。2・3、7～9は石室埋土中からの出土である。7と9は接合はしないが同一個体である。10は上師器である。他は全て須恵器である。第28図は鉄製品・玉である。組成としては武具としての剣、鎌、刀子、胡錐^{ハサミ}農具としての鍬、工具としてのノミ、鏃、馬具と考えられる鞍具、装身具としての玉、金環に分類される。剣は全長91cmを測る。鎌は11～24まで14本は図示したが、他に基部の破片数点がある。いずれも片刃のものである。34～41は胡錐^{ハサミ}と考えられる。35が比較的その形状がよくわかるものである。等間隔に鉄が配され、内側には木質が残っている。外面には墨塗、錆青がみられる。さらに部分的に布目痕跡も観察される。類例としては中宮1号墳(註2)、四ツ塚13号墳(註3)出土品があげられる。34、37～41は飾り金具と考えられる。25は鏃である。着柄部先端をL字形に折り曲げ、柄を取り付けたもので、木質の錆着が顕著にみられる。27は刀



第28图 5号墓第1主体出土遗物(2) (11~28·30·31·34~41=1:2, 32·33=1:1, 29=1:4)

部が銹ぶくれをおこしているが、壺と考えられる。基部には鹿角が残存している。28はノミと考えられる。中央部は断面正方形で、基部は円形を呈す。基部の内面は空洞になっており、中に断面方形の突起がつく。30・31は同一型式のものである。馬具の鉄具の一種と考えられる。32はガラス玉である。4号墳の茶色の玉と同一のものである。盜塚壙の埋土中より出土した。33は金環である。剣の下から1点だけ出土した。径2mmと細いものである。

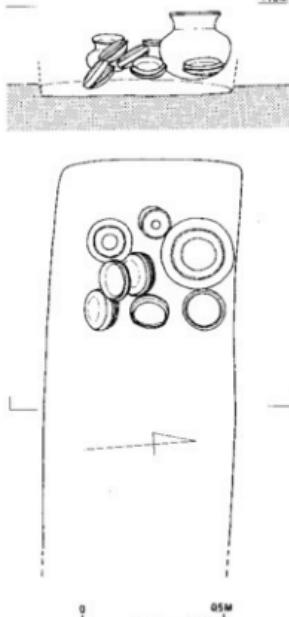
第2主体は第1主体の北側に隣接して位置する。第2主体の床面は第1主体石室の最上部の石と同一レベルである。木棺直葬型式のものである。東側の墓壙の立ち上がりは明確にしえなかつたが、復元すると長さ約2m、幅約65cmの墓壙になる。墓壙の主軸方向はほぼ東西方向である。西側に一括して須恵器が置かれていた。第30図がそれである。組成は杯身・蓋・甕・壺である。杯は全体的に焼成が悪く、トロトロになっている。今までみてきた杯と比べて端部を丸くおさめる傾向など、やや新しい感じをうける。他の遺物は出土しなかつた。

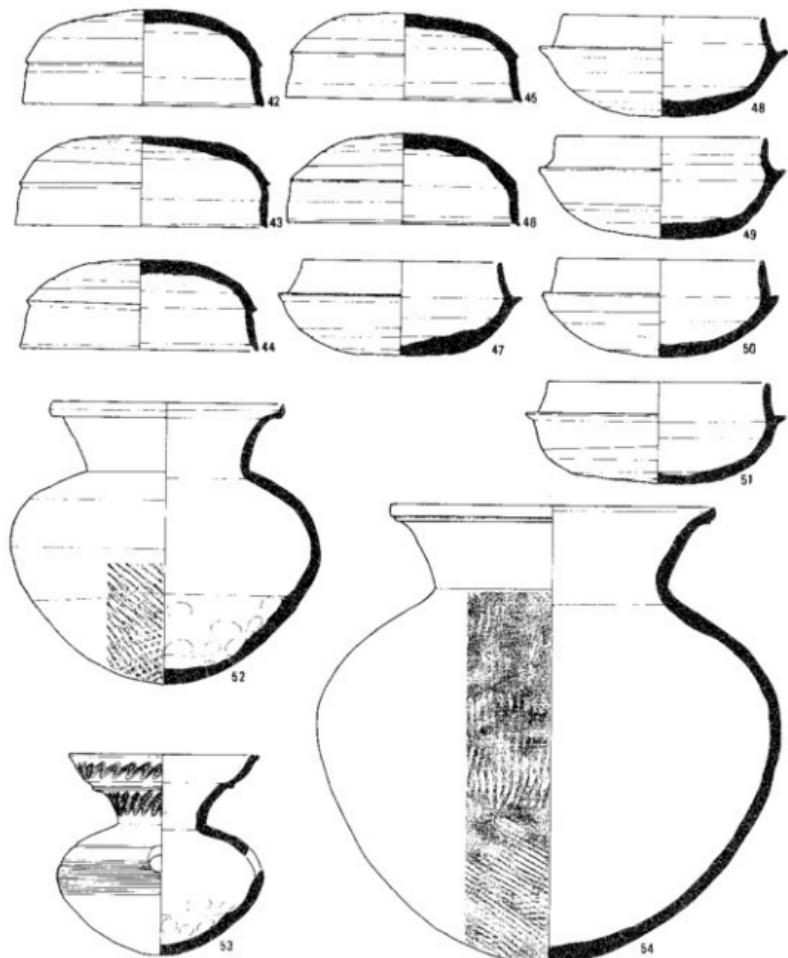
表土除去時に多量の須恵器片が出土したことを報告し 第29図 5号墳第2主体平面・断面図(S:20)たが、第31図に図示したものがそれである。大甕2個体に復元できた。いずれも墳頂に置かれていたものであろう。55は器高に対して、胸部が強く張るに対し、56は長細い器形となっている。

他に第1主体部の床面中央部から鉄津3点が出土した。いずれも1cm程の小さいものである。この内1点を分析に出した。残り2点の重量は1.25kgを測る。

6号墳(第32~36図)

5号墳の東側に位置する。5号墳の中心から6号墳の中心までは20mを測る。墳丘の西側に接して、牛を放牧していた時の建物が位置するが、墳丘を破壊するまでにはいたっていない。墳丘頂部には盜塚時の浅い凹みが認められた。表土を除去する段階で東斜面から周溝にかけて須恵器の散乱が認められた。このことから6号墳も他の古墳同様墳頂部に須恵器が置かれていたことが考えられる。表土を除去すると径約11m、周溝最低面からの高さ2.5mを測る円墳になる。墳丘の周囲には西側を除き周溝が認められた。東側は溝としてはつながらず、斜面下位に解放している。溝の幅は狭く、床面で25~70cm、深さ30~50cmをそれぞれ測る。南側だけ特徴的で二段堀りになっている。旧表土面から墳頂部までの高さ、すなわち盛土の厚さは最高1

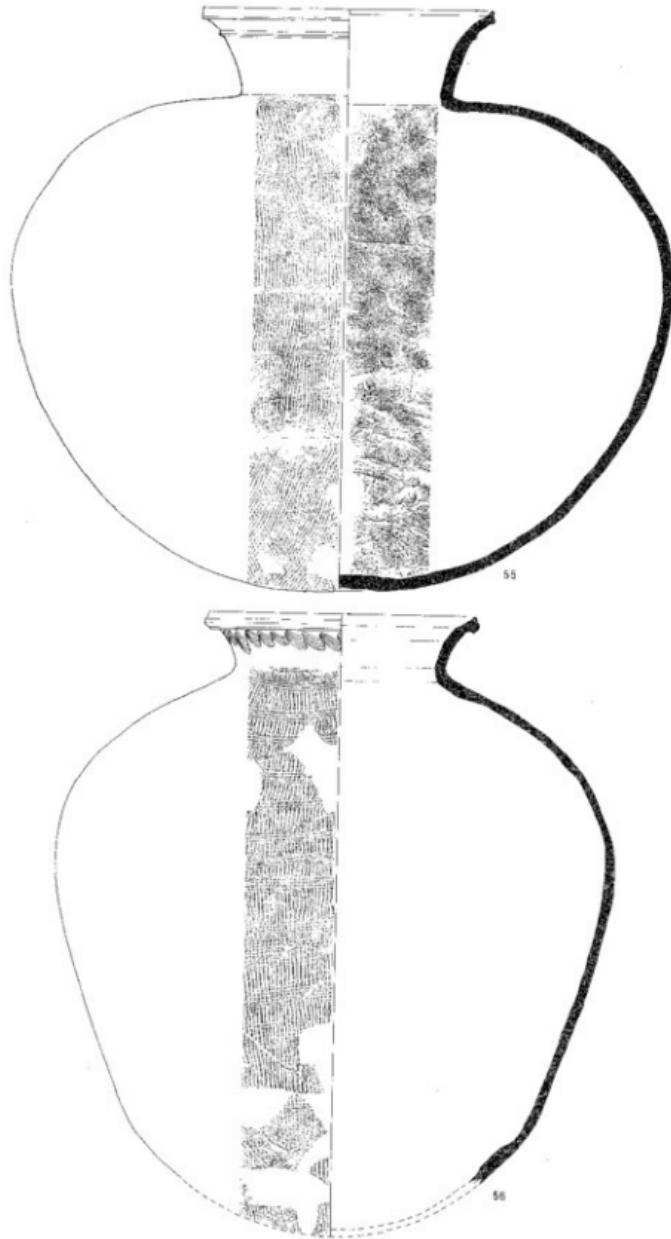




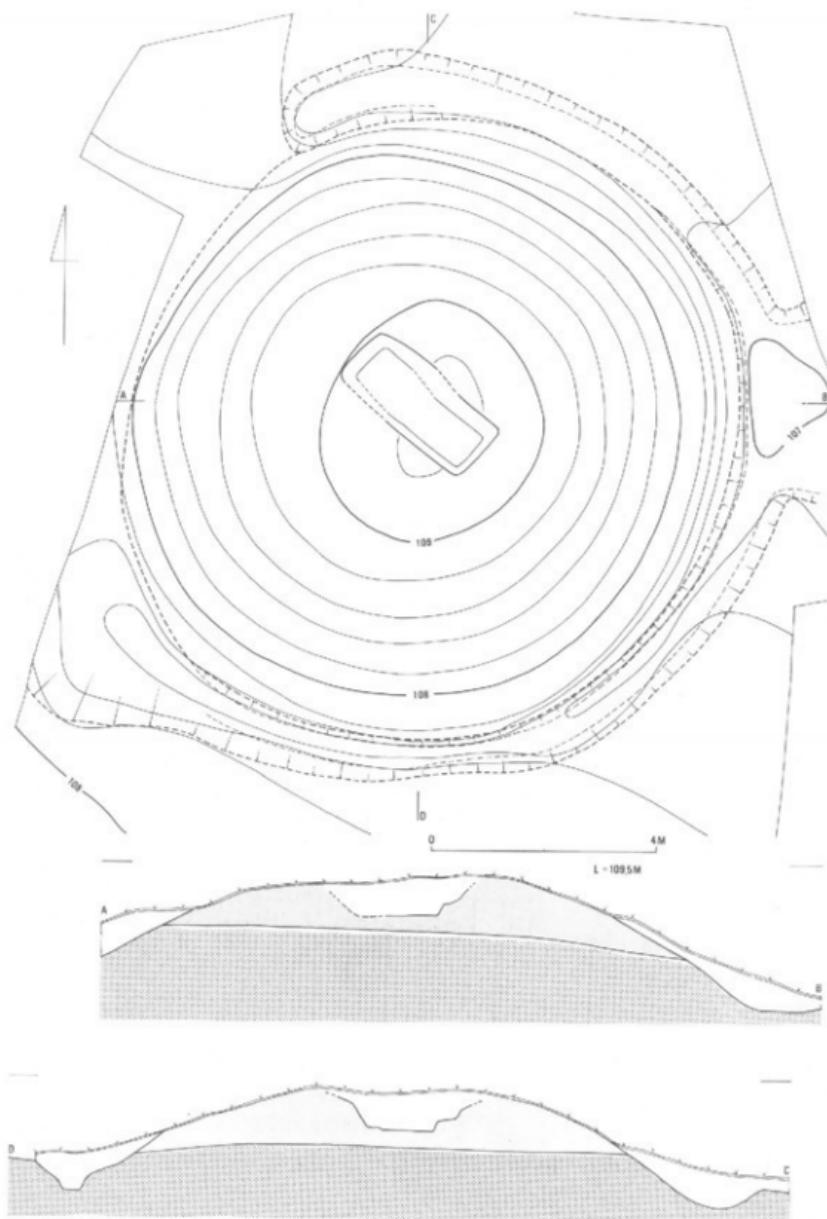
第30図 5号墳第2主体出土遺物 ($S = 1 : 3$)

mである。盛土は今まで記述してきた古墳同様、旧表土と地山の互層により行われている。墳丘の中央部には木棺直葬の主体部が位置する。主体部の主軸方向は3号墳、4号墳同様北西～南東方向を指す。主体部床面は4号墳同様盛土内に位置する。旧表面からは約30cm上位にある。

主体部は一部盜掘を受けていたが、遺存状態はかなり良い、流壠塙より須恵器が若干量出土した。盜掘前は今回の出土遺物に加えて数個体の須恵器が存在していたものと考えられよう。



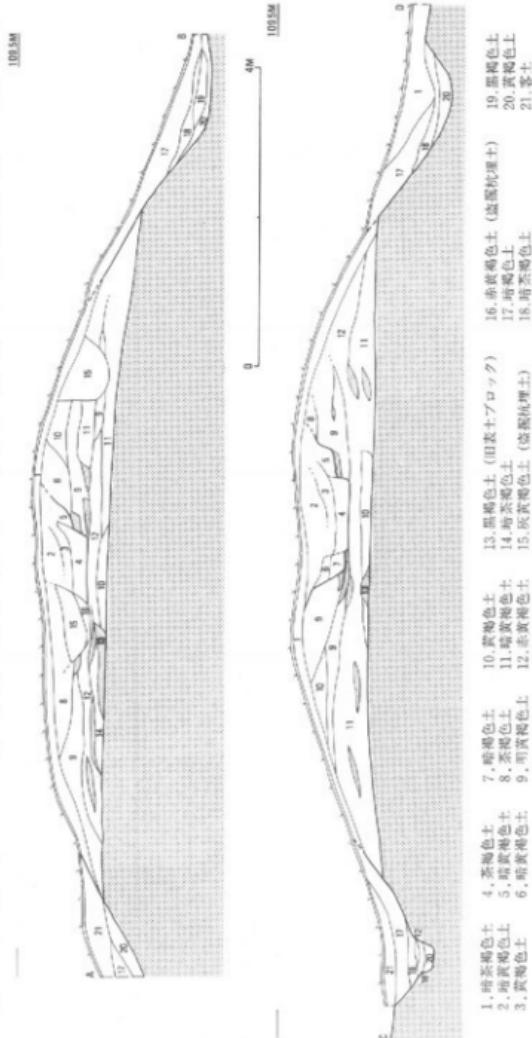
第31图 5号墓出土遗物 ($S = 1 : 4$)



第32図 6号墳地形測量図 ($S = 1 : 100$)

主体部は二段に堀り込まれている。最初に幅1.3m、長さ約3mの方形の土壙を堀り、その中心部に幅80cm、長さ約2.5m、深さ約10cmの土壙を設定している。その結果、周囲にテラス状の平坦面が形成されている。木棺はこの中心部に相当するものと考えられる。平坦面の西側コーナーには須恵器がまとまっておかれていた。出土状態は第34図に図示したように甕の口をふさぐように杯身、蓋を重ねていた。さらに、甕の隣りには1cm内外の鉄滓43点が出土した。この内2点を分析依頼した。残り41点の重量は42.25gと非常に軽量である。他に木棺が位置したと考えられる土壙からはノミ、鎌、斧が出土している。ノミは床面から約10cm浮いた状態で、鎌、斧は壁面にもたせかけた状態で出土した。

さて、本古墳の頭位方向であるが、玉、金環等の出土がないため確実なことは



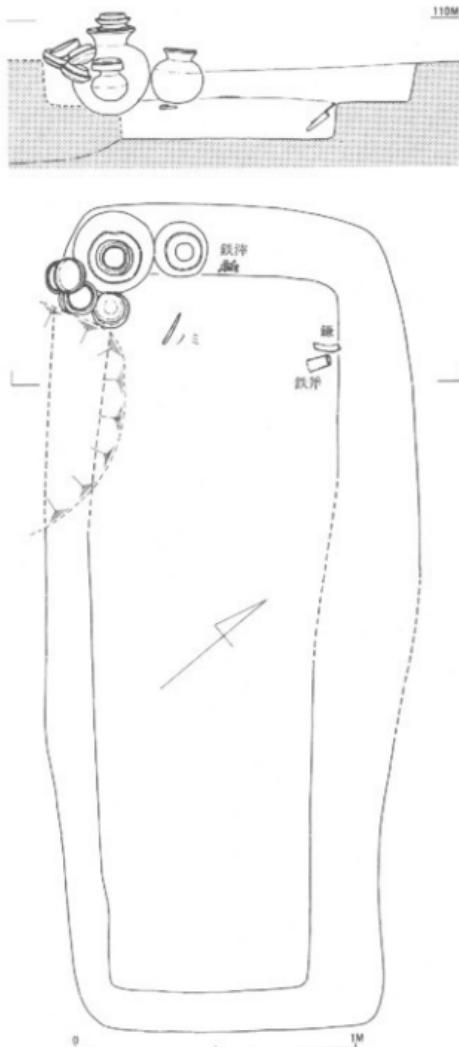
第33図 6号墳墳丘断面図 (S = 1 : 75)

断定できない。後でもふれることになると思うが、本古墳群の木棺直葬例の場合、3号墳、4号墳、6号墳、7号墳、8号墳、9号墳いずれも主軸方向が同じであること、4号墳、7号墳、8号墳、9号墳のように足元側に須恵器が置かれているという共通性がある。このことから考

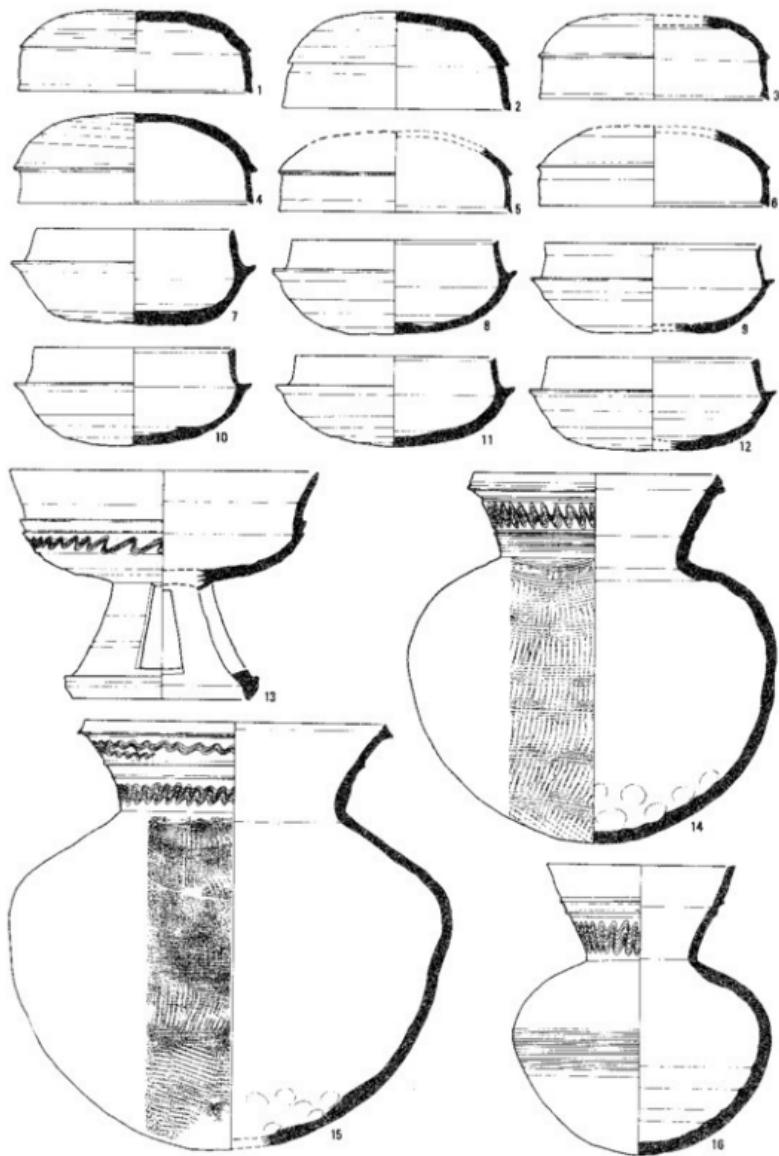
えて、他の古墳例同様南東方向と考
えておきたい。

次に、個々の出土遺物についてふ
れることにする。第35・36図がそれ
である。1~17はいずれも須恵器であ
る。3・5・6・9・12・13は盜壙
壙から破片で出土した。他に図示し
得なったものが数点ある。これら
は前述したように主体部に伴うもの
である。15の甕は墳丘東斜面から周
溝にかけて散乱していたものであ
り、ほぼ完形に復元できた。残りは
すべて一括遺物である。2の杯蓋は
他のものと比べて器高が高い。4の
杯蓋と11の杯身はセット関係にあ
る。7の杯身は立ち上がり部端部が
丸くおさまることなどややこの中で
は新しい感じを受ける。7と10の杯
身が重なった状態で17の甕の口をふ
さいでいた。16の壺の口を覆ってい
たのが2の杯身である。

18は鉄鎌である。端部を直角に折
り曲げ着柄している。柄の木質が銹
着して遺存している。この痕跡から
推定すると柄の径は3cm強とい
うことになる。さらに、木質の方向から
刃部と柄の角度をわり出すと約100
度になる。刃部は湾曲せず直線的で
ある。全長11.8cm、最大幅2.3cmを
測る。19は鉄斧である。全長8.6cm、
最大幅4.8cm、最大厚2.8cmを測る。袋部の断面形は長方形である。この鉄斧はいず
れの面も折り曲げ痕がないことから、鑄造品と考
えられるが、銹の状況から判断すると鍛造品と考
た方が妥当であるという見方もある（註4）。20は鉄製ノミである。全長17.5cmを測る。中



第34図 6号墳主体部平面・断面図 (S = 1 : 20)
ノミ、鉄斧、鉄鎌の位置を示す。ノミは主部の側面に、鉄斧は主部の底面に、鉄鎌は主部の側面に位置する。

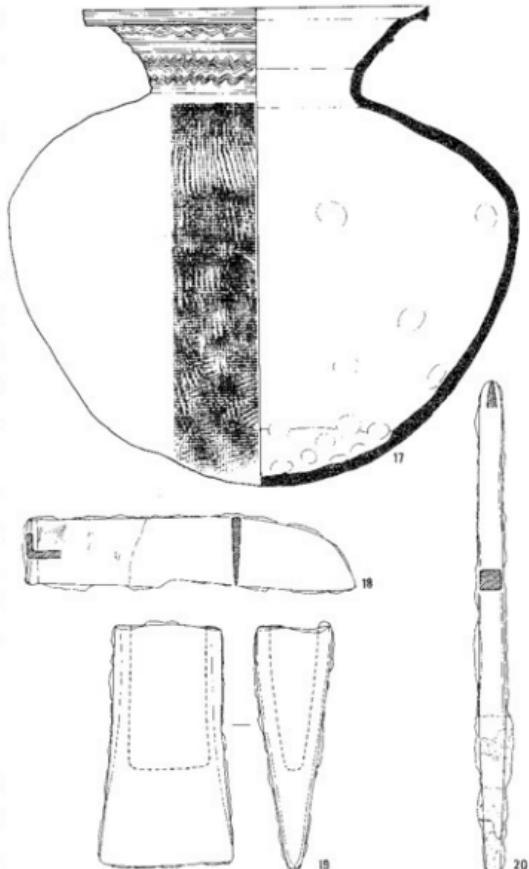


第35图 6号填出土遗物(1) ($S = 1 : 3$)

尖部での断面形は正方形を呈す。着柄部は頭部から5.6cmを測り、木質が銹着している。刃部は鋭角に仕上げられている。

7号墳（第37～43図）

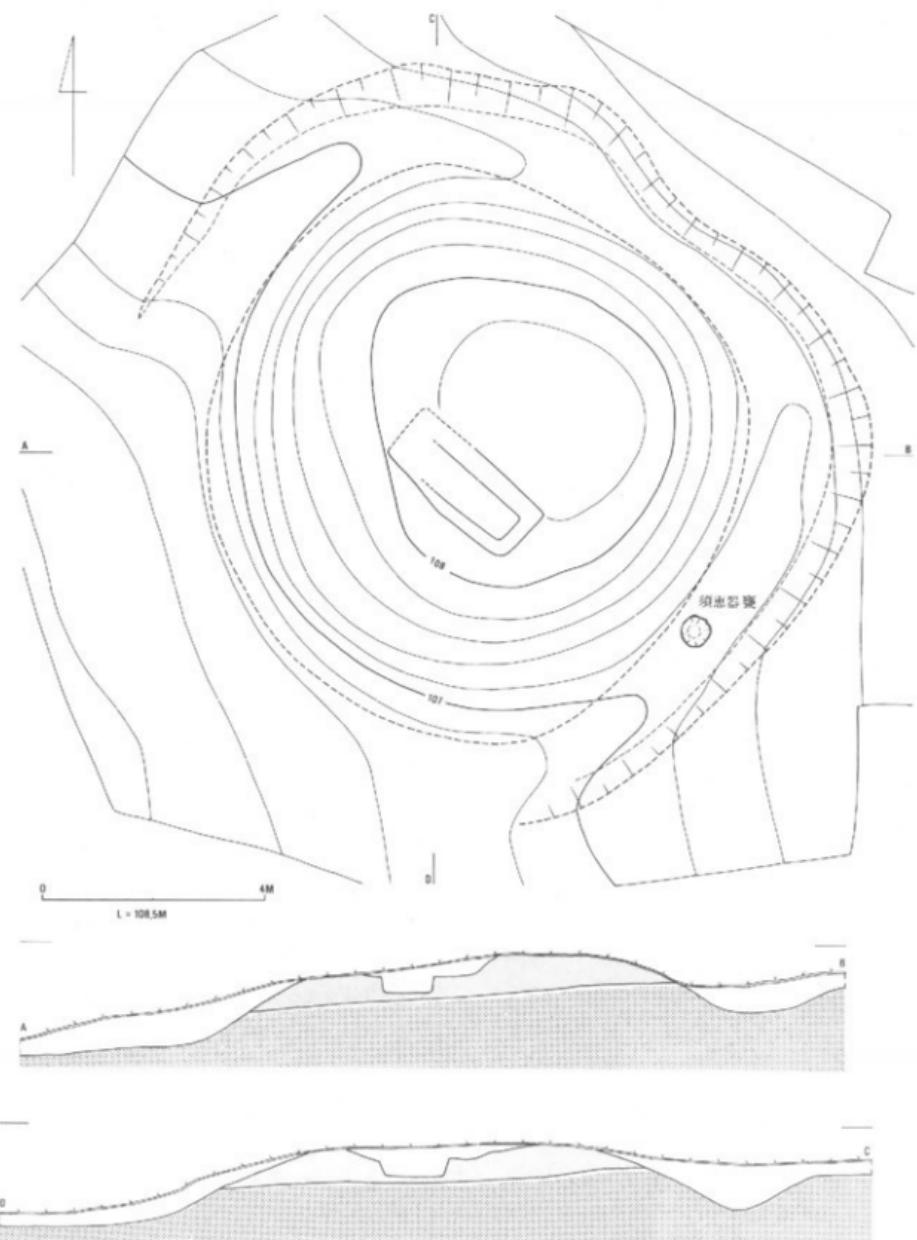
5号墳の南側に位置する。5号墳の中心から7号墳の中心までは約30mを測る。調査前7号墳の存在は明らかではなかった。というのも山側の周溝の凹みが客土により埋められていたからである。さらに、墳丘もかなり削平を受けたため、古墳としての高まりが不明瞭であったことに起因する。表土を除去し、周溝を掘り上げると、径9.5mの円墳になる。北側周溝底より墳頂までの高さは1.2mを測る。山側には周溝が認められた。北東部が他の部に比べてやや狭くなっている。底面での幅は70cm～1.5m、深さは最も深い所で65cmを測る。



第36図 6号墳出土遺物(2) (17=1:3, 18-20=1:2)

谷側は自然傾斜に解消され、溝は存在しない。周溝南東側床面から須恵器人甕が置かれた状態で出土した。底部は周溝床面をやや盛りにくぼめて設置されていた（第38図）。底部より上位はつぶれた状態で破片が散乱していた。中心部での盛土の厚さは約70cmを測る。盛上の方法は基本的に従前の古墳と同様、旧表土と地山の互層であるが、他の古墳に比べて地山の単位が明瞭でなかった。

主軸部の主軸の方向は3号墳、4号墳、6号墳と全く同様北西～南東方向である。主軸部の位置は墳丘の中心よりやや南北方向にずれている。主軸部の構築は盛土をしていく過程で行われている。すなわち、周囲をドーナツ状にやや高くし、中心部に墓壙を築いている。本古墳

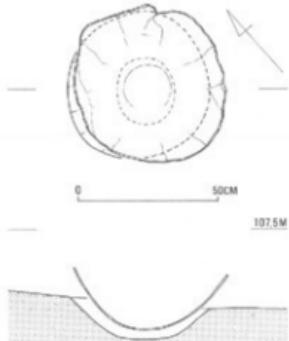


第37図 7号墳地形測量図 ($S = 1 : 100$)

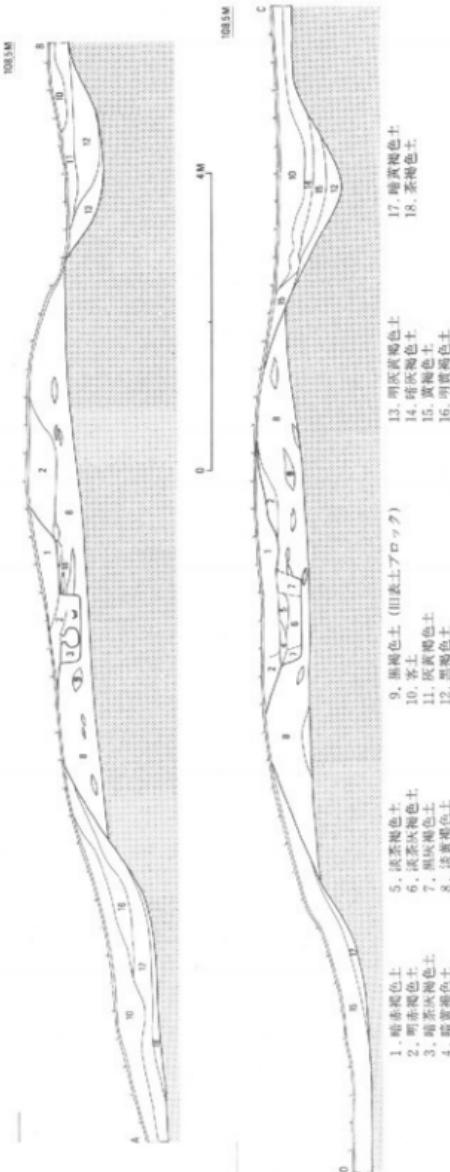
群の木棺直葬形式のものはこの方法が多いようである。従って、断面形状でみると二段堀りを呈している。

墓壇の床面は旧表土までは達せず、盛土の中でおさまっている。床面と旧表土上面との盛土層の厚さは約10cmである。

主体部は木棺直葬である。まず、幅1m強、長さ約3mの土壇を掘り、その中に木棺を納める幅約70cm、長さ約2.6mの土壇を築いている。北西小口側には上器類、鉄器類が置かれていた。土器は全てで11個体あり、その内土師器が2個体、残り9個は須恵器である。須恵器の組成は杯蓋4、同身2、小型の甕1、中型の甕1、豆1である。土師器は直口壺と椀が各1点である。鉄器は鉄鎌、鉄斧、鎌各1点ずつである。鉄鎌は杯の中から出土した。これらの遺物の反対側の南東部からは鉄刀と刀子各1点が出上した。鉄刀は切先を北西



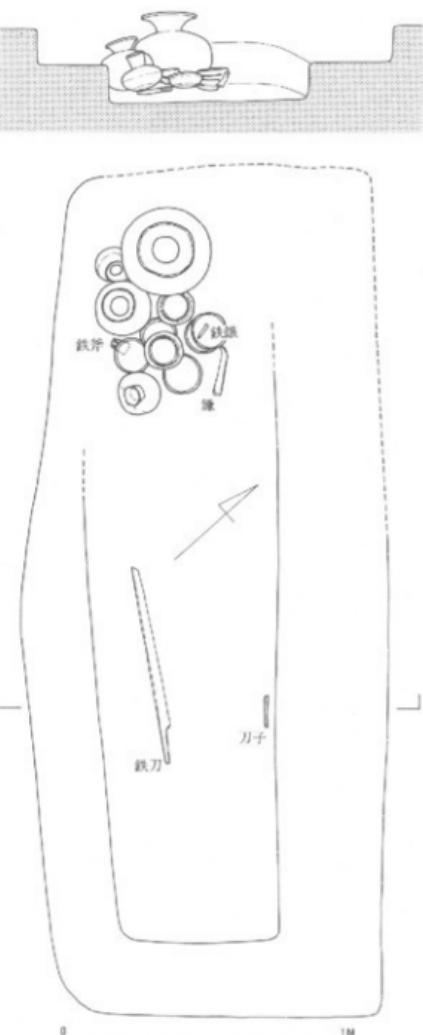
第38図 7号墳周溝須恵器出土状態(S=1:20)



第39図 7号墳墳丘断面図 (S=1:75)

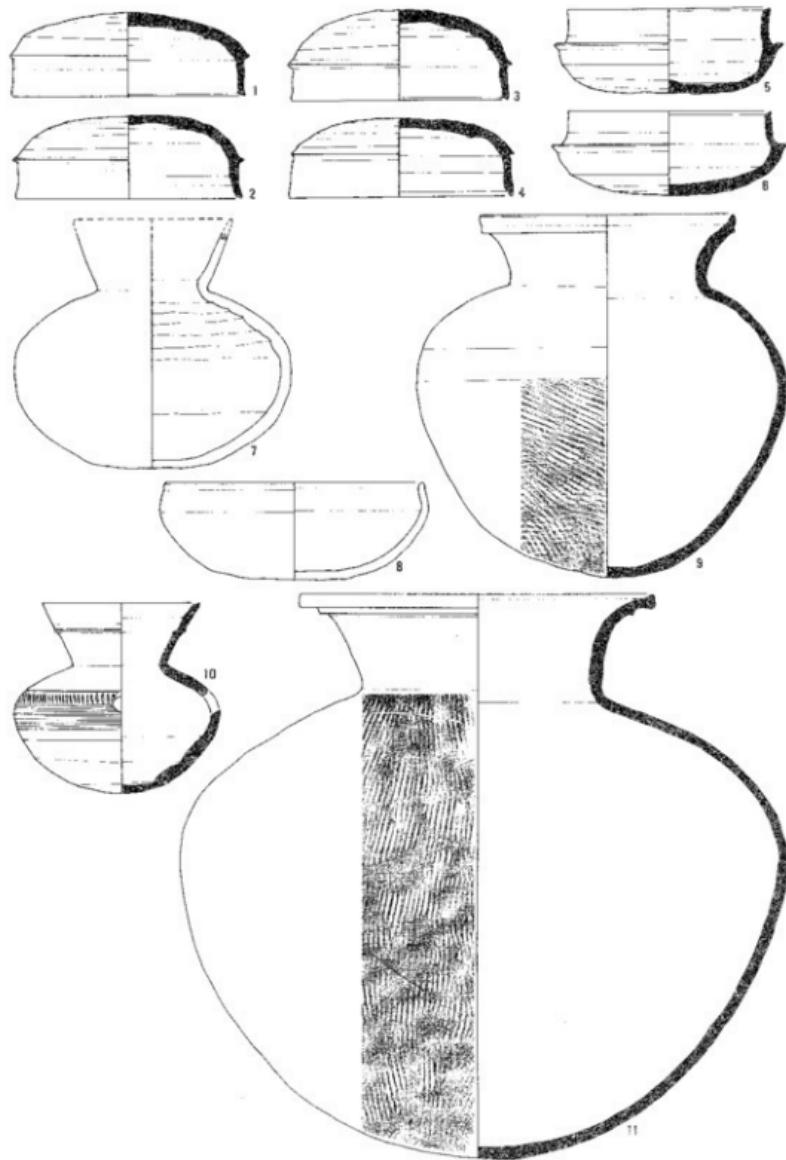
方向に向いている。土器類は甕等が据え置かれたままの状態であることから原位置を保っているものと考えられる。従つて、棺外の小口側に置かれたものであろう。鉄刀と刀子は棺内と考えられる。今まで見てきた木棺直葬形式のものには、いずれも鉄釘が伴っていない。本古墳もそうであるが、棺は釘を使用しない組合せ式のものと推定される。頭位方向は出土遺物の状況から考えて南東方向と考えられる。

次に個々の遺物について見てみよう。第41~43図に図示したものが全てである。1~4は杯蓋である。口縁部はほぼ垂直に近く立ち上がる。これは杯身についても同様である。特に、天井部のヘラ削りが縁辺部にまで及んでいることが指摘できる。7は上師器直口壺である。胴上半内面には輪積みの粘土帯が顕著に観察される。遺存状態が悪くボロボロである。8は土師器の椀である。9は小型の、11は中型の甕である。いずれも外面に平行叩きが施されている。10は甕である。胴部最大径付近に刺突文、カキ目がめぐる。12は鉄製直刀である。全長72cm、最大幅3.4cmを測る。柄部には木質の銹着が認められる。13は鉄製の鎌である。端部を直角に折り曲げただけのもので全長16.3cmを測る。着柄部には木質が観察される。この木質の方向と刃部との角度は90度を超す鈍角なものである。かなり使用したもので刃部が内湾している。14は刀子である。全長11.4cmを測る。嶺には鞘と考えられる木質と布日の痕跡がわずかに認められる。15は鉄讃である。両端を欠く。現存長は12.5cmである。

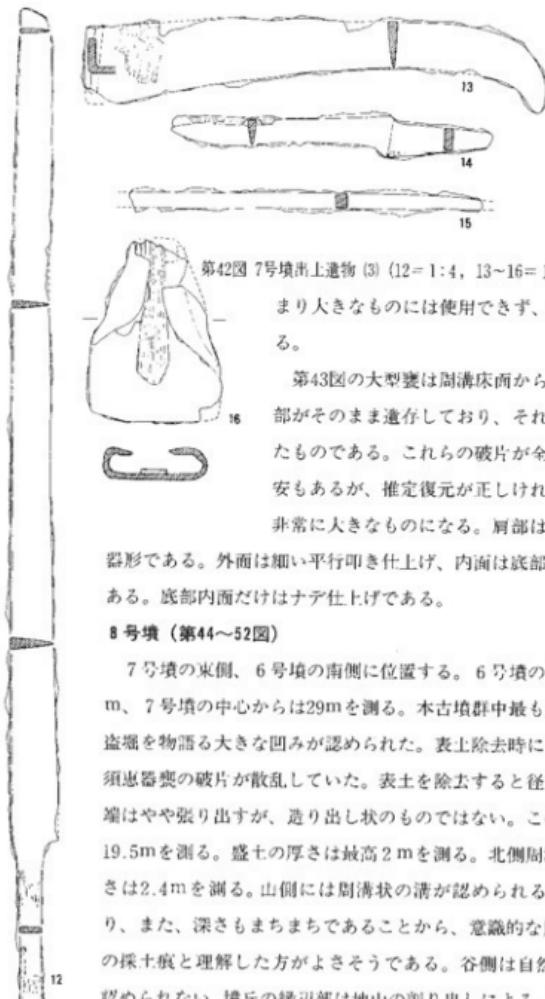


第40図 7号墳主体部平面・断面図(S=1:20)

もので刃部が内湾している。14は刀子である。全長11.4cmを測る。嶺には鞘と考えられる木質と布日の痕跡がわずかに認められる。15は鉄讃である。両端を欠く。現存長は12.5cmである。



第41図 7号墳出土遺物(1) ($S = 1 : 3$)



第42図 7号墳出土遺物(3) (12=1:4, 13~16=1:2) このことから考えて、あまり大きなものには使用できず、仕上げ段階の製品と推定される。

第43図の大型甕は周溝床面から出土したものである。胴下半部がそのまま遺存しており、それより上位は周辺に散乱していたものである。これらの破片が全て接合したわけでない不安もあるが、推定復元が正しければ器高93cm、最大径75.5cmの非常に大きなものになる。肩部はややなで肩で、胴部は胴長の器形である。外面は細い平行叩き仕上げ、内面は底部を除き同心円の叩き仕上げである。底部内面だけはナテ仕上げである。

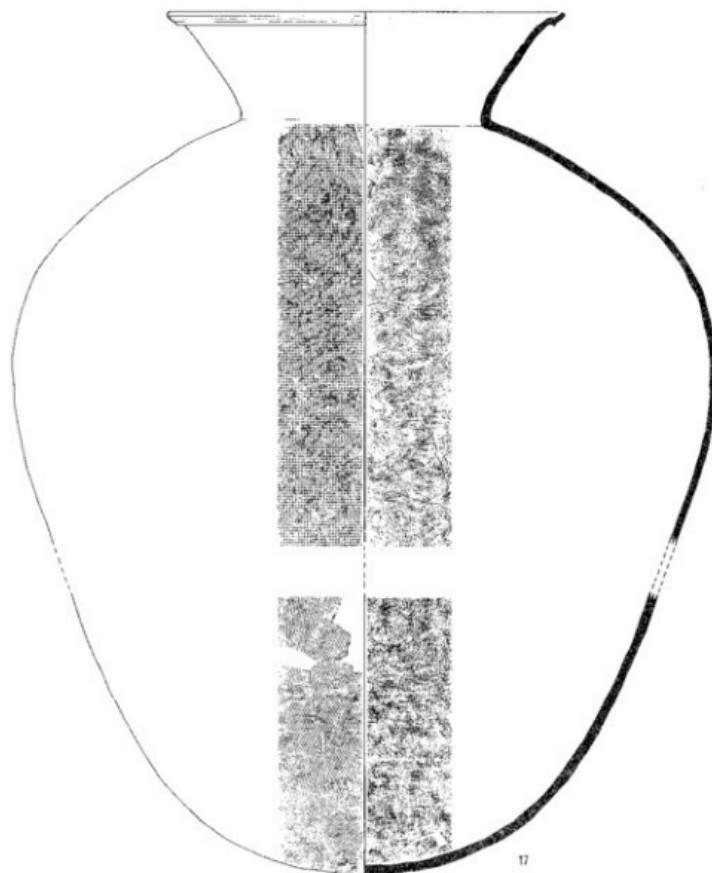
8号墳（第44~52図）

7号墳の東側、6号墳の南側に位置する。6号墳の中心から8号墳の中心まで28m、7号墳の中心からは29mを測る。本古墳群中最も大きいものである。調査前は盗掘を物語る大きな凹みが認められた。表土除去時には墳頂から東側斜面にかけて須恵器甕の破片が散乱していた。表土を除去すると径17mの円墳になった。西側墳堆はやや張り出しが、造り出し状のものではない。この張り出しを含めた東西径は19.5mを測る。盛土の厚さは最高2mを測る。北側周溝底面から現存墳頂までの高さは2.4mを測る。山側には周溝状の溝が認められるが、幅は狭い所、広い所があり、また、深さもまちまちであることから、意識的な周溝というより、盛土のための採土痕と理解した方がよさそうである。谷側は自然傾斜により解消され、溝は認められない。墳丘の縁辺部は地山の削り出しによる。この部分の検出作業中、下層に弥生時代の住居が存在することが明らかになった。

盛土は従前の古墳同様、旧表土と地山の互層となる。第45図の墳丘断面図に空白部分があるが、これは調査の経過でもふれたように大雪で崩壊した場所である。土層番号1が盗掘場の埋土であり、頂部からの深さは約1mにも達す。

主体部は2ヶ所検出された。上位に位置するものを第2主体、下位に位置するものを第1主

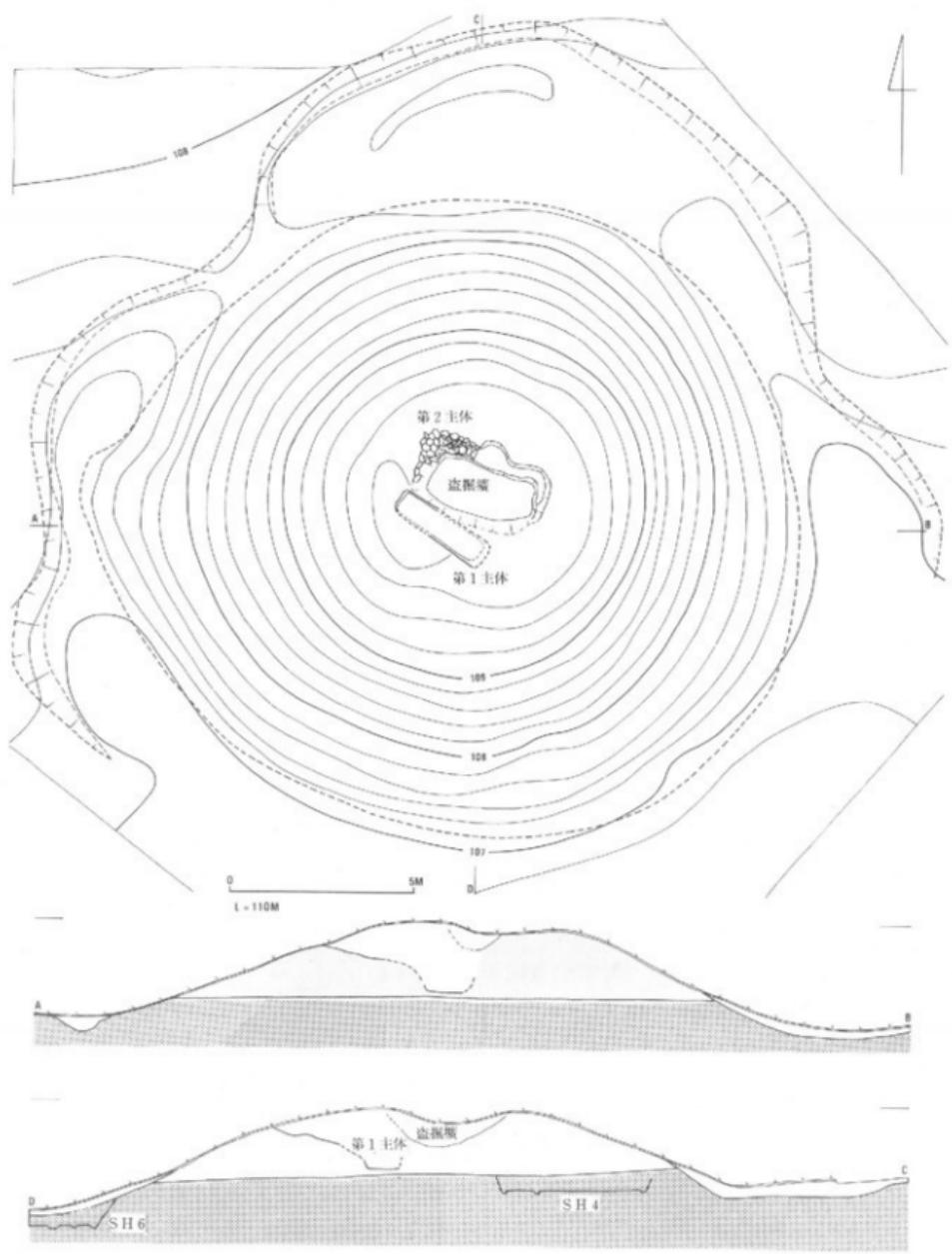
16は鉄斧である。鉄斧といつても手斧である。全長6.5cm、刃部幅4.5cmである。両横を折り曲げ袋部を形成している。中央部には幅約1cmの着柄用の木質が遺存している。



第43図 7号墳出土遺物(3) (S = 1 : 6)

体と呼称する。第2主体は竪穴式石室、第1主体は木棺直葬のものである。石室の下に別の主体が存在するという予測を全く持ち合わせないまま、土層観察用のトレンチを地山まで設定したところ、石室の床面から80cm下位で第1主体の床面を検出した。墳頂からのレベル差は1.2mを測る。

第1主体は主軸を北西～南東方向にむけ、墳丘のはば中央部に位置する。墓壙の北側壁だけが二段に掘り込まれている。木棺の位置する部分の計測値は床面で幅65cm、長さ約2.7mである。墓壙の設定の仕方は7号墳と全く同じである。すなわち、墳丘の縁辺部に土を盛り、中心部に墓壙を形成するやり方である。そして、第45図の土層断面2が示すように1層で覆い、墳丘を



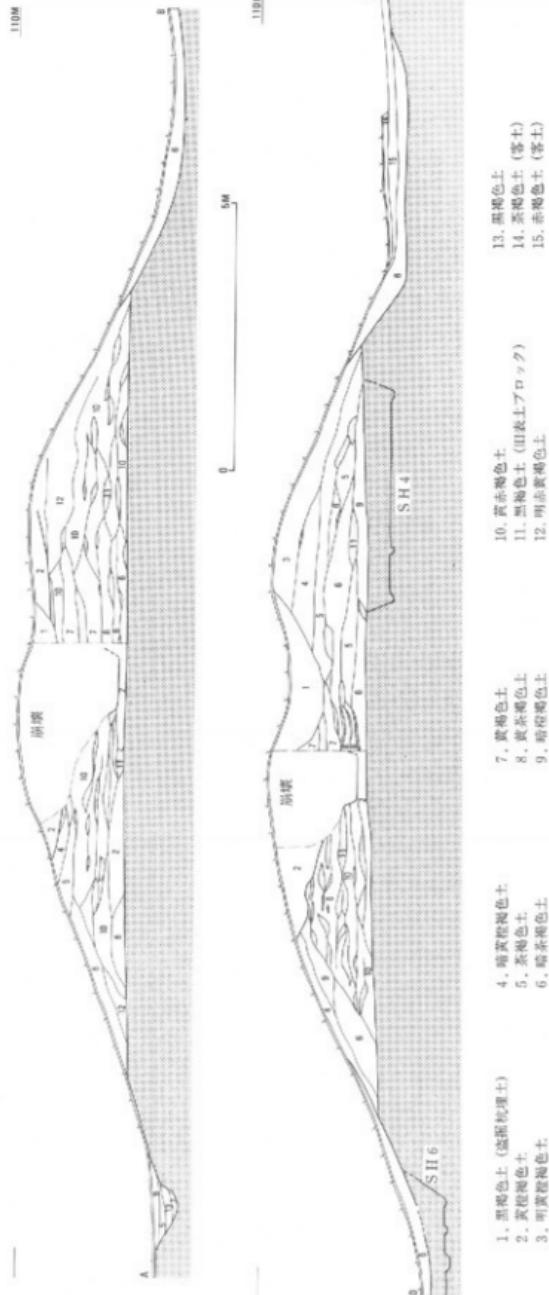
第44図 8号墳地形測量図 ($S = 1 : 150$)

整えている。南西の小口側に須恵器がまとまって置かれていた。この出土状態は今まで記述してきた古墳と全く同様である。

須恵器の組成は有蓋高杯5、壺1、中型の甕2、である。それに、土製紡錘車1点がある。須恵器の反対側には刀子1点が検出された。須恵器は棺外と考えられる。また、頭位方向は今までの例から考えて南東方向と考えられる。

第47図、48図が第1主体の全ての遺物である。

1~5は有蓋高杯である。これらは1~3の1群と4~5の1群に2分される。前者は杯部から脚部にかけてカキ目を持つものに対し、4~5には施されていない。各グループは大きさの点において全く同じ数値をもつ。そして、両者の差は器高、最大径において前者が1cm大きい。6は土製紡錘車である。径4.3cm、厚さ1.8cm、穴の径0.8cmを測る。7は刀子である。先端部を欠く。8は壺で



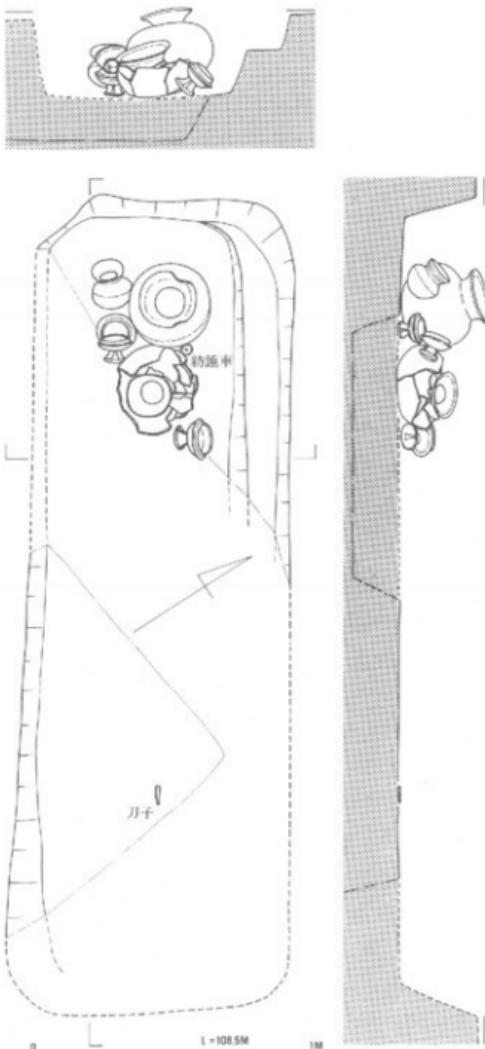
第45図 8号墳墳丘断面図 (S = 1 : 100)

ある。口縁部から頸部にかけて突帯が2条、波状文が2状それぞれめぐる。胴最大径付近には上位から下にかけて沈線文、刺突文、カキ目が施されている。

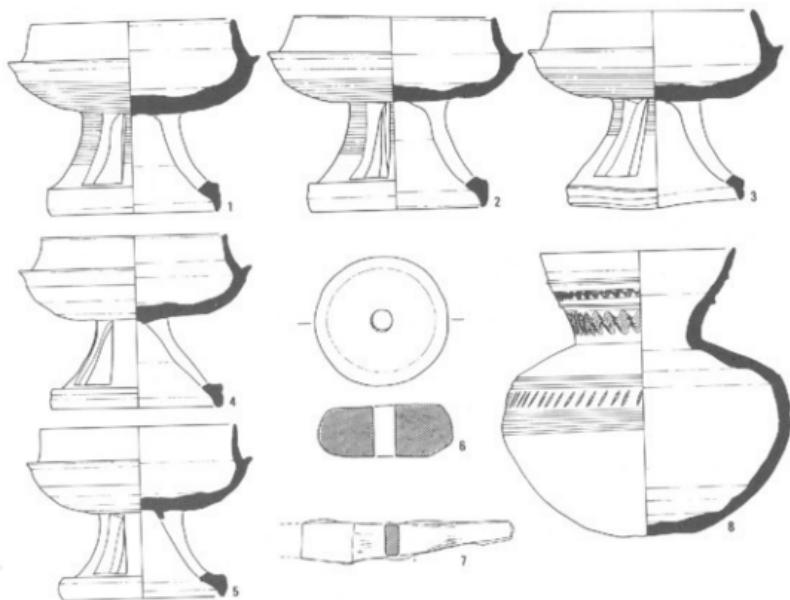
9・10は中型の甕である。器形、文様共類似している。相異点と言えば頸部の突帯が9が1条であるのに対し、10が2条になっている。外面は平行叩き、内面はナテ仕上げである。10の外面は叩きの上を櫛状工具で等間隔に直線文を施すのに対し、9は叩きのままである。

第2主体は墳丘の中心部よりやや北側に位置する。盜壙により主体部の大半が破壊されていた。主体部は竪穴式石室であり、その石室の北西コーナーがわずかに遺存していただけである(第49図)。石室は基底部から2段の石積が残るだけで高さは不明である。平面的に見ると石室を形成する内側の石列の外にさらに石が配されており二重の構造になっている。この例は茶山1号墳(註5)の石室の構造と全く同じである。床面には小礫が敷かれていた。石室の規模は不明である。主軸の方向は第1主体と同じく北西～南東方向である。

石室残存部からの遺物の出土はない。盜壙壙の埋土からはかなり量の須恵器片等が出土した。盜壙壙は第1主体にまで達していないことから、これらの遺物は第2主体の石室に伴うものと判断した。第50・51図に図示したものがそれである。11～



第46図 8号墳第1主体平面・断面図 ($S = 1 : 20$)

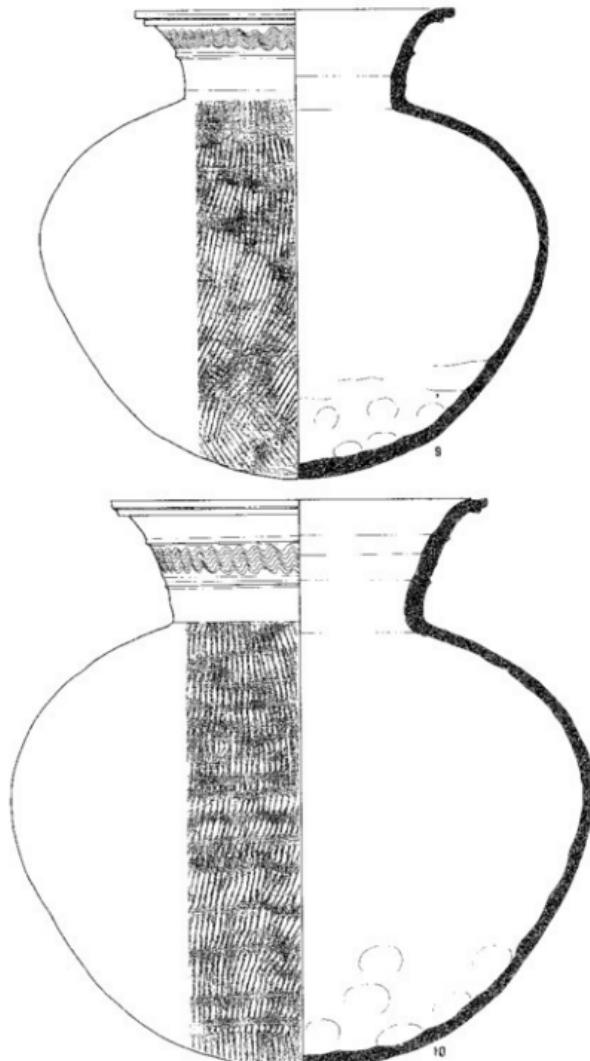


第47図 8号墳第1主体出土遺物(1) (1~5・8 = 1:3, 6:7 = 1:2)

16は杯蓋である。11~13・16のように天井部が丸くなるものと、14・15のように平らなもの両者が認められる。16だけが他に比べて口径がやや大きい。天井部外面のヘラ削りは12を除き全体的に周辺にまで及ばず中位でとまっている。12は回転ヘラ削りのあとを消している。18~27は高杯の蓋である。他にも数点の破片があることからその数はもっと多かったものと考えられる。20だけが天井部外面にカキ目をもつが、他はいずれも認められない。22・24は他に比べて立ち上がり部が短かい。天井部のツマミは21のように高くて中央部が大きく凹むものと、25のように偏平なものがある。口径も21・22は大きいが、他は比較的小さいなどバラエティーに富んでいる。28~31・34は有蓋高杯である。28・31は脚部を欠く。29の口縁部は部厚く、端部が丸くおさまるなど他のものと比べ異質な感じをうける。31の杯部は他のものと比べて深い器形となっている。29・30の脚端面は大きく異なっている。すなわち、29は外側にゆるやかに張り出すのに対し、30はナデによる凹みがめぐっている。さらに、脚の張り具合も29は強く張り出しているのに対し、30はあまり張り出さないなど相異点が指摘される。34は28~31のタイプとは異なり、大型のものである。口縁部はやや内傾しながら立ち上がり、端部は丸くおさめている。受部下位には波状文をめぐらし、さらに杯部下位から脚部にかけてはカキ目を施している。脚部には長方形の透し孔が4ヶ所に穿たれている。32・33は高杯である。33は脚部を欠く。32の杯部は口縁部から底部にかけ屈曲するのに対し、33はゆるやかなカーブを描いている。杯部

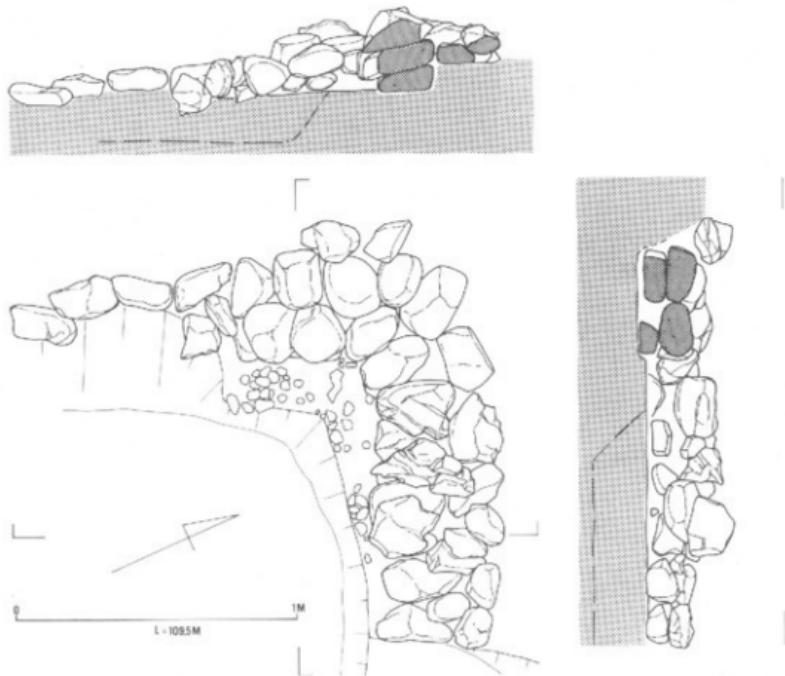
外面に波状文、カキ目を施すのは同じ手法である。36は細形金環である。線の径1.5mm、環の径1.8cmを測る。1点だけ単独で出土した。35は中型の壺である。口縁部端面には2条の凹線がめぐる。頸部には2本の突帯が施され、その間を波状文でうめいている。副部外面は縱方向の平行叩きを施した後、横方向の直線文が切っている。内面はナデ仕上げである。37はU字形の鉄製鋤先の破片である。柄を着柄するための開みが認められる。38は鉄塊である。長さ5.5cm、幅3.8cm、厚さ1.7cmを測る。分析に出している（註6）。他に鐵と考えられるような破片若干量がある。

次に、表上除去時において、埴頂から



第48図 8号墳第1主体出土遺物(2) (S = 1 : 3)

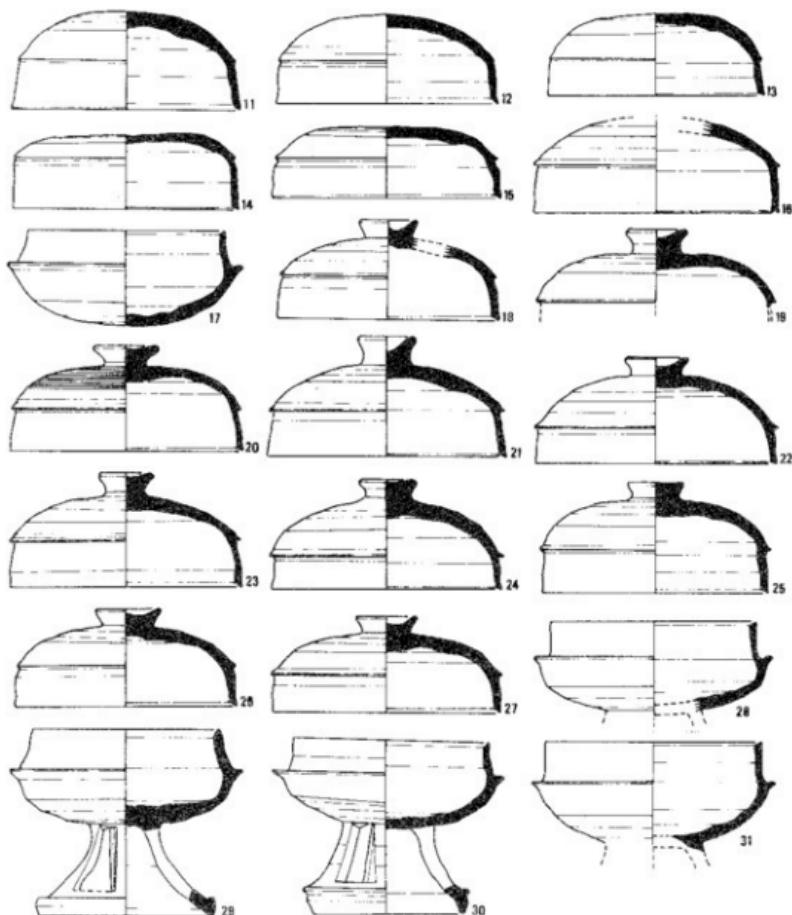
東側斜面にかけて多量の須恵器の散乱を認めた。第52図に図示したものがそれである。破片の数はあるが接合して復元できるまでにはいたらなかった。40・41は同一個体である。他に図示



第49図 8号墳第2主体平面・断面図 ($S = 1 : 20$)

し得なかつたが、頸部に波状文をもつ個体がもう1点あることから、8号墳の墳頂には大型の甕が少なくとも3個以上置かれていたことが理解される。

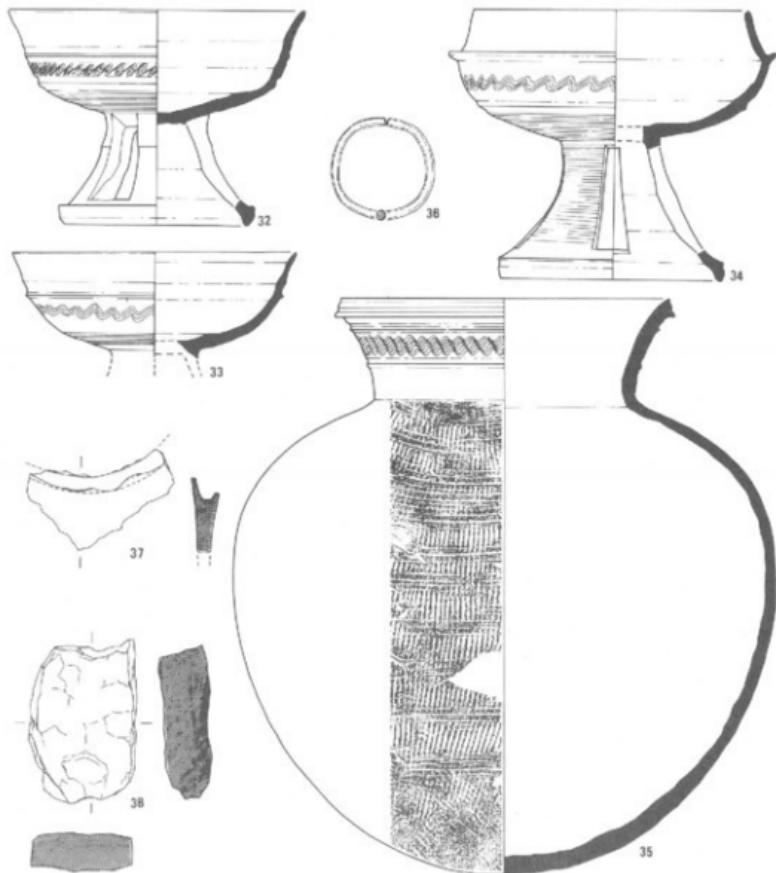
以上、8号墳の概要をみてきたが、第1主体、第2主体とともに須恵器の組成の中に有蓋高杯が加わるということが指摘できよう。それも数量的に組成の中で高い率を占めている。本古墳群中、有蓋高杯を多量に伴うものは8号墳だけである。このことは注目しておいてもよい事実である。それともう1点、第1主体と第2主体の二つの主体部が検出されたわけであるが、5号墳のように遺物としての時期差が明確に把握しきれないということである。層位的には第1主体の床面と第2主体の床面との間には80cmのレベル差があり、当然上の第1主体の方が新しいはずである。しかしながら時期差として把えられないということは、第1主体埋葬後の比較的早い時期に第2主体が追葬されたものと考えられる。結果的には追葬であるが、木棺直葬と竪穴式石室を比較した場合、後者の方が技術的にも労働的にもまさるものと考えられる。このことから解釈の問題として新たな構築と理解した方がよいかも知れない。



第50図 8号墳第2主体出土遺物(1) ($S = 1 : 3$)

9号墳 (第53~62図)

本古墳群が立地する丘陵の先端部に位置する。8号墳からは南東方向にあたり、8号墳の中心から9号墳の中心までは37mを測る。1号墳~8号墳まではほぼ假通った標高に位置するが、9号墳だけはレベル的に低い位置に形成されている。ちなみに、8号墳の墳端と9号墳の墳頂とのレベル差は1mを測る。本古墳も調査前の正な等高線が示すように盗掘を受けていた。しかし、凹みを残すような状況ではなかった。表土を除去する際、やはり甕を中心とした須恵器の散乱が認められた。甕は図示したように2個体である。他に、杯、豆等が認められたが、果



第51図 8号墳第2主体出土遺物 (2)(32-35=1:3, 36=1:1, 37・38=1:2)

して、埴頂に置かれたものがあるいは第5主体に伴うものか否かは不明である。

表土を除去すると14~14.5mの円墳となる。山側には墳端に沿って弧状に溝がめぐる。その溝の底面から埴頂までは1.3m、谷側からは2.7mを測る。盛上の厚さは中心部で1.4mを測る。盛上は従前の古墳同様旧表土と地山の互層よりなる。主体部は第1~第5までの5主体が認められた。第1主体が中心主体で、盛土との関係は周間に土を盛り上げ、ドーナツ状に土手をつくり、中央部に墓壙を設定し、その上に一気に土を盛っている。第3~第5主体は追葬で、第1主体埋葬後墳丘が形成されてから掘り込まれている。さらに、9号墳には本古墳群中唯一の排水溝が検出された。排水溝は第1主体の下層に主軸に沿って東西方向に配されていた。西

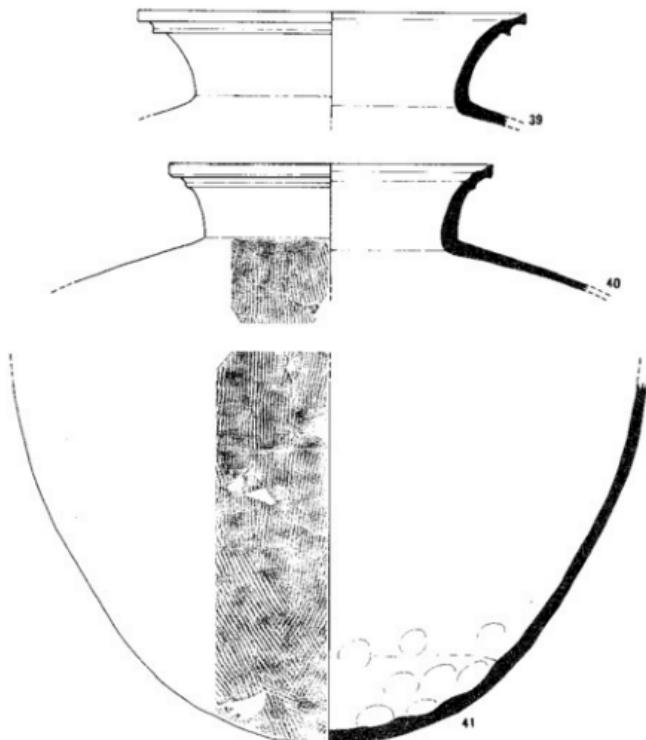
側はトレンチと重なり、遺存しないが、真西方向に延びていたものと推定される。排水溝の平均幅は約40cm、第1主体床面からの深さは約35cmを測る。

第2主体は第1主体の南西側に平行して位置する。主体部の長さ幅等の計測値は、第1主体と重複するため明確把握できなかった。

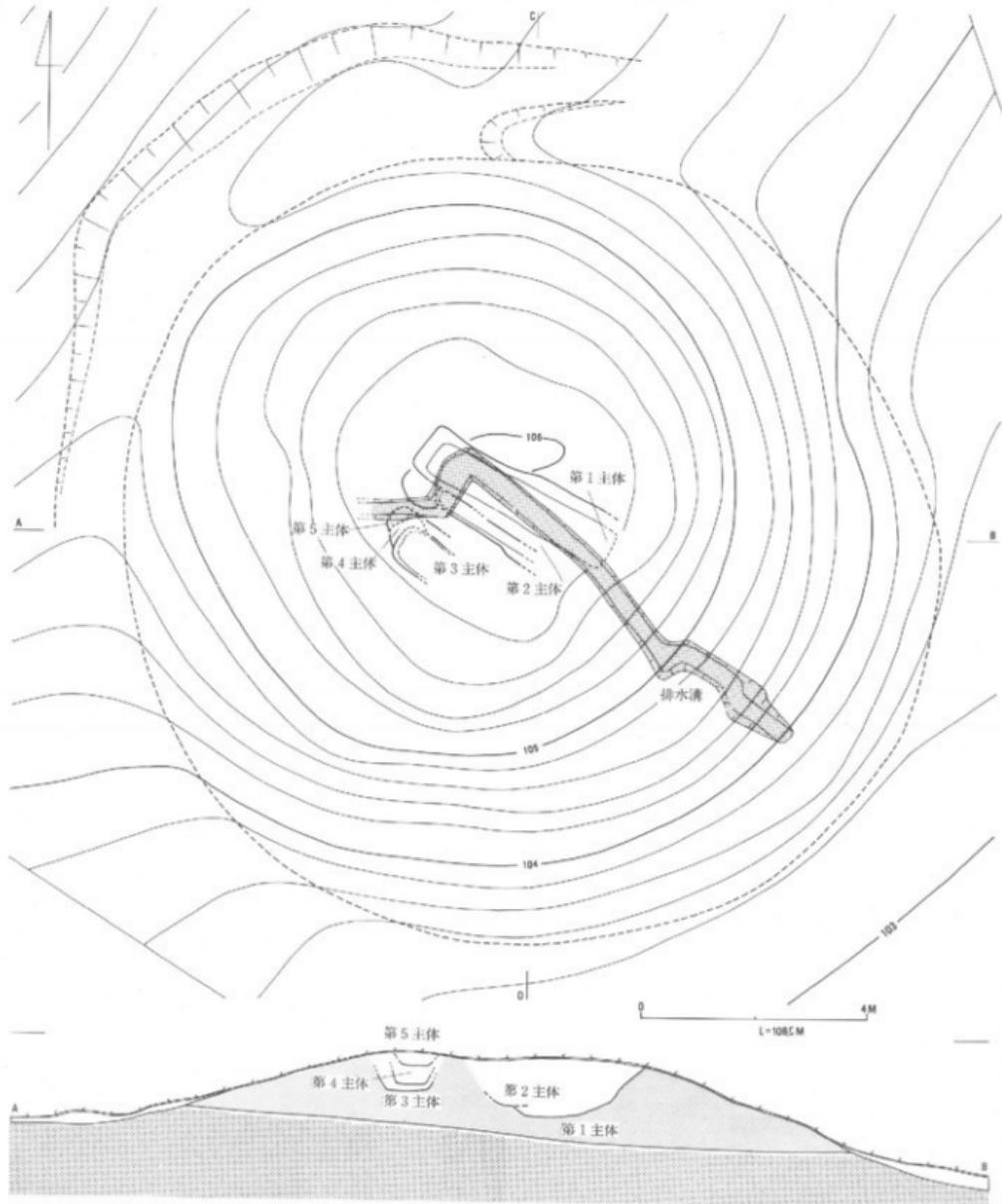
以下、各主体ごとに説明することにする。

第1主体（第55～57図）

第1主体は主軸を北西～南東方向にむけている。これは従前の木棺直葬形式のものと全く共通する点である。床面での幅は60～70cm、長さは3.8mを測る。墓壙の構築方法は先程述べたように、周間に土を盛り中央部に凹みをつくる。そして、その中に墓壙を築くというやり方であり、断面で見ると二段掘りを呈する。床面から段までの高さは約60cmを測る。遺物は北西小口側に須恵器類がまとまって置かれていた。須恵器の組成は杯蓋4、杯身5、壺1、小型の壺1、中型の壺1である。他に、大型の鉄鎌1、鉄製ノミ1点である。反対側には鉄鎌3、刀子1、鉄滓若干量が出土した。中央部からは鉄刀が出土した。これらの遺物の組成、出土状態は木棺直葬形式に今まで見られたものと全く同様であり、頭位方向は南東方向とすることができよう。そして、須恵器は棺外の遺物とする事についても異論はあるまい。



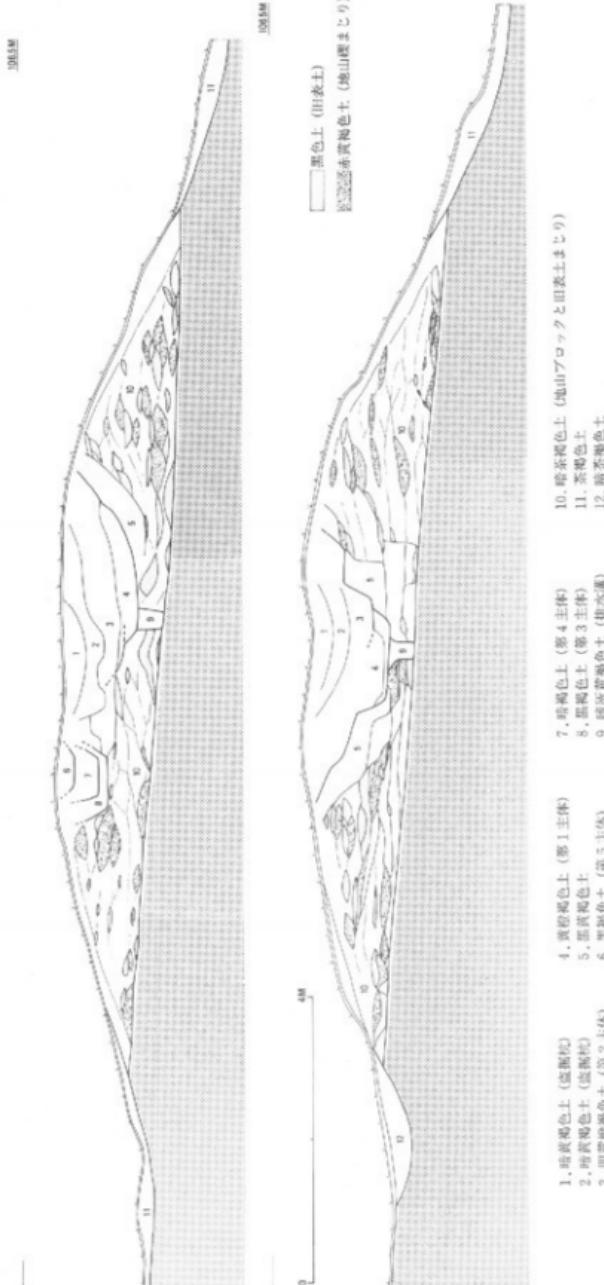
第52図 8号墳出土遺物 ($S = 1 : 4$)



第53图 9号填地形测量图 ($S = 1 : 100$)

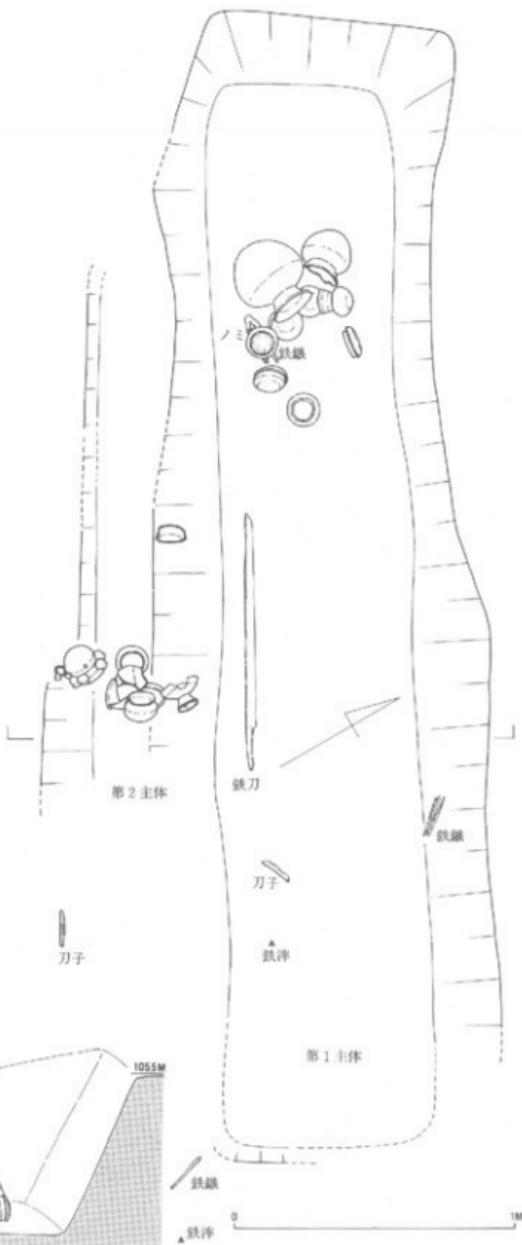
次に、個々の遺物についてふれる
こととする。1～4は杯蓋である。

1・2の天井部は扁平なのに対し、3・4はやや丸味をおびている。口縁部はほぼ垂直に立つ。天井部外面のヘラ削りは頂部から半分強の位置まで及ぶ。6～9は杯身である。6の底部が丸味をおびるのに対し、他は扁平である。受け部はいずれも外方に強く張り出す。口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。底部外面のヘラ削りは平均すると中位まで及んでいる。10は直口壺である。口縁から頸部にかけて2条の回線がめぐり、その間を波状文で加飾している。胴最大径にも2条の回線文を施した後、間を刺突文でうめている。

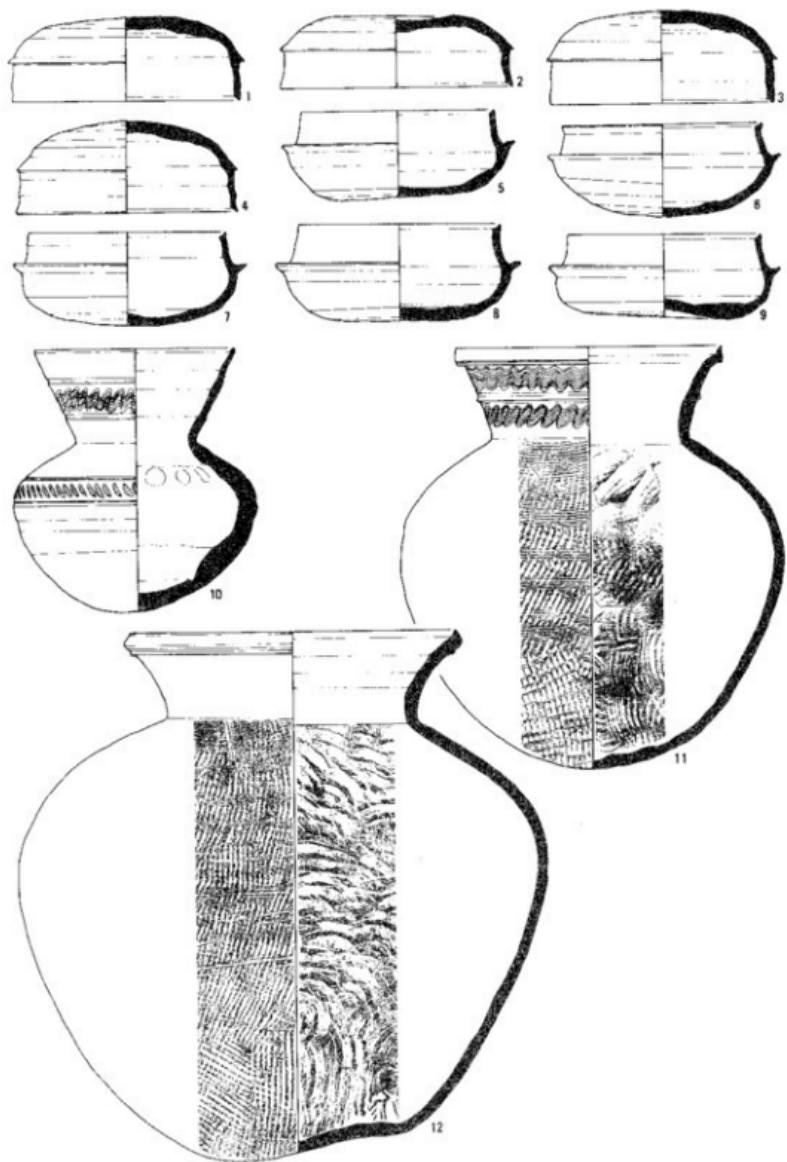


第54図 9号填塗丘断面 ($S = 1 : 75$)

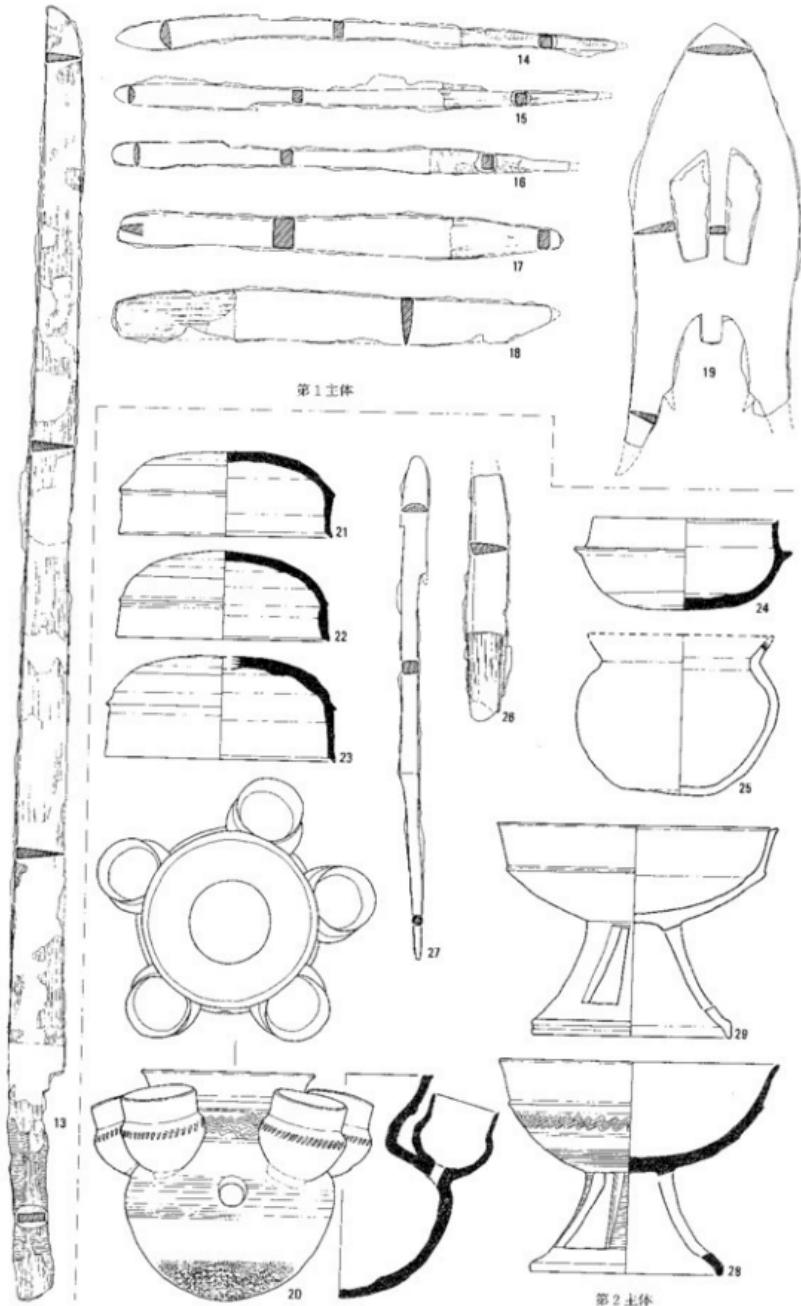
11は小型の、12は中型の甕である。11は口縁と頸部の間に突帯をめぐらせ、その上位と下位にそれぞれ波状文を施している。胴部外面は両者同じで平行の叩きを施した後、横走する直線文が切っている。内面は同心円叩きのままであるが、12は同心円の単位が非常に大きいのが特徴である。13は直刀である。切先を須恵器側にむけて出土した。全長95cm、最大幅3.8cmを測る。把頭は木質、鹿角でくるんだ後、糸を巻いて仕上げている。把部から刃部へいたる区部は二段に作られている。14~16は鉄鎌である。先端は両刃のものである。基部には柄を装着した際の樹皮巻きが残っている。17は鉄製のノミである。断面方形の鉄素材の先端部を鋭角に仕上げ刃部としている。基部には木質が接着している。18は刀子である。19は大型の鉄鎌である。残存長15.2cm、最大幅5.9cmを測る。推定復元すると全長は16.2cmになる。広島県弘住3号墳地（註7）に類例がみられるが、その数は多くない。弘住3号墳報告では実用品ではなく「儀器としての性格が強いもの」と



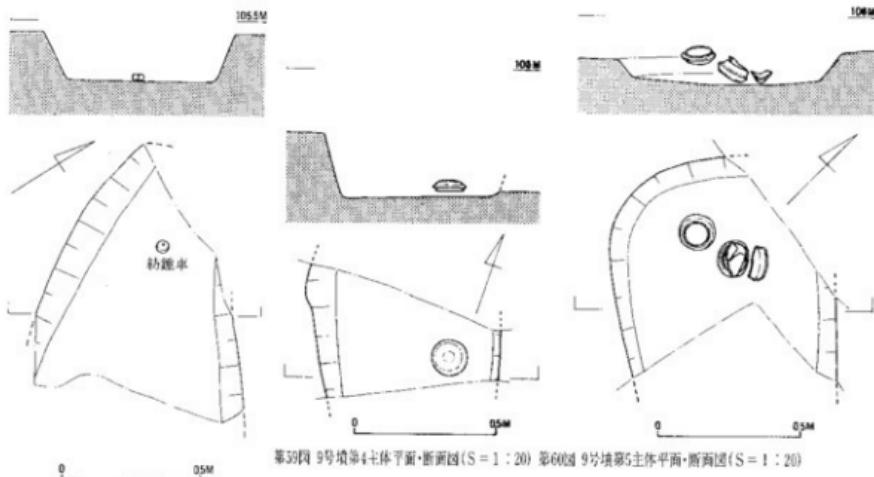
第55図 9号墳第1・2主体平面・断面図 (S = 1 : 20)



第56圖 9號墳第1主体出土遺物(1) ($S = 1 : 3$)



第57图 9号墓第1主体出土遗物(2), 第2主体出土遗物(13=1:4, 14~19·26·27=1:2, 20~25·28·29=1:3)



第58図 9号墳第4主体平面・断面図(S=1:20) 第60図 9号墳第5主体平面・断面図(S=1:20)

して、鐵鎌形鐵製品という呼称を与えていたが、本報告書では鐵鎌として一括した。他に鐵滓 8 点が出土した。いずれも 1 cm に満たない小さなものである。第 2 主体からも 1 点出土しており、9 号墳からは全体で 9 点出土したことになる。この内、第 1 主体の 1 点を分析に出した。残りの 8 点の重量は 3.25 g を測る。

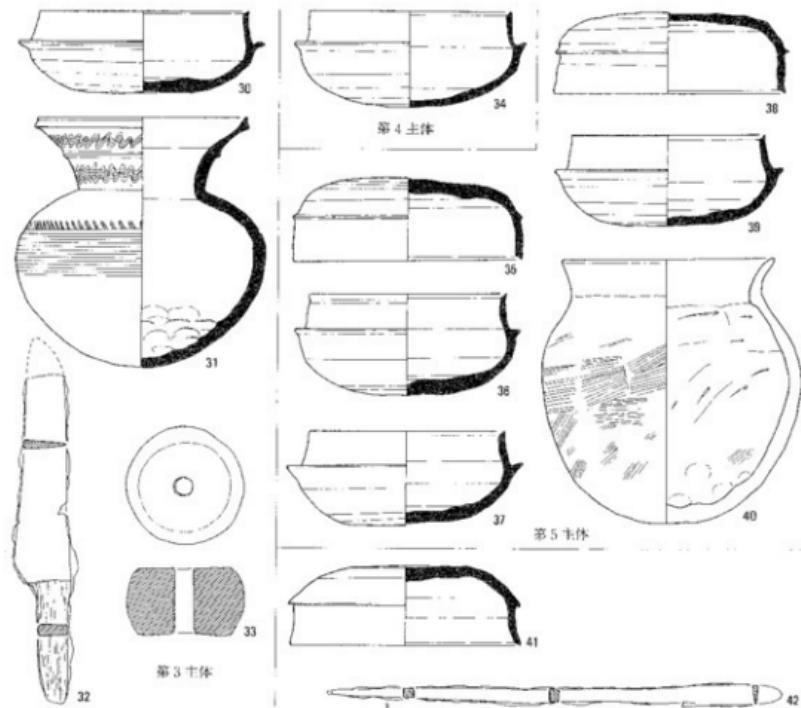
第 2 主体（第 55・57 図）

第 2 主体は第 1 主体の南西側に平行して位置する。北東側は第 1 主体部の埋土となるため明確に把握できなかった。床面で幅約 20cm が確認できただけである。また、長さも明確にしえなかつた。

第 58 図 9 号墳第 3 主体平面・断面図(S=1:20) ほぼ中央部で須恵器、土師器がまとめて出土したが、今まで記述してきた古墳同様、足元方向の棺外に置かれたものか、あるいは子持甌の転落した出土状態等にみられるように棺上に置かれたものは断定できなかつた。しかし、主軸の方向、刀子の位置等から推測するとすれば前者の可能性が強いようと考えられる。これらの遺物の組成は須恵器杯蓋 3、杯身 1、子持甌 1、高杯 1、上師器小型甌 1、高杯 1 である。反対側には刀子 1、鐵鎌 1 が出土した。それに、鐵滓 1 点がある。第 1 主体と第 2 主体の床面のレベル差は 20cm 強である。

次に、個々の遺物についてみることにする。

21~23 は須恵器杯蓋である。23だけが群から離れて単独で出土した。半分欠けている。23は21・22に比べて器高、口径とも大きい。24は杯身である。やや小ぶりで受け部は水平に強く張り出す。25は土師器の小型の甌である。底部は平底を呈す。29は高杯であるが、器形を見る限りは

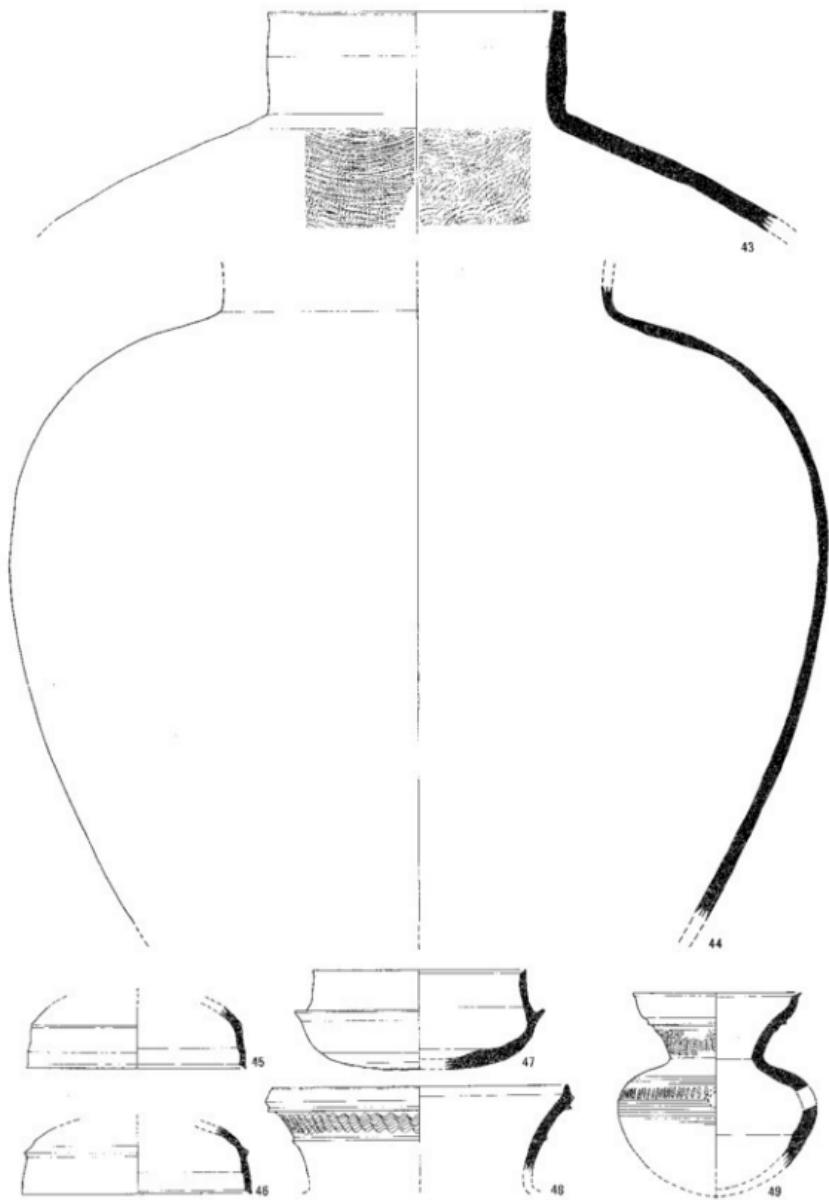


第61図 9号墳第3~5主体他出土遺物(30・31・34~41=1:3, 32・33・42=1:2)

須恵器に酷似する。しかし、焼成の面からみると全く土師質である。ここでは上帥器に分類しておく。脚部の長方形の透し孔は3ヶ所に穿たれている。28は須恵器高杯である。杯部は屈曲することなく丸くおさめている。透し孔は3ヶ所である。外面には波状文、カキ目が施されている。20は子持鉢である。器高8cm、最大径7.4cmを測る邊に口徑2.4cm、器高2.6cmの小型の甕5個が肩部につくものである。甕の頭部には波状文、胴部にはカキ目が施されている。底部にだけ格子目の印きが残るが他はナテ消されている。26は刀子、27は鉄鏃である。

第3主体（第58・61図）

第1・第2主体の南側に第4・第5主体と重複して位置する。平面では観察できず、墳丘を断ち割ったトレンチの断面観察で確認した。従って第3~5の3主体いずれも掘り方は上層觀察の上手の部分しか把握できなかった。第3主体残存部平面形はややいびつな形を呈しているが、長方形の基盤に木棺を直接埋葬したものと考えられる。残存部での床面幅は50cm強である。出土遺物としては土製紡錘車、須恵器杯身、土師器片がある。他に須恵器壺があるが、こ



第62圖 9號填出土遺物 ($43 \sim 44 = 1 : 4$, $45 \sim 49 = 1 : 3$)

れは、墓壙の推定ライン上にあり、伴わない可能性もある。ここでは断定をさせておきたい。他に、刀子1点がある。30は須恵器杯身である。器高がやや低く、外面のヘラ削りは底部から3分の2のあたりにまでおよんでいる。31は前述のとおり本主体に伴うものか否か不明であるがここで取り扱うこととする。頸部からゆるやかに外反する壺である。頸部から口縁部にいたる中間に突帯をめぐらせ、その上位と下位に波状文を施している。ほぼ球形の胴部最大径付近にはカキ目、その上位には刺突文を施している。32は刀子である。基部には着柄時の木質が残存している。33は土製紡錘車である。径4.2cm、厚さ2.4cmを測る。中央部に7mmの円孔が穿たれている。他に土師器片が出土したが図示できるものではない。

第4主体（第59・61図）

第3主体の上位に重複して位置する。第3主体の床面と第4主体の床面とのレベル差は13cmと非常に接近している。床面残存部の幅は55cmを測る。木棺直葬と考えられる。須恵器杯身が伏せられた状態で1点だけ出土した。第61図34がそれである

第5主体（第60・61図）

第4主体の上位に重複して位置する。第4主体の床面と第5主体の床面とのレベル差は36cmを測る。残存部での床面幅は65cmである。原位置を保って墓壙内から出土したものは第61図35・36・39の3点であるが、第53図の墳丘断面図で明かなように表土を除去すると、すぐ第5主体の遺物が出てくるという状況であった。この時、数点の須恵器の破片、土師器片が出土した。これらの破片は原位置を保って出土したものと接合することから、本主体に属することが判明した。第61図37・38・40がそれである。他にも、第62図に図示したものは表土として取り上げたものであるが、45～49の遺物は本出体に伴う可能性が十分考えられる。

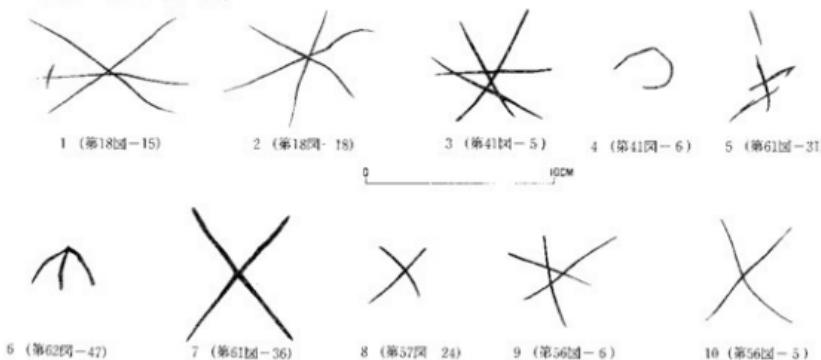
第5主体の個々の遺物についてふれてみよう。35・38は杯蓋である。いずれも口縁部は垂直に立ち上がり、天井部は扁平に仕上げられている。36・37・39は杯身である。36は他に比べて器高が高い。外面のヘラ削りは36・39が中位までであるのに対し、37は3分の1程度にとどまっている。40は小型の上師器蓋である。球形の胴部外面は横方向のハケ目、内面は上位がヘラ削り、下位は指頭圧痕、ハケ目となっている。

この他に、墳丘から出土し、いずれの主体部にも属さない遺物が2点ある。第61図41の須恵器杯蓋、42の鉄鎌である。杯蓋は第1主体の墓壙掘り方上端から北東方向へ約1mの地点から単独で出土した。周辺を精査したが他の遺物構造は全く検出されなかった。恐らく二段掘りのテラス部分に置かれたものと考えられる。そう考えると、前述の第4主体の壺（第61図31）も杯の反対側に置かれたものと考えられないこともない。一方、鉄鎌は第1主体の中心部から約4m南東方向の排水溝埋土から出土した。推測するとすれば第2主体のものが二次的に移動したことが考えられよう。

最後に表土として取り上げた遺物についてふれることにしよう。

第62図に図示したものがそれである。43は直口の大型の甕である。他に破片はかなりあるが接合しない。外面は平行叩きの上を横走する直線文が切っている。内面は同心円の叩き仕上げである。44も大型の甕である口縁部を欠く。内外面ともナデである。両者は墳頂から東斜面にかけて散乱していたもので、墳頂に置かれていたものと考えられよう。45・46は杯蓋である。いずれも口径が小さく、口縁部と天井部を画す張り出し部が丸くおさめられ、外方に張り出さない特徴をもつ。47は前者に比べると一まわり大きい杯身である。48は中型の甕、49は瓶である。45~49のこれらの遺物は先程も述べたが第5主体に伴う可能性が十分考えられる。

須恵器ヘラ記号（第63図）



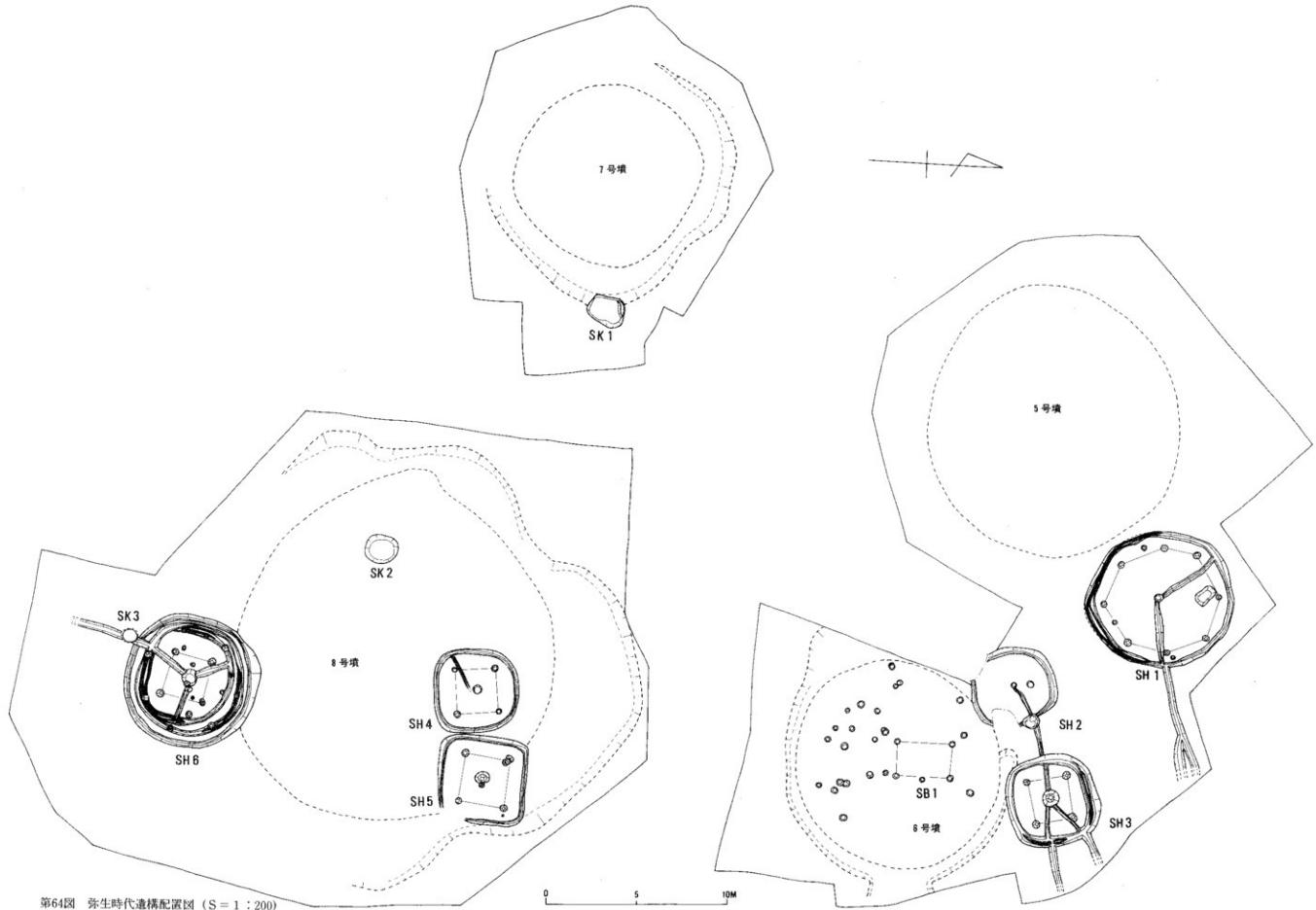
第63図 須恵器ヘラ記号 ($S = 1 : 2$)

本古墳群から出土した須恵器の内、計10点にヘラ記号が認められた。1~10の記号の下の表示がそれぞれの実測図に対応する。器種構成でみると5が甕であるだけで、他は全て杯身である。1・2は4号墳、3・4は7号墳、5~10は9号墳である。記号をみてみると、直線を2本交差させるもの(7・8・10)、3本交差させるもの(1・2・9)、4本のもの(3)と不規則なもの(5)がある。それと4・5のよう丸味をおびるものもある。この記号を須恵器生産工人の所産と規定するならば、これらの須恵器は4号墳、7号墳、9号墳の伴出関係の組み合わせにより、同一工人工集団の手によるものと考えてさしつかえないと考えられる。

2 弥生時代の調査

古墳調査時に下層に弥生時代の遺構が存在することが判明していた。しかし、予算的時間的制約もあり、遺構が確認されている部分の拡張という調査方法を取らざるを得なかった。この結果、住居址6、建物址1、上塙3を検出することができた。

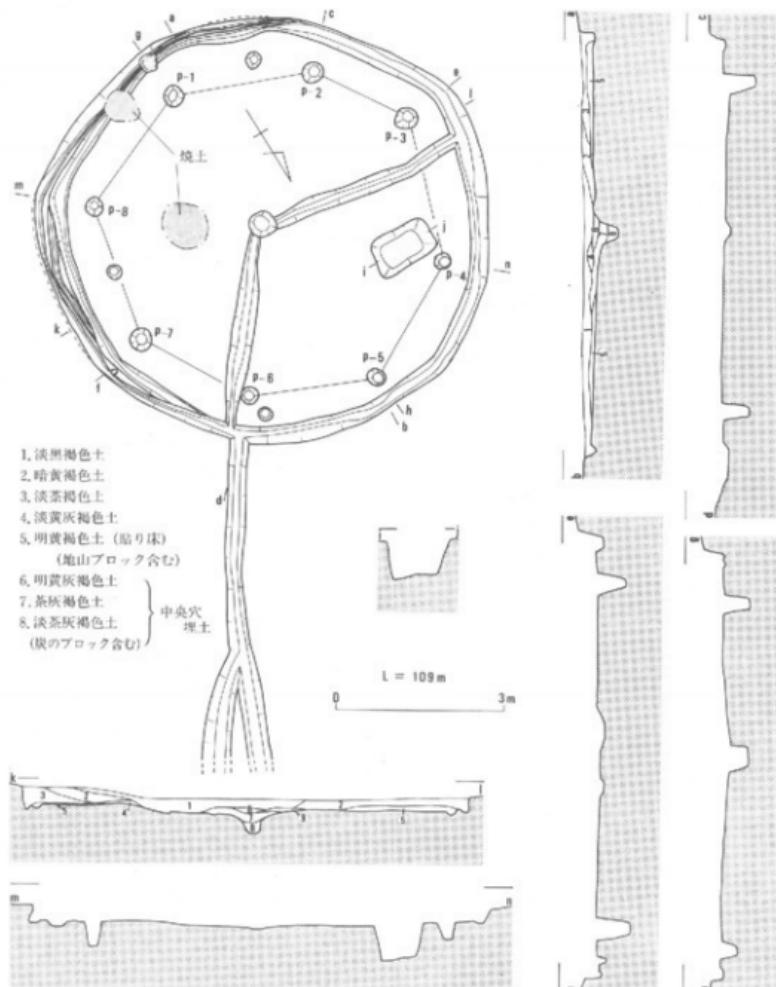
以下、個々の遺構について概要を述べることにする。



第64図 弥生時代遺構配置図 (S = 1 : 200)

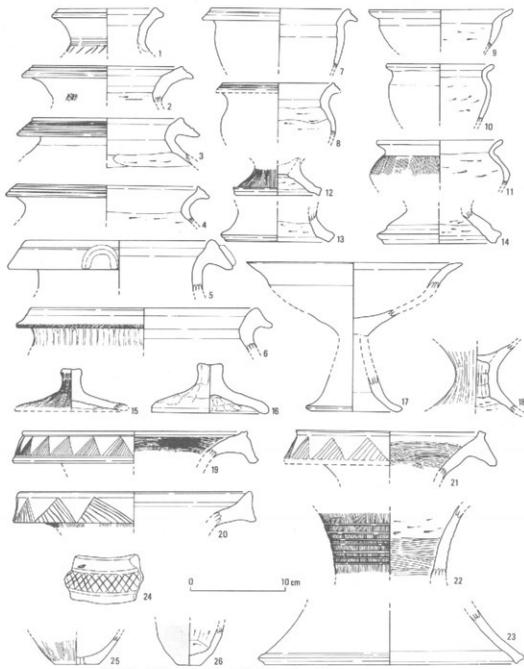
住居址1（第65図）

5号墳の北東に隣接して位置する径8mの前後の大形住居である。平面形は八角形を呈し、各コーナーに8個の柱穴が配される。床面中央には深さ60cmの小規模な中央穴が位置し、これに2本の床溝が取り付く。中央穴埋土は3層に分層され、灰のブロックを多く含んでいる。この中央穴と南側壁体溝付近の2ヶ所で焼上面が確認された。また床面からは、長辺1.1m、短辺60cmの



第65図 住居址1 平面・断面図 ($S = 1 : 100$)

小型の方形土壙がP-4に接した地点で検出されている。深さは70cm前後、断面は逆台形を呈する。住居内に貯蔵穴的な役割を果たしたものと思われる。床面周囲にめぐる壁体溝は、東半部で数本が重複するが、柱穴のある方から推測して住居の拡張というよりもむしろ壁体の修復とみなすのが妥当であろう。最外方の溝の断面が垂直ではなく、「く」の字形に外方に張り出す点が特筆される。遺物は床面よりやや浮いた状態で多くの土器片が出土した。



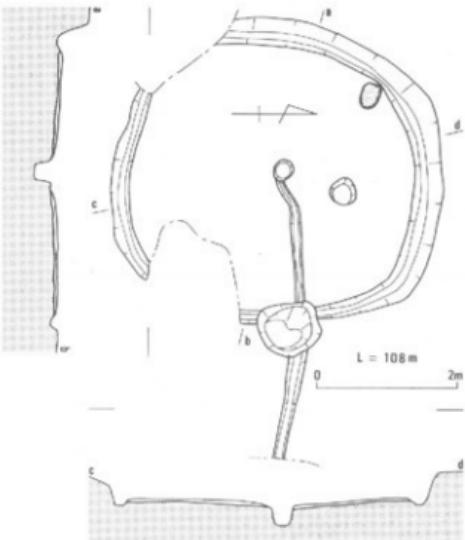
第66図 住居址1出土土器 (S = 1 : 4)

住居址1出土土器（第66図）

壺形土器、甕形土器の口縁部はいずれも上下に拡張させ、外面には数条の凹線文を有する。鉢形土器には、上下に把厚させた口縁部外面に凹線文を施すタイプ（7・8）と、端部をナデによりまるく仕上げるタイプ（9～11）の二者が認められる。蓋形土器（15・16）は外面に細かいタテハケを施すものと、内外面とも指ナデで仕上げるものがあり、16の内面には縁に沿ってススが付着していた。17は高杯形土器。やや深めの受け部からゆるやかに屈曲して口縁端部にいたる杯部と、細みの脚部を有する。内外面とも磨滅が激しいため調整等は不明。19～21は器台形土器の口縁部で、拡張した端面にはいずれも鋸歯文を規則的に施す。内面には横位のハケメを施すものがある（19・21）。24は器台形土器の口縁端面が剥離したもので、ヘラ描き格子目文の左上端には稜がらの圧痕が認められた。25の底部には穿孔が、26の小形土器の外面には赤色顔料の塗布がそれぞれなされている。以上、住居址1出土の土器は、高杯形土器・器台形土器の特徴から、弥生時代後期前半のうちでも新しい様相を呈する一群であることが指摘できよう。

住居址2（第67図）

6号墳の北西隅に接して位置する。径約5.8mの円形竪穴住居である。床面周囲には深さ8cm程度の壁体溝が巡るが、南西・南東隅は擾乱を受けており遺存しない。床面中央には中央穴らしき小穴が位置し、これより住居外方に向けて床溝がはしる。この床溝は、東側に位置する住居址3によって切られることから、住居址2と3の先后関係が明らかになる。床面全体に補強を意図した厚さ4～5cmの貼り床が施されていることが確認された。この貼り床を除去した後、床面を精査した

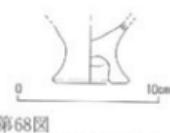


第67図 住居址2平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

が、本住居に伴う柱穴の痕跡は検出できなかった。遺物に関しても埋土中より若干の土器片が出土したのみで、図示できるものは1点にすぎない。

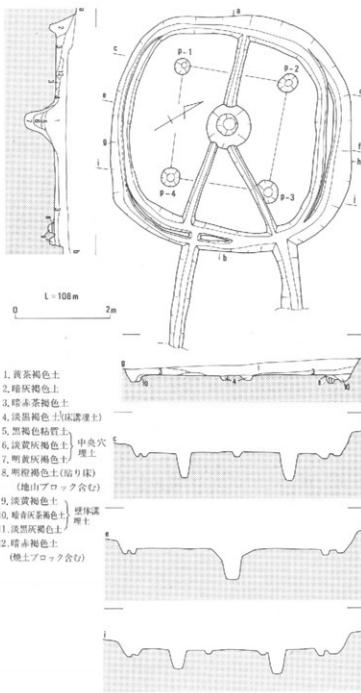
住居址2出土土器（第68図）

台付鉢形土器の脚部部と思われる。内外面では磨滅しているため調整等詳細は不明である。



第68図

住居址2出土土器 ($S = 1 : 40$)



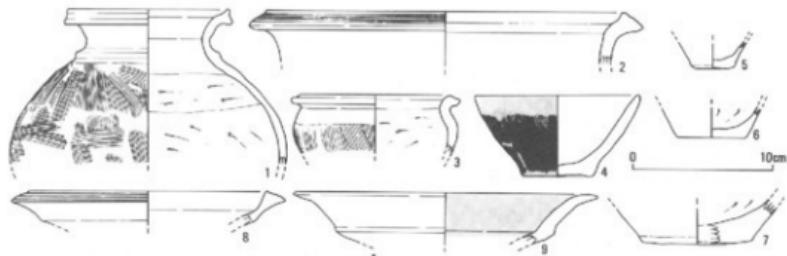
住居址3 (第69図)

6号墳の北側周溝に接した地点に位置する。先述の住居址2から出る床溝をきて營まれた径約5.0mの隅丸方形の堅穴住居である。中央穴を取り囲んで4個の柱穴が配される。P-1～P-4がこれに相当し、心々距離はそれぞれ2.16m、2.24m、2.0m、2.32mを測る。床面からの深さは平均して52cmとかなりしっかりしたのである。中央穴の深さは64cmを測り、埋土は灰色がかった3層の粘質土に分層された。この中央穴から3方向に向って床溝がはしるが、住居内外で自然に解消される。床面周間に壁体溝が巡り、一部で2重の状況を呈するが、柱穴のあり方から考えて建て替えというよりもむしろ住居の拡張程度とみなすのが当然であろう。3本の床溝もこの拡張に対応するものと思われる。遺物は埋土中より若干の土器片が出土した。

第69図 住居址3平面・断面図 (S = 1:80)

住居址3出土土器 (第70図)

1は豪形土器。上下に披張した口縁部をヨコナデで仕上げている。頸部屈曲部外面にはつまり出しによる凸帯が巡り、胸部外面には乱方向のハケメが施される。4は鉢形土器である。器

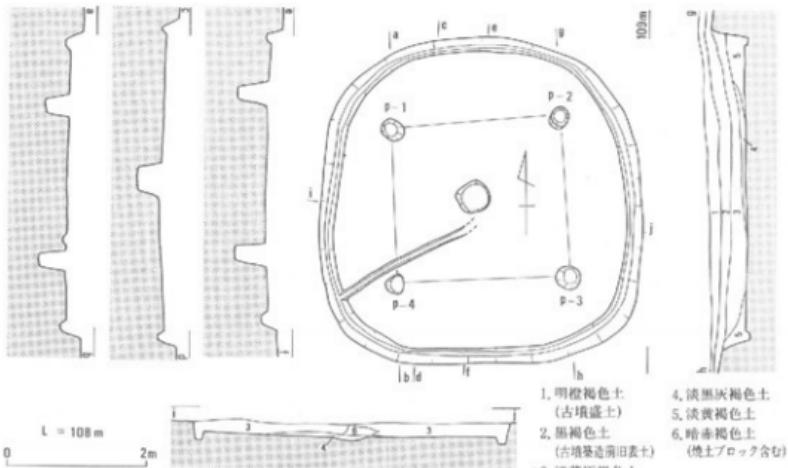


第70図 住居址3出土土器 (S = 1 : 4)

高6cm、口径11.2cmを測る。外面は全体に細かいハケメや赤色顔料の塗布が施された入念なつくりである。8・9は高杯形土器の杯部片である。9は受け部からゆるやかに屈曲して斜め上方にひらくシャープなつくりで、住居址1出土の資料と同様後期前半のうちでも比較的新しい様相を呈するものである。内面一帯は赤色顔料の塗布が認められた。

住居址4（第71図）

8号墳の北隅に重複して位置する。長辺約4.6m、短辺約4.5mの不正隅丸方形を呈する。8号墳の盛土を完全に除去した状態で住居址上面が検出された。これより床面までの深さは平均60cm程度で、埋土はほぼ水平に4層埋積している。4本の柱穴で構成されており、それぞれの心々距離は2.3m前後で一定している。床面中央には深さ32cmの中央穴が位置する。また、南西方向に向けて小規模な床溝がはしるが、中央穴に取り付く痕跡は認められなかった。遺物

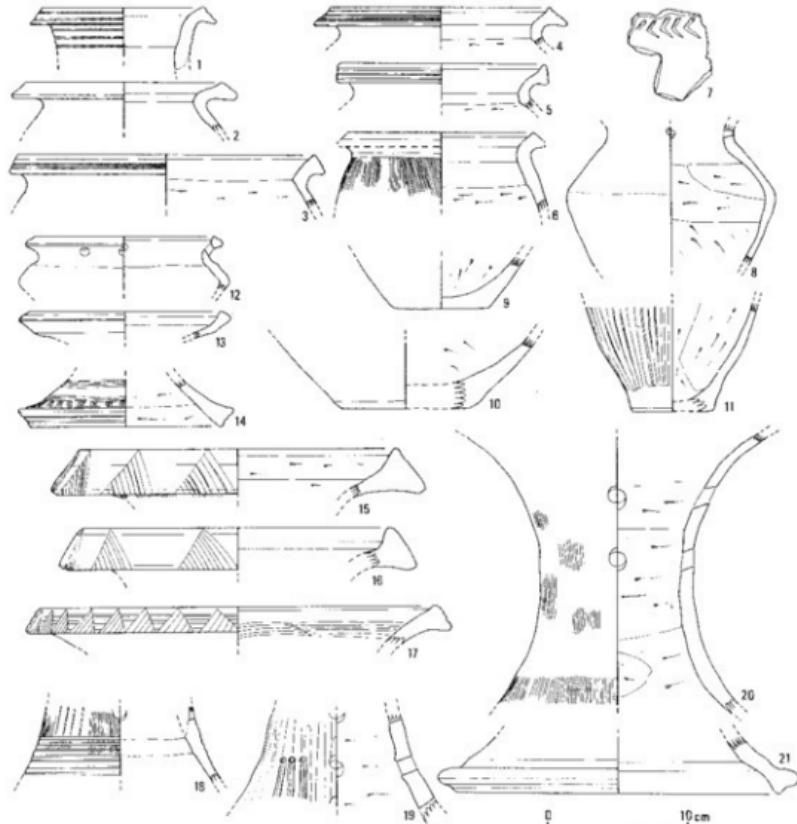


第71図 住居址4 平面・断面図 (S = 1 : 80)

は埋土中より比較的多量の土器片、石器等が出土している。

住居址 4 出土土器 (第72図)

壺形土器、甕形土器は、口縁端部を下方にひきのばす共通の特徴を有する。外面は数条の凹線文あるいはヨコナデにより仕上げる。1~3の外面には赤色顔料の塗布が認められた。13・14は高杯形土器であるが、口縁端部の形状や外面に施描文を施す脚裾部の特徴等、両者とも弥生後期前半のうちでも古めの様相を呈する。15~17は器台形土器の口縁部で、上下に把厚させる端部外面は網目文で加飾する。18~20は胴部片。タテハケ、凹線文、櫛描文、ヘラミガキ等様々な手法を用い入念に仕上げている。いずれも円形の透し穴が穿たれる。



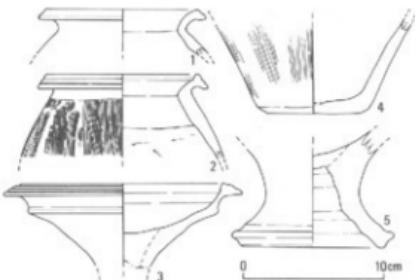
第72図 住居址 4 出土土器 (S = 1 : 4)

住居址5（第74図）

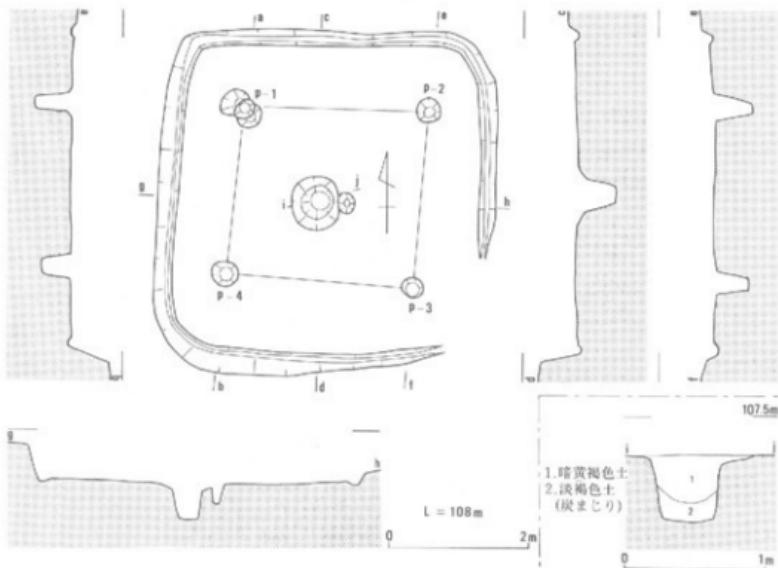
8号墳の北東隅に重複して位置する。西壁の一部を先述の住居址4と接して営まれた長辺4.96m、短辺4.72mの方形竪穴住居である。床面の中央穴は深さ48cmを測る。埋土は2層に分層され、下層には灰が多量に堆積していた。柱穴はP-1～P-4の4個で構成される。心々距離は平均して3m前後と中央穴を取り囲んで規則的に配される。床面周囲には浅い壁体溝が巡るが、住居の南東隅で一部が自然に消滅する。遺物は埋土中ならびに中央穴埋土より若干の土器片と石器が出土した。

住居址5出土土器（第73図）

變形土器（1・2）の口縁端部は下方にひきのばす点で共通する。外面はタテハケあるいはナデ仕上げで、いずれもスヌが付着していた。3は高杯形土器で拡張を示さない端部外面には3条の明瞭な凹線文が巡る。5は中央穴埋土から出土した。厚手の脚部で、内面にはヘラ状工具で調整した痕跡が顕著に残る。



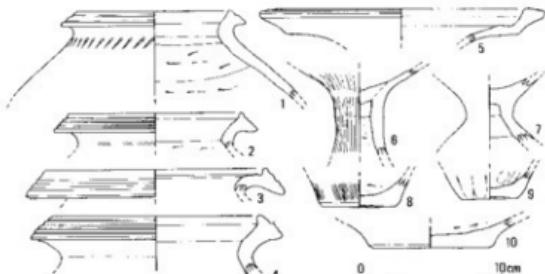
第73図 住居址5出土土器（S=1:4）



第74図 住居址5平面・断面図（S=1:80）

住居址 6 (第77図)

8号墳の南側に接した地点に、4本柱と7本柱の2時期・4軒の住居が重複した状況で検出された。前者はP-1～P-4の柱穴で構成される。最初にこの住居に伴う壁体溝は1番内側のもので、これより本住居を復元すると長径4.96m、短径4.72mの円形住居となる。さらに、柱穴は共有して外方へ2度の小規模な拡張が行われている様子が壁体溝のあり方から推測できる。続く7本柱の住居は1番外側の壁体溝から復元して長径7.36m、短径7.2mを測る大形のものとなる。この住居を構成する穴はP-5～P-11である。床面中央には、径約88cm、深さ24cm程度の浅い中央穴があり、これを4軒の住居がすべて共有する。これより3方向に床溝がはしるが、それぞれの所属時期等は明らかでない。また中央穴の両脇に深さ16cm前後の小穴が検出されたが(P-12、P-13)、用途・時期等詳細は不明である。埋土は斜面に沿って水平に堆積する状況を呈する。遺物は埋土中より若干の土器片が検出された。

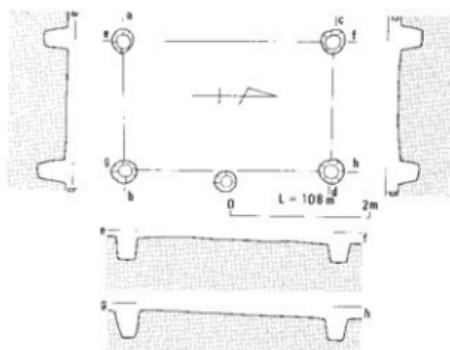


第75図 住居址6出土土器 (S = 1 : 4)

住居址 6 出土土器 (第75図)

1は盃形土器である。上下に把厚させた口縁無外面には2条の凹線文、頸部屈曲部には刺突文が巡る。変形土器の口縁部にも同様の明瞭な凹線文が施される。5～7は高杯形土器。5の杯部は、浅い皿状の受け部からゆるく屈曲して

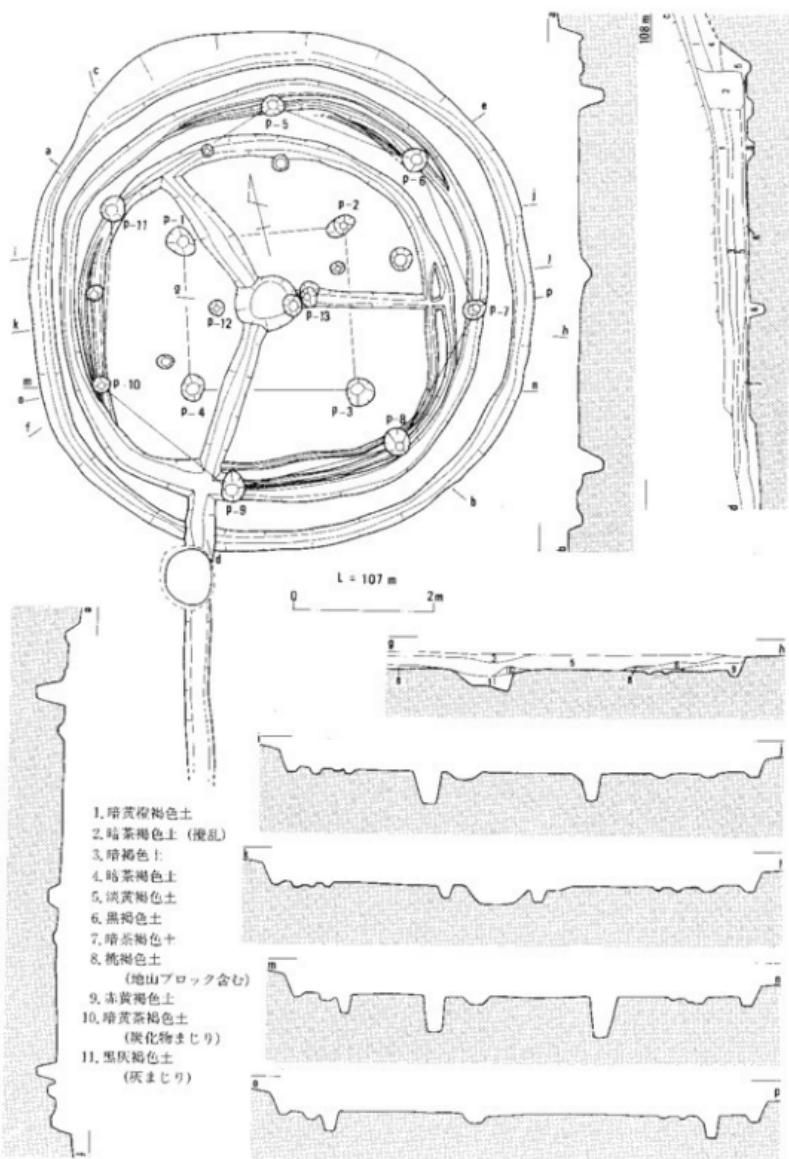
水平に面をもつ口縁部へいたる。内外面とも磨滅が激しい。6は脚部片で外面を細かいヘラミガキで入念に仕上げる。接合部は円錐充填の手法が観察された。



建物址 1 (第76図)

6号墳に重複して検出された。桁行1間、梁間1間の南北棟である。心々距離は桁行方向2.88m、梁間方向1.84mをそれぞれ測る。4個の柱穴の深さは32cmとほぼレベルをそろえている。遺物はこれらの柱穴より若干量の土器片が出土しているが、いずれも小片で図示できるものはなかった。

第76図 建物址1平面・断面図 (S = 1 : 80)



第77図 住居址 6 平面・断面図 ($S = 1 : 80$)



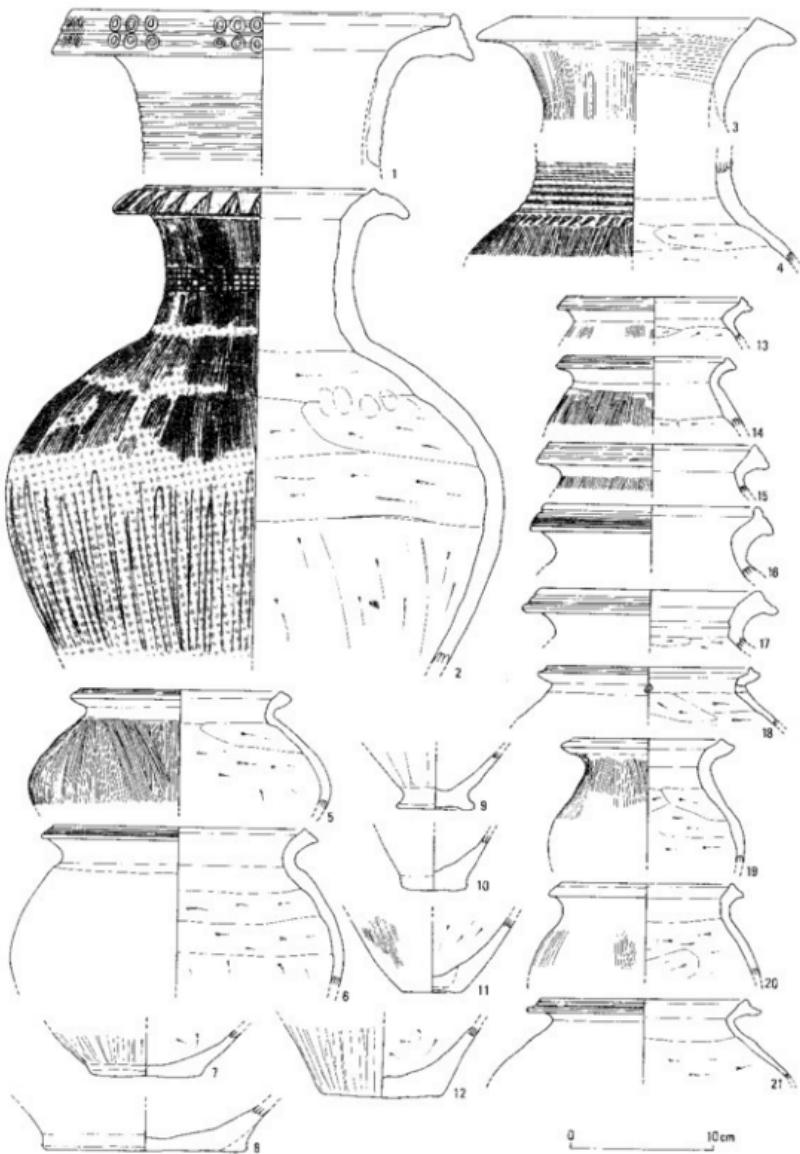
土壤1 (第78図)

7号墳の周溝東側のたちあがり付近で検出された。長辺約2.1m、短辺約1.28m、深さ50cmの方形土壙である。断面は逆台形を呈するが、西半は古墳の周溝により削平を受けている。埋土は3層の分層され、中・上層より大量の土器片と石包丁の欠損品が出土した。

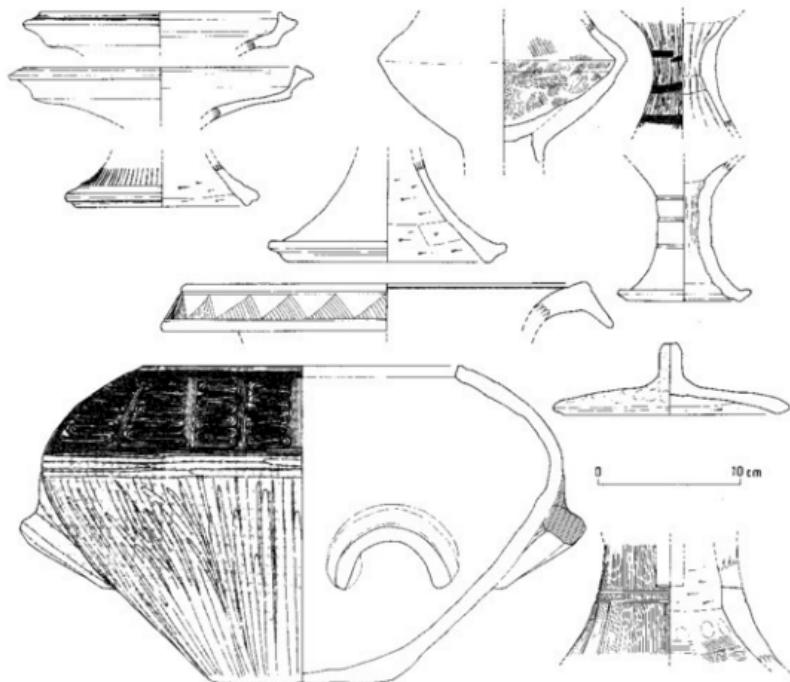
土壤1出土土器 (第79・80図)

壺形土器 (1~4) の口縁部は、上下に拡張をみせるもの (1) と、下方にひきのばし気味に仕上げるもの (2, 3) の2種に大別できる。2は口縁端部に鋸歯文、胴部下半はタテ方向のヘラミガキ、その上半から頸部にかけてはタテ方向のハケメ、さらに頸部中央にはハケメを施した後櫛描の格子目文がそれぞれ施されている。いずれの壺形土器もあらゆる

第78図 土壙1平面・断面図 ($S=1:40$) 手法を駆使し、さらに2・4の外面には赤色顔料が塗布される等、装飾性の強い土器群の様相を呈する。壺形土器の口縁部形態も壺形土器の特徴と同様、上下拡張、あるいは下方ひきのばしのいずれかを示す。胴部外面は大半がハケメ調整を施し、6・19・20にはスヌが付着していた。7~12は底部片で、外面の調整はヘラミガキ、ナデ、ハケメとバラエティーに富む。22~24は高杯形土器の杯部である。浅い皿状を呈するもの (22・23) と、深めの椀形を呈するもの (24) がある。24は内面に乱方向の細かいハケメを施す。端部の形状は欠損しているための不明である。25~28は脚部片。25はタテ方向の細かいヘラミガキで全体を整えた後、櫛描文を施す。外面全体に赤色顔料が塗布されていた。26の脚端部にもタテ方向の櫛描文が一周する。これらには22・23の杯部がセットとなり後半前半の中でも古い様相を呈する一群である。29・32は器台形土器。29は口縁部の破片で、下方にひきのばした端部外面には規則正しい鋸歯文がめぐる。内面には赤色顔料の塗布が認められた。32は胴部片。外面にはタテ方向の細かいハケメ、2条の凹線文が施され、さらに長方形の透し穴が4方向に穿たれる。30の蓋形土器の外面には指ナデによる凹凸が顕著に残る。内面は縁に沿ってスヌが付着していた。31は鉢形土器である。口径10.8cm、最大径36.6cm、器高22.8cmを計る。平底状の底部から斜め上方に向けてゆるやかに開き、肩部で屈曲し口縁部に至る。肩部よりやや下がったところに把手が取り付く。胴部下半はタテ方向の、肩部はヨコ方向のヘラミガキで入念に仕上げ、その上半から口縁部にかけては優美な流水文により器面を飾る。さらに外面全体には赤色顔料の塗布が認められた。口縁端は指ナデによって仕上げており、若干の面を形成する。内面は磨滅が激しく調整等は不明である。



第79圖 土塘 I 出土土器 (1) ($S = 1 : 4$)



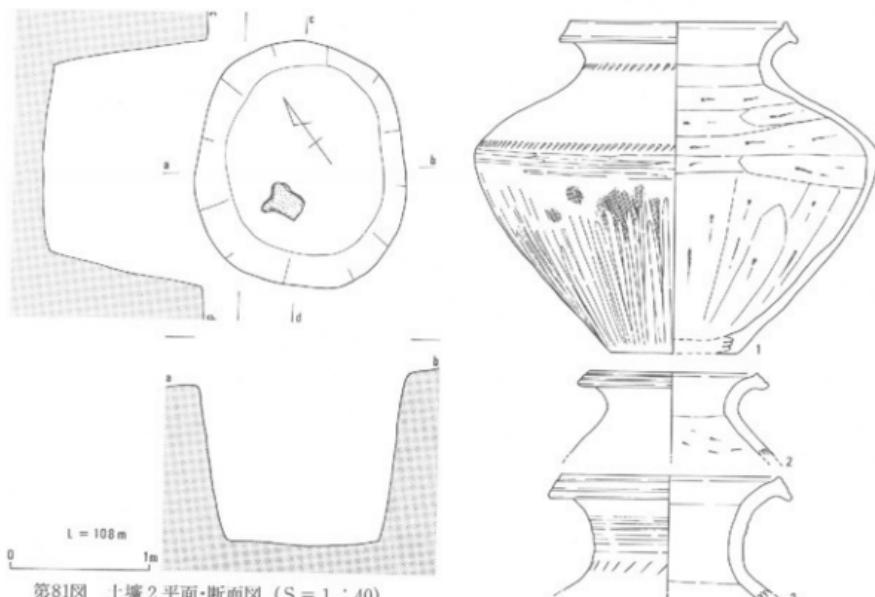
第80図 上塙1出土土器(2) (S = 1 : 4)

土塙2(第81図)

8号墳の下方に重複して検出された。長辺1.8m、短辺1.48mを測る楕円形土塙である。床面からの深さは約1.16mで、断面は逆台形を呈する。埋土中より若干量の土器が出土した。

土塙2出土土器(第82図)

出土した壺形土器、甕形土器とともに、口縁端部を上下にひきのばす共通の特徴をもつ。1~3は壺形土器で、2の頸部は退化回線がめぐり、その下端には竹管文が施される。3の胴部は大きく張り出し、最大径にはかすかな刺突文が観察された。さらに頸部屈曲部にも同様の刺突文がめぐっている。胴部下半はハケメの上をヘラミガキで仕上げている。内面の調整は粗いヘラケズリ。4・5は甕形土器、7は鉢形土器と思われる。



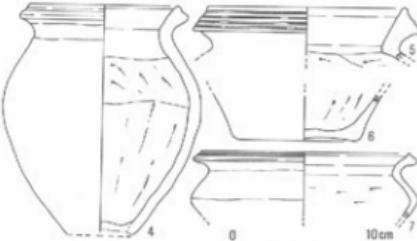
第81図 土壌2平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

土壤3 (第83図)

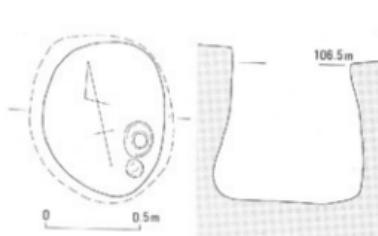
住居址6の外方へ流れ出る床溝を切り込んで位置する。上面の長径82cm、短径68cm、床面の長径88cm、短径78cmの小土壌で、断面はフラスコ状を呈する。深さは80cmを測り、埋土中ならびに床面より若干量の土器片と石斧が出土した。

土壤3出土土器 (第84図)

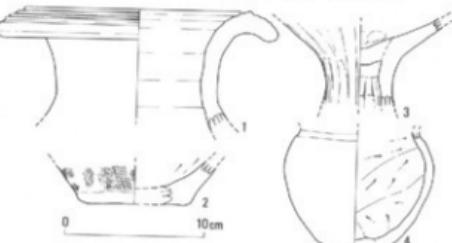
1・4は床面出土。1は臺形土器で、下方に大きくくひきのばした口縁端部外面には数条の明瞭な凹線文がめぐる。3は高杯形土器。接合部分に



第82図 土壌2出土土器 ($S = 1 : 4$)



第83図 土壌3平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

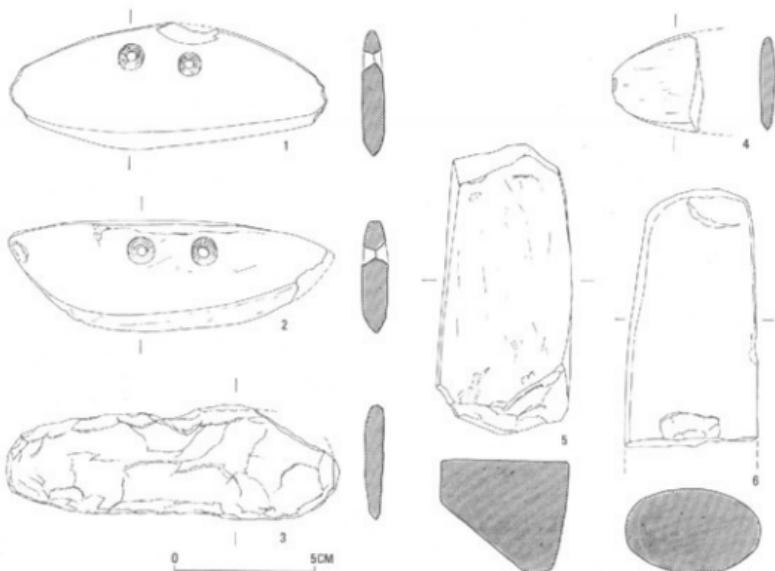


第84図 土壌3出土土器 ($S = 1 : 4$)

は円盤充填の手法が観察される。外面はタテ方向のヘラミガキで仕上げる。4は小形土器である。外面は指ナデにより平滑に仕上げ、内面は乱方向の細かなヘラケズリを施す。口縁端部は欠損しているが、面をもたずまるく仕上げるタイプの端部が付くものと思われる。

出土石器（第85図）

2・3・5は住居址4より出土した。2は粘板岩製磨製石包丁である。現存最大長11.3cm、最大幅4cmを測る。穿孔は表裏両面からなされており、断面中央部に稜を形成する。入念な研磨によって鋭利な刃部に仕上げている。3は石包丁の未製品と考えられる。石材は白雲母石英片岩を使用。5は頁岩製の砥石である。全面を砥面として使用しており、滑らかな砥面には無数の削痕が残る。1は住居址5出土の千枚岩製磨製石包丁である。2と同様、2ヶ所の紐孔は表裏両面からなされている。最大長11.3cm、最大幅4.5cm、最大厚7mmを測り、鋭利な刃部を有する。4は結晶片岩製磨製石包丁の欠損品で、土壌1より出土した。小片ながらも、端部には多数の研磨痕が観察される。6は玢岩製磨製石斧。刃部を欠くが、現存長で8.9cm、最大幅4.6cm、最大厚3cmを測る。この他にも図示していないがサヌカイト製のスクレイバーが1点、土壌1より出土した。



第85図 出土石器 (S = 1 : 2)

- (註 1) 新日鉄の大澤正己氏に分析を依頼している。本報告書には間に合わないため結果を公表することはできないが、肉眼観察の限りではいずれの古墳の鉄滓も鍛冶の最終工程、それも製品完成時に生じる鉄滓との見解を得ている。
- (註 2) 近藤義郎「中宮 1 号墳発掘調査報告」「佐良山古墳群の研究」1952年
- (註 3) " " 「四つ塚13号墳の発掘」「藤山原」1954年
- (註 4) 穴沢義功氏の御教示による。
- (註 5) 保田義治「茶山古墳群」津山市教育委員会1989年
- (註 6) 大澤氏から「炭素量0.1%前後で焼きなましも充分施された鉄素材」との報告を受けている。
- (註 7) 阿部 滋、藤井孝章、吉本由紀「弘住遺跡発掘調査報告」広島市教育委員会1983年
この中で、熊本県きつね塚例も報告されている。

IV ま と め

1 古墳の調査

古墳の築造方法について

古墳の築造方法、特に木棺直葬の形態をとるものについて今回の調査で明らかになった点を明らかにしておきたい。まず旧表土面であるが、炭化物が認められることから、立木伐採後焼却したことが理解される。この事実は古墳の調査ではほぼ普遍的に認められる現象である。次に、この面に盛土をしていくわけであるが、これはいずれの古墳も基本的に旧表土と地山の互層により行われている。この際、全面に均一的に盛り上げていくのではなく、周囲が高くなるように盛り上げていく。この結果、盛土はドーナツ状を呈し、中心部分が凹んだ状態となる。この凹んだ部分に墓壙を設定するのである。そして、その凹みを一気に埋め墳丘を整形している。一気という意味は1層という意味で地山の赤黄褐色が用いられている。この埋め上がりが旧表土の黒色土と互層になることはない。以上のような築造方法をもつ好例として、津山市六ツ塚古墳群（註 1）等をあげることができよう。

次に、周溝についてふれることにしよう。周溝と呼ぶか否かは別として、なんらかの凹みが墳丘の周間に認められたのは、2・4・6・9号墳である。1号墳は北側が破壊されているので不明であるが、5号墳は確実に認められない。これら周溝状の凹みが認められるものは原則として山側に位置するもので一周するものはない。谷側はいずれも自然傾斜に解消されている。2・3・6・7号墳は規模、墳丘周囲の半分以上にめぐることをみても意識的なものが感じられるが4・8号墳等は平面形をみても理解されるようにいびつである。このことは周溝とするよりも盛上の採土痕と考えた方がよきようである。

墳丘及び周溝の遺物について

墳丘頂部に甕等の遺物が置かれていることが今回の調査で明らかになった。墳頂に遺物をもたないものは7号墳だけである。7号墳は墳丘がかなり削平されており、埋葬時の状態は想像の域を脱する。とりあえず現状では把握できなかった。各古墳の墳頂遺物は次のとおりである。盃壺、追葬等の二次的移動も考えられるが、現状認識で取り扱う。1号墳は大型の甕がある。2号墳は主体部が不明であるため、墳丘遺物と主体部との上下の位置関係が把握できないが、表土除去時に出土したものをあげると須恵器中型の甕、杯、土師器甕がある。3号墳は杯だけである。4号墳は最も多く大型甕、甕、高杯、脚付の中型甕がある。この他に本古墳群中唯一のハニワが伴う。5号墳には大型甕が置かれていた。6号墳には中型の甕がある。8号墳は大型の甕が認められた。9号墳には大型の甕、甕、杯等がある。

次に、周溝の遺物をみてみると2号墳と7号墳からだけ遺物が出土している。この2古墳の周溝は規模の点において、本古墳群中最もしっかりしたものである。こうしてみてみると、いずれの古墳にも中型ないし大型の甕が墳頂あるいは周溝に置かれたことが理解される。甕以外の組成をみてみると、甕、高杯、杯、脚付甕等がある。いずれにしても埋葬後、一定の祭祀行為の所産にかかるるものである。特に、2号墳の周溝床面には大型の甕が小さく打ち砕かれた状態で出土している。そして、その周囲には焼土面が広がっていることから、火を伴っていたことも理解されるのである。

埋葬施設について

本古墳群の埋葬形態には竪穴式石室と木棺直葬の二種がある。5号墳、8号墳が各2主体、9号墳が5主体あり、合計すると15主体になる。この内、竪穴式石室は3で残り12は木棺直葬である。複数主体をもつ5号墳、8号墳、9号墳についてみてみよう。5号墳は竪穴式石室を中心主体で木棺が追葬されている。8号墳は逆で木棺直葬が中心主体で石室が追葬に用いられている。9号墳は中心主体、追葬主体共に木棺直葬というように全て異っている。

竪穴式石室をもつものは1号墳、5号墳第1主体、8号墳第2主体である。1号墳石材は角礫であり、5号墳第1主体と共に通する。5号墳第1主体の石材には部分的に丸味をおびた河原石も使用されているが、大半は角礫である。一方、8号墳第2主体の石材は全て河原石で礫床をもつ。石材の種類と礫床の有無が1号墳、5号墳第1主体と8号墳第2主体の大きな相異点である。ちなみに、礫床をもち、河原石による竪穴式石室古墳の例としては才ノ船1号墳、3号墳(註2)、茶山1号墳(註3)等がある。いずれも陶邑での田辺編年(註4)のTK47型式に比定されているものである。本古墳群の築造時期については後述するが、8号墳第2主体もTK47型式に、5号墳第1主体はTK23型式に相当する。この時期決定が正しければ、竪穴式石室に河原石が採用されるようになるのはTK47型式以降で、それ以前は角礫によるものが多いということができるかも知れない。

1号墳、8号墳は石室の高さが不明であるが、5号墳は上端が確認できた。これは石室の目地に使用されている黄褐色粘土質土が最上段の石列を覆っていたことから判断できた。従って、石室の天井は天井石で覆うのではなく、板材であることが明らかとなった。1号墳、8号墳も天井石を想定させるような石材はなく、5号墳同様板材の可能性が考えられる。

木棺直葬例で注目すべきことは、12の主体部全てについて鉄釘が1点も出土しなかった事である。3号墳で棺痕跡が明らかになったように、確實に棺は使用されているのにもかかわらず鉄釘が出土しないということは、組み合わせ式の木棺とすることができる。さらに、4号墳主体部で側板側に石が対に配されていたが、これは組み合わせ式木棺の側板をささえるためのものと考えられる。同様の手法は津山市大畑1号墳（註5）等にもみられる。

次に、主体部の主軸方向についてみてみよう。1号墳～9号墳の計12主体の内、5号墳第1主体の竪穴式石室だけが方向を異なる。他の主体は竪穴式石室、木棺直葬を問わずほぼ北西～南東方向に主軸がむくが、5号墳第1主体だけはこれらに直交するような方向をとっている。細かくみれば東西方向の一群もそれぞれ異なるが、3号墳、4号墳、6号墳、7号墳、8号墳9号墳の各主体部はN-50°～60°-Wの範囲にはばおさまるものであり一定の秩序を保っている主体部の遺物について

主体部は前述のように竪穴式石室と木棺直葬の二種があるが、竪穴式石室は完存するものが多く、遺物の配置状況については多くを語ることができない。従って、ここでは木棺直葬例に限って遺物の出土位置による検討をしてみたい。

まず最初に、棺外遺物と棺内遺物に分ける必要があろう。4号墳、6号墳、7号墳、8号墳第1主体、9号墳第1主体を検討してみよう。これらの各主体は全く同様の遺物配置を示している。すなわち、足元方向に須恵器、土師器等の上器類を一括して置き、頭位方向には土器類が一切ないということである。木棺直葬式例によくみられる杯を枕に転用するということも採用されていない。さて、これらの遺物であるが、4号墳を例に考えてみよう。4号墳には27個体の須恵器が置かれていた。この配置状態をよく観察すると、小口の北側コーナー部分に相当する箇所が直角になっていた。この事は棺を置いた後、小口側と側板側に須恵器を配した結果と考えられる。このことから一括の上器は棺外とすることができる。では棺内の配置状況はどうであろうか。4号墳では一括遺物の反対側から金環、玉類が出土していることから頭位方向は南東方向であることは容易に判断できる。他の古墳も同様の方向であることは間違いない。その場合、左手の配置に鉄刀が（7号墳、9号墳）、胸部付近に刀子が（4号墳、8号墳第1主体）それぞれ配される。以上、まとめると棺内には金環、玉類の装身具（4号墳だけ）、刀子と鉄刀の類だけということになる。それと、4・9号墳の鉄滓ということになる。他に、土器類以外の棺外遺物には6号墳の鉄鎌、鉄斧、ノミ、鉄滓、7号墳の鉄鎌、鉄鎌、鉄斧、9号墳の鉄鎌、ノミがある。

3号墳の鉄製品は棺痕跡が確認できたため、いずれも棺内である。しかし、ここで指摘しておかなければならないことは、頭位方向、鉄剣の配置状況は他の古墳と同じでありながら唯一主体部に土器類を伴わなかったことである。

次に、土器類以外の遺物の組成について、1号墳、3号墳、4号墳、5号墳第1主体、6号墳、7号墳、8号墳第1主体、9号墳第1主体を取り上げ検討することにする。まず、刀剣類であるが、6号墳を除き他は全て鉄刀、鉄剣、刀子のいずれか、あるいは複数をもつ。このことは本古墳群に限らず、古墳の埋葬施設には基本的にみられる共通理解であろう。剣は3号墳5号墳、刀は7号墳、9号墳から出土している。他は刀子だけである。馬具をもつものは3号墳だけである。装身具は4号墳、5号墳第1主体、工具をもつものは5号墳第1主体、6号墳、7号墳、9号墳である。農具は5号墳第1主体、6号墳、7号墳である。これらを農具と工具についてまとめると、共有するもの2、農具だけももの1、工具だけのもの1、どちらももたないもの4主体ということになる。さらに紡錘車を伴うものは8号墳第1主体と9号墳第3主体がある。また、鉄津を作りものには4号墳、5号墳第1主体、6号墳、9号墳がある。これらの遺物の組み合わせを考えると多種多様の組み合わせが考えられ、副葬品による被葬者の生業の特定はしにくいという結論に達する。

古墳の築造時期について

古墳の年代を決定する際には編年が最も進んでいる須恵器が用いられることが多い。本古墳群についても須恵器を中心にして、必要に応じて他の遺物についてもふれることにする。

まず、杯の口径・器高についてみた場合、大きく2つのグループに分けることができる。それは、口径13cm前後、器高5cm前後の一群と口径12cm前後、器高4.5cm前後の一群である。各主体部ごとに細かくみれば個体差があり多様であるが、巨視的にみれば大きいグループ、小さいグループに傾向として大別してさしつかえない。各主体部ごとにグルーピングをすると、前者の大きい一群に属するものは5号墳第1主体、6号墳、7号墳、8号墳第1主体、9号墳第1主体となる。後者的小さい一群に属するものは2号墳、3号墳、4号墳、8号墳第2主体、9号墳第2～5主体となる。1号墳には杯が伴出していないため不明。5号墳第2主体のものは、これらの一群より明らかに後出のものである。さて、各群の特徴の相異点についてみてみよう。蓋あるいは身の外面のヘラ削りであるが、小さいものは天井部なり、底部から3分の1位までが多い。2分の1まで及ぶものも例外的に認められる。一方、大きいものは基本的に2分の1以上に及ぶ。それ以下のものも若干認められる。この点が最も大きな相違点である。次に、傾向として、小さいものは天井部なり、底部が丸味をおびるのに対し、大きいものではやや扁平になることが指摘できる。5号墳第2主体のものは身口縁端部が丸くおさまる。蓋の天井部と口縁部を画する張り出しが鈍いなど全体的にシャープさに欠ける。これらの特徴を田辺編年に求めると、大きい一群がTK23、小さい一群がTK47、5号墳第2主体がMT15に、中村編年（註6）

では I 型式 4 段階、I 型式 5 段階、II 型式 1 段階にそれぞれ対応するものと考えられる。そして、実年代は大きい一群が 5 世紀末頃、小さい一群が 6 世紀初頭、5 号墳第 2 主体が 6 世紀前半頃という年代観が得られよう。

次に、刀剣について考えてみよう。本古墳群の中で剣をもつものは 3 号墳と 5 号墳である。6 号墳を除き、他は刀である。このことは 6 世紀の段階になると剣は姿を消すということが一般的に指摘されている（註 7）が、須恵器の編年でも明らかなように本古墳群が 6 世紀前後に位置することが剣からも考えられる。もう 1 点、ハニワの問題がある。ハニワは 4 号墳にだけ 3 個配置されていた。このハニワには須恵質と土師質の 2 種があり、須恵質のものは朝顔形でタテハケを基本とするが部分的にヨコハケも共存する。土師質のものは円筒でヨコハケである。タガは退化してどちらも扁平である。これらのハニワは何か異質な感じがあり、違和感を感じるが、あえて川西編年（註 8）にあてはめるならばⅣ期の終わりからⅤ期の初め頃になろう。年代的には 6 世紀初頭を前後する時期であり、須恵器の編年とも符号する。

1 号墳は須恵器の良好な資料がないため、須恵器による編年はできない。しかし、時期を知る手がかりとして鉄鎌がある。1 号墳からは 5 本の鉄鎌が出土したが、長頭鎌と平根式が共存している。他の古墳は全て長頭鎌である。長頭鎌は 5 世紀中頃から出現し、逆に平根式は長頭鎌の出現をもって徐々に減少し、5 世紀後半頃には姿を消すと考えられている（註 9）。1 号墳の鉄鎌はこの時期にはほぼ相当するものであり、鉄鎌で見る限りでは本古墳群中では古い時期に属す。それに前述したが堅穴式石室の角礫使用の面からもそのことが補強できよう。

さて、以上のような各主体部の時期をもとに築造順序を整理すると、本古墳群は 2 期にわたって形成されることになる。まず最初に 1 号墳、5 号墳、6 号墳、7 号墳、8 号墳、9 号墳がほぼ同一時期を共有しながら成立したことになる。立地をみれば 1 号墳を除き、他は丘陵の先端部にまとまって位置している。次に 2 号墳、3 号墳、4 号墳が同じように築造され、全ての墳丘が成立し古墳群が確立される。この際、新たに墳丘を形成せず追葬という形で 8 号墳と 9 号墳に埋葬される例も採用されている。この違い、すなわち新たに墳丘を築く被葬者と既存の古墳に追葬される被葬者の違いをどのように理解するのかについては様々な構図が考えられるが、現在は明確な見解をもちあわせていない。その後、5 号墳に一度だけ追葬が行われ、本古墳群の全て埋葬が終了することになる。

以上、紙数の関係で多くを語ることは許されないが、古式段階での古墳群の形成に費やされる時間よりも、1 古墳内の追葬にかかる時間の方が幅があるという指摘（註 10）を再度実証してまとめとする。

2 弥生時代の調査

各遺構の時期と集落について

長歛山北古墳群で検出された弥生時代の遺構は、住居址 6 軒、建物址 1 軒、土壙 3 基を数える。本調査は発掘区が限られたものであったため、集落の全容が必ずしも明らかになったとは言いがたいが、得られた事実関係をもとに各遺構について若干の考察を試みたい。いずれの遺構からも土器片が出土しており、それらはすべて後期前葉に属する。このうち住居址 4 と住居址 5 の関係から住居址間の距離を考慮した場合、同時併存は当然あり得ない。(註 1)。さらに住居址 2 の床溝は住居址 3 によって明らかに切られており、この点からも先と同様の指摘ができるであろう。したがって弥生時代の遺構については、少なくとも 2 時期区分が可能であり、この傾向は出土土器にも反映されている。

まず住居址 2・5・6-1 (註 12) の 3 軒が同時併存したと考えられる。この 3 軒から出土した土器は、共通して後期前葉のうちでもやや古めの様相を呈する。中でも高杯形土器の杯部形態や脚部外面を飾る櫛描文は、この時期の特徴を顕著に示すものである。次の時期になると、住居址 1・3・4・6-2 を中心としたものへと移っていく。その変化は出土した器台形土器・高杯形土器に顕著に現れている。高杯形土器には前述のタイプに加えて、やや深めの受け部から斜め上方にひらき、端部は面をもたずまるくおさめる、いわゆる上東式にみられるものが目立つようになる。また器台形土器の口縁部には一様に鋸歯文をめぐらす等、装飾性の強いこともこの一群の特徴といえよう。後期前葉のやや新しい様相が看取できる。一方、住居址では 7 本柱、8 本柱と人形の住居が目立つようになってくる。

建物址 1 が位置する地点では、周辺からも多数のビットが検出されており、さらに建物が増える可能性も考えられる。建物址 1 出土の土器片は、時期を決定するには極めて微量であるが、後期前葉の住居址群に伴う建物であることは確実であろう。

3 基の土壙からは比較的多量の土器片が出土した。特に土壙 1 では流水文を施した鉢形土器が出土しており、これについては後に若干の考察を加える。いずれの土壙も後期前葉に属するものである。

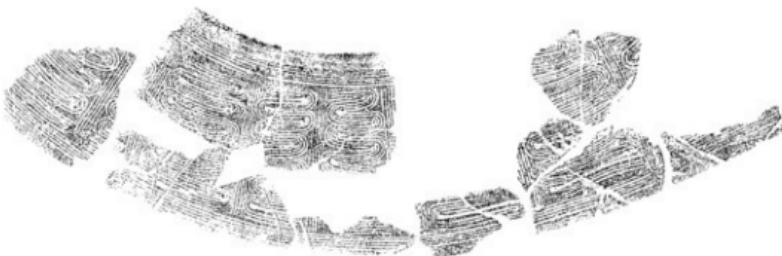
以上、長歛山北古墳群の弥生時代の遺構について述べた。周辺の遺跡で同じく後期前葉に属するものとして小原遺跡 (註 13) 等が挙げられる。

土壙 1 出土の流水文土器について

後期前葉に属する土壙 1 から、流水文で器面を飾る鉢形土器が出土した。この時期まで流水文が残る例は、県内はもとより全国でも非常に珍しい。

従来、流水文は弥生時代中期前半の土器の標準となる畿内地方に特有の文様であった。前期末に篦描で若干描かれていたものが櫛描の流水文となり、やがて中期末から後期、凹線文の出現により衰退すると一般に考えられている。(註 14)

さらに流水文は、銅鐸を飾る文様としてもよく知られており、その最盛期は中期前半と、上器を飾る流水文のそれと期を一つにする。(註 15)



第86図 土壙1出土流水文土器拓影

岡山県内で銅鐸の出土した遺跡は20遺跡25例を数えるが（註16）、中でも岡山市高塚遺跡から出土した1例は興味深い（註17）。この銅鐸は後期前半の集落の一部をなす貯蔵穴群の一画で出土した。それは埋納土壙の中に横位に鏃を垂直にした状態で検出された点、銅鐸の中から後期初頭の土器片が出土した点から、埋納時期を後期初頭に限定できる。しかしながら、銅鐸の型式は体部に流水文を施す中期の特徴を色濃く示している。この矛盾は、中期に製作された銅鐸が伝世し、後期初頭に埋納されたと理解することによって解消されよう。

のことから、中期の流水文が、しばしば後期初頭の弥生人の目に触れる文様であったことが想像できるわけだが、今回上壙1から出土した鉢形土器はこれを裏付ける良好な資料と言えるだろう。この資料は、器形や同土壙から出土した他の土器片から後期前葉の位置づけがなされるにもかかわらず、その表面を飾る文様は中期の流水文である。後期初頭に製作された土器に、人々が見聞きして伝えた優美な流水文で器面を飾る。これは同時に、外面全体に赤色顔料を塗布する等、この土器が極めて特別の意味を有することとも無関係ではあるまい。土器の形と文様は、器の用途とその製作技術、さらには当時の社会や集團関係の変化を敏感に反映するものであるが、今回の発見はこれらの認識をさらに深める上で極めて興味深いものと言えるだろう。

（註1）河本 清「六ヶ塚古墳群」『岡山県史考古資料』 1986年

（註2）中山俊紀「オノ哈古墳群」 津山市教育委員会 1988年

（註3）保田義治「茶山古墳群」 津山市教育委員会 1989年

（註4）山辺昭三「須恵器大成」 角川書店 1981年

（註5）津山市教育委員会が発掘調査と実施。 報告書未刊 1981年

（註6）中村 浩『和泉陶邑窯の研究』 柏書房1981年

（註7）橋本博文「百練の利刀を賜う」「古墳時代の工芸」 講談社 1990年

（註8）川西宏幸「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」 第64巻第2号 1978年

（註9）小林謙・「弓矢と甲冑の変遷」「古代史発掘」 第6巻講談社 1975年

（註10）今井 光「原始社会から古代国家の成立へ」「津山市史」 第1巻 1972年

- (註11) 藤田憲司「単位集団の居住領域—集落研究の基礎作業として」『考古学研究』31巻2号
1984年、都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
住居址4と5は切り合っているため、同時併存はあり得ない。
- (註12) 住居址6は本文中でも述べたように、柱穴、壁体溝のあり方から2時期に区分される。
出土土器は少量であるが、これらすべてが後期のうちでも前葉の新段階以前に限られるため、この2時期をそれぞれ6-1(4本柱住居)、6-2(7本柱住居)として、他の住居との併行関係を考えることにする。
- (註13) 行田裕美、小郷利幸、木村祐子『小原遺跡』津山市教育委員会1991年
- (註14) 坪井清足『舜生』『陶磁大系』2 1969年 平凡社
- (註15) 田中 琢『鐸・劍・鏡』『日本原始美術大系』4 1977年 講談社
- (註16) 『岡山県史』第2巻 原始・古代I 1991年 山陽新聞社
- (註17) 岡本寛久他『高塚遺跡(2)フロヤ調査区1区』『岡山県埋蔵文化財報告』20 1990年

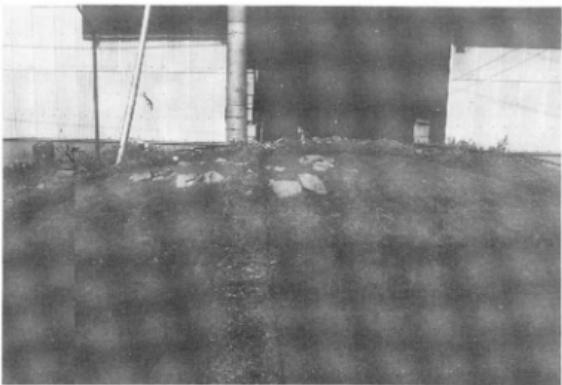
図 版



9号噴出土子持耳



土壙 1 出土流水文土器



1号填



1号填主体部



2号填



3号墳



3号墳主体部



4号墳



4号墳主体部



5号墳



5号墳主体部



6号墳主体部



6号墳



7号墳主体部



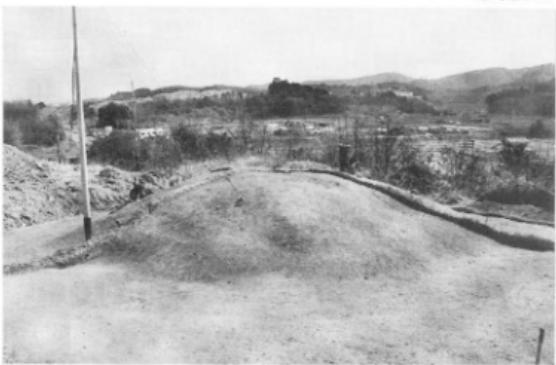
7号墳



8号墳



8号墳主体部



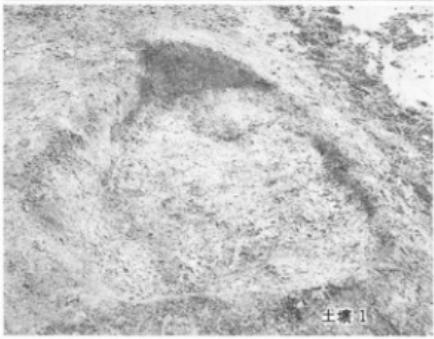
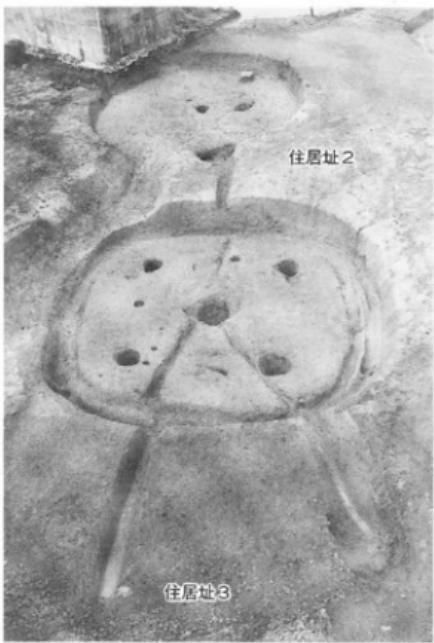
9号墳

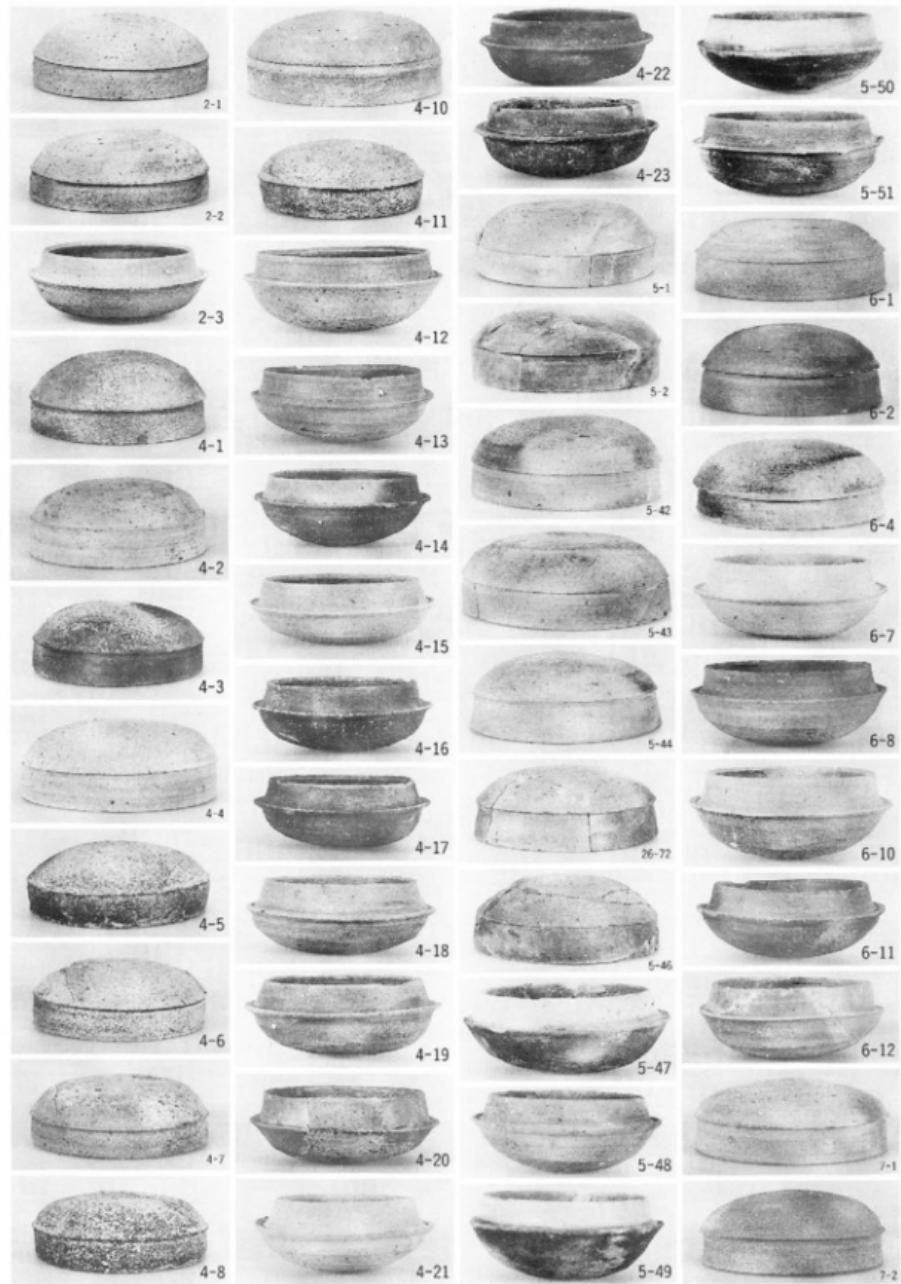


9号墳主体部

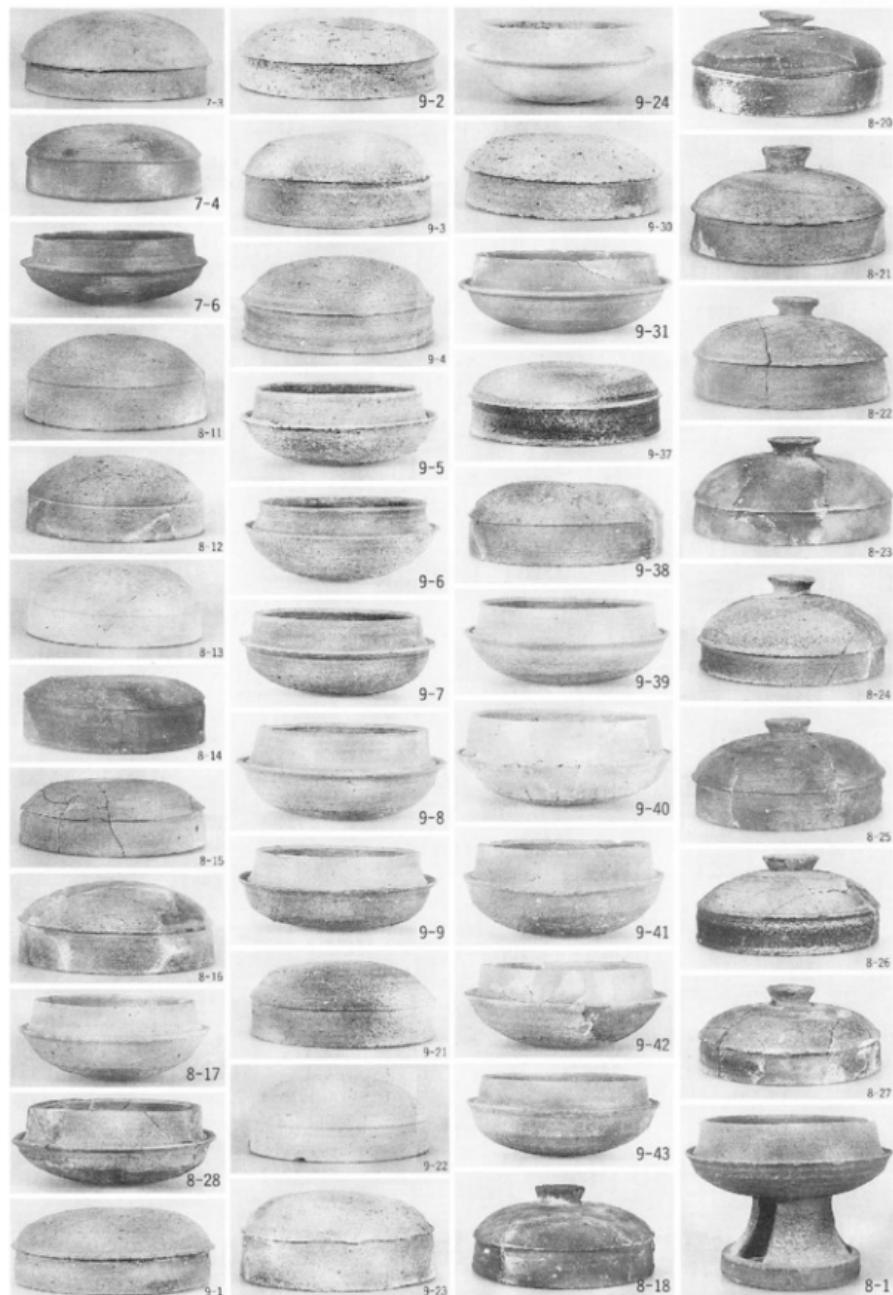


現地説明会



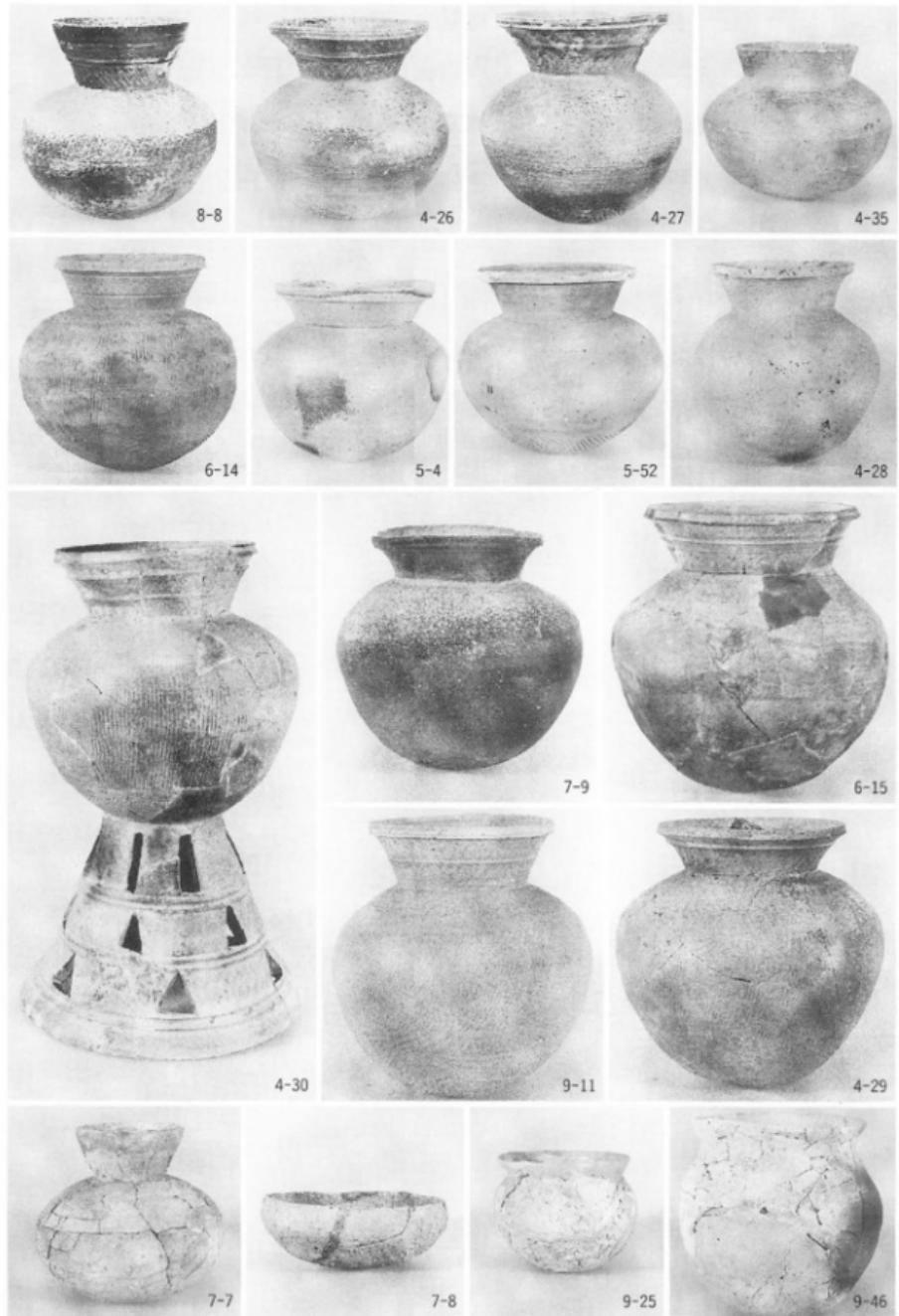


出土遺物(1) (左の数字は古墳名、右の数字は実測図番号)



出土遺物(2)





出土遺物(4)



7-11



8-10



9-12



6-17



8-9



8-35



5-54



8-6



9-33



2-8



4-37



5-55



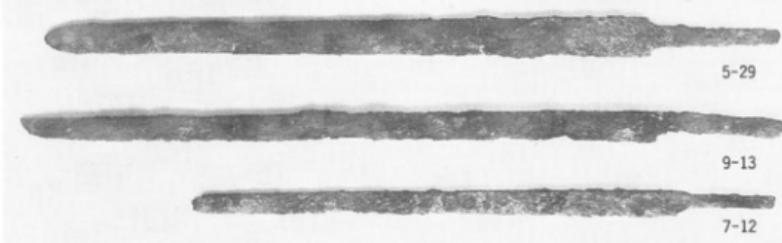
5-56



7-17



4-42



出土遺物(6)